岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集

ゴッソー遺跡発掘調査報告書

一般県道明戸種市線改良事業関連遺跡発掘調査

㈶岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

ゴッソー遺跡発掘調査報告書

一般県道明戸種市線改良事業関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成11年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,000箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因になりました県道整備事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場に立って県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、九戸郡種市町の一般県道明戸種市線改良事業に関連して平成12年度に発掘調査を実施したゴッソー遺跡の調査成果をまとめたものであります。調査の結果、遺跡は縄文時代中期後半から後期頃の集落跡であることが明らかとなったほか、旧河道跡が幾重にも存在し、この影響を受け一段上の段丘より流入したと思われる縄文時代前期初頭から晩期に至るまでの各時期の様々な土器が出土し、種市地域の歴史を考える上で貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました久慈地方振興局土木部、種市町教育委員会をはじめとする関係機関・関係各位に心より感謝申し上げます。

平成13年３月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　千　葉　浩　一

例　　言

1．本報告書は、九戸郡種市町第18地割字小路合65－１ほかに所在するゴッソー遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、一般県道明戸種市線改良事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は久慈地方振興局土木部と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、久慈地方振興局土木部の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号はＩＦ58－0341、遺跡略号はＧＳ－00である。

4．野外調査及び室内整理は丸山浩治、井上信介が担当した。野外調査期間は平成12年４月18日から８月30日、室内整理期間は平成12年９月１日から平成13年３月31日である。

5．報告書の執筆は、委託者である久慈地方振興局土木部の三浦一将氏が「Ｉ　調査に至る経過」を、その他は丸山浩治が担当した。

6．遺物の鑑定は次の機関に委託した。
石器・石製品の石材鑑定：花崗岩研究会

7．座標原点の測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。
座標原点の測量：株式会社藤森測量設計
空中写真撮影：東邦航空株式会社

8．野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・御助言を頂いた（五十音順、敬称略）。
宇部則保、小田野哲憲、木戸口俊子、君島武史、小久保拓也、酒井久雄、佐々木浩一、千田政博、芽野嘉雄、千葉啓蔵、成田滋彦、野田松雄

9．野外調査においては、種市町教育委員会、種市町民の方々から多大なご協力・ご援助を頂いた。作業参加者は次の方々である（五十音順）。
一郷ふく、大井博文、大粒来守美子、大粒来勝一、折戸きみ子、御厩敬光雄、加藤房子、金澤ふみ子、川戸靖子、北沢正枝、小松勝美、権現堂リヨ子、佐々木礼子、佐藤フミ子、下町ヒデ、関靖スミ、外久保志美子、高際忠男、高田みち子、竹高勝雄、竹高清、大道静江、粒来由蔵、中下啓蔵、野口栄一、流踊末蔵、向折戸節子、向折戸照美、米内浩美

10．室内整理作業参加者は次の方々である（五十音順）。
岩舘富士子、小澤達子、熊谷尚子、小性堂祐子、猿館由紀、白澤真紀子、陣場智子、瀬川幸子、高橋妙子、滝花益美、千葉秀子、西川君子、宮野妙子、村上洋子、本館京子

11．発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

12．調査成果は現地説明会資料等に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

凡　　例

1．遺構図の用例は下記の通りである。

(1) 遺構実測図の縮尺は、竪穴住居跡が1／50、土坑が1／40、・柱穴状小土坑群が1／60を基本とした。ただし遺構規模の関係上これに合わない図面もあるため、その都度スケール及び縮尺を付した。

(2) 推定線は破線で表記した。

(3) 層位は基本層序にローマ数字、各遺構覆土等にアラビア数字を使用した。

(4) 土層色調の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。

(5) 図面中の土器は「Ｐｏ」、礫は「Ｓ」の略号で表記した。

(6) 挿図中で使用した網掛け及びスクリーントーンの主な用例は下図の通りである。これ以外にも使用箇所があるが、それらについては各図毎に用例を付した。

2．遺物実測図の用例は下記の通りである。

(1) 各遺物の縮尺は、立体土器が1／4及び1／3、破片土器・石核・石核石器・礫塊石器が1／3、土製品・剥片石器・石製品が1／2、銭貨が1／1を基本とした。ただし一部異なるものもあり、同一図版中に異縮尺の遺物が混在する箇所もあるため、その都度スケール及び縮尺を付した。

(2) 遺物の計測位置及びスクリーントーンの用例は下図の通りである。計測値は、推定値の場合 []、残存値の場合 () で示した。

(3) 石器説明文の面休呼称は、表面は素材の背面及び実測図中の左側正面をさし、裏面とは腹面（主剥離面）及び実測図中の右側正面をさす。

4．遺構写真図版は縮尺不定である。遺物写真図版については、各図に縮尺を付した。

5．国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。

6．引用・参考文献は各章末に記した。

〈遺構図版網掛け・スクリーントーン用例〉

焼土

植物根などによる攪乱

〈遺物図版網掛け・スクリーントーン用例〉

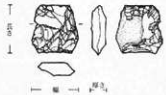
土器剥落

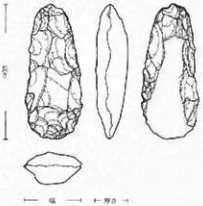
磨り面

敲打痕
(石斧製作時のもの)

敲打痕
(使用によるもの)

〈遺物計測位置の用例〉





目　　次

序
例言
凡例
目次

本　　文

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　調査と整理の方法
　1．野外調査……1
　2．整理方法……2
Ⅲ　遺跡の立地と環境
　1．遺跡の位置……5
　2．地理的環境……5
　3．地形・地質概観……5
　4．周辺の遺跡……6
　5．基本層序と調査地区内の地形……9
Ⅳ　検出遺構と出土遺物
　1．竪穴住居跡……17
　2．土坑……25
　3．柱穴状小土坑……34
Ⅴ　遺構外出土遺物
　1．土器……36
　2．土製品……43
　3．石器……44
　4．石製品……49
　5．銭貨……49
Ⅵ　まとめと考察
　1．遺構……89
　2．遺物……89

報告書抄録
職員一覧

表

第１表　周辺の遺跡一覧……７・８
第２表　ＩＣ６ａ住居跡内ピット観察表……24
第３表　柱穴状小土坑計測値……34
第４表　土器観察表（１）……78
第５表　土器観察表（２）……79
第６表　土器観察表（３）……80
第７表　土器観察表（４）……81
第８表　土器観察表（５）……82
第９表　土器観察表（６）……83
第10表　土器観察表（７）・土製品観察表……84
第11表　石器観察表（１）……85
第12表　石器観察表（２）……86
第13表　石器観察表（３）……87
第14表　石器観察表（４）・石製品観察表・銭貨観察表……88
第15表　グリッド・層別土器出土量一覧……90

挿　図

第１図　遺跡の位置……３
第２図　周辺の地形……４
第３図　地形分類図……５
第４図　各段丘面の被覆火山灰……６
第５図　周辺の遺跡……７・８
第６図　基本層序……10
第７図　調査区土層断面図（１）……12
第８図　調査区土層断面図（２）……13
第９図　前回調査区とのグリッド相関図……14
第10図　遺構配置図・旧河道跡位置図……15・16
第11図　－ＩＣ７ｆ住居跡……21
第12図　ＩＣ３ｃ住居跡……22
第13図　ＩＣ５ｂ住居跡……23
第14図　ＩＣ６ａ住居跡……24
第15図　土坑（１）……31
第16図　土坑（２）……32
第17図　土坑（３）……33
第18図　柱穴状小土坑……35
第19図　遺構内出土遺物（１）……50
第20図　遺構内出土遺物（２）……51
第21図　遺構内出土遺物（３）……52
第22図　遺構内出土遺物（４）……53
第23図　遺構内出土遺物（５）……54
第24図　遺構外出土遺物　土器（１）……55
第25図　遺構外出土遺物　土器（２）……56
第26図　遺構外出土遺物　土器（３）……57
第27図　遺構外出土遺物　土器（４）……58
第28図　遺構外出土遺物　土器（５）……59
第29図　遺構外出土遺物　土器（６）……60
第30図　遺構外出土遺物　土器（７）……61
第31図　遺構外出土遺物　土器（８）……62
第32図　遺構外出土遺物　土器（９）……63
第33図　遺構外出土遺物　土器（10）……64
第34図　遺構外出土遺物　土器（11）……65
第35図　遺構外出土遺物　土器（12）……66
第36図　遺構外出土遺物　土器（13）……67
第37図　遺構外出土遺物　土器（14）……68
第38図　遺構外出土遺物　土器（15）……69
第39図　遺構外出土遺物　土器（16）……70
第40図　遺構外出土遺物　土器（17）・土製品……71
第41図　遺構外出土遺物　石器（１）……72
第42図　遺構外出土遺物　石器（２）……73
第43図　遺構外出土遺物　石器（３）……74
第44図　遺構外出土遺物　石器（４）……75
第45図　遺構外出土遺物　石器（５）……76
第46図　遺構外出土遺物　石器（６）・石製品・銭貨……77

写真図版

カラー写真図版１　仕切付土器……95
カラー写真図版２　仕切付土器・製塩土器……96
カラー写真図版３　製塩土器……97
カラー写真図版４　遺跡遠景・旧河道跡……98

写真図版１　調査前風景・土層断面（１）……99
写真図版２　土層断面（２）・遺物出土状況……100
写真図版３　－ＩＣ７ｆ住居跡……101
写真図版４　ＩＣ３ｃ住居跡……102
写真図版５　ＩＣ５ｂ住居跡……103
写真図版６　ＩＣ６ａ住居跡……104
写真図版７　土坑（１）……105
写真図版８　土坑（２）……106
写真図版９　土坑（３）……107
写真図版10　土坑（４）……108
写真図版11　柱穴状小土坑……109
写真図版12　遺構内出土遺物（１）……110
写真図版13　遺構内出土遺物（２）……111
写真図版14　遺構内出土遺物（３）……112
写真図版15　遺構内出土遺物（４）……113
写真図版16　遺構内出土遺物（５）……114
写真図版17　遺構外出土遺物　土器（１）……115
写真図版18　遺構外出土遺物　土器（２）……116
写真図版19　遺構外出土遺物　土器（３）……117
写真図版20　遺構外出土遺物　土器（４）……118
写真図版21　遺構外出土遺物　土器（５）……119
写真図版22　遺構外出土遺物　土器（６）……120
写真図版23　遺構外出土遺物　土器（７）……121
写真図版24　遺構外出土遺物　土器（８）……122
写真図版25　遺構外出土遺物　土器（９）……123
写真図版26　遺構外出土遺物　土器（10）……124
写真図版27　遺構外出土遺物　土器（11）……125
写真図版28　遺構外出土遺物　土器（12）……126
写真図版29　遺構外出土遺物　土器（13）……127
写真図版30　遺構外出土遺物　土器（14）……128
写真図版31　遺構外出土遺物　土器（15）・
土製品……129
写真図版32　遺構外出土遺物　石器（１）……130
写真図版33　遺構外出土遺物　石器（２）……131
写真図版34　遺構外出土遺物　石器（３）……132
写真図版35　遺構外出土遺物　石器（４）……133
写真図版36　遺構外出土遺物　石器（５）……134
写真図版37　遺構外出土遺物　石器（６）……135
写真図版38　遺構外出土遺物　石器（７）……136
写真図版39　遺構外出土遺物　石器（８）……137
写真図版40　遺構外出土遺物　石器（９）……138
写真図版41　遺構外出土遺物　石器（10）・
石製品・銭貨……139

Ⅰ　調査に至る経過

ゴッソー遺跡は、一般県道明戸種市線緊急地方道路整備事業の実施に伴い、その事業区域内に存することから、発掘調査を実施することとなったものである。

本業務は、当地区に種市町営野球場などの公共施設があるとともに、東海寺をはじめとする神社・仏閣も点在する地域であり、周辺地域の交流の発信基地となっている。また、一般国道45号、種市町中心部へアクセスする重要な路線である。しかし、現道状況は、幅員４～５ｍ程度であり、待避所もないことから普通車両は勿論、小型車相互のすれ違い時においても危険を伴う個所が多数確認される狭隘路線である。そのため、地元周辺住民からも早期改良整備が望まれていることから早期解消を目指し、平成10年度より執行中である。

本地区は、岩手県教育委員会が既にゴッソー遺跡として確認しているため、岩手県教育委員会は久慈地方振興局と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

Ⅱ　調査と整理の方法

１．野外調査

(1)　グリッド設定（第９・10図）

本遺跡付近は平成６年にも調査が行われており（岩文振埋文　1996）、今回のグリッド設定はこの前回調査の際に設定された平面直角座標第Ｘ系にのる一辺40ｍの大グリッドをそのまま延長する形で行った。小グリッドは大グリッドをそれぞれ10等分した一辺４ｍの規模である。グリッドの名称も前回調査時のものを延長して使用している。すなわち、起点を北西隅とし、大グリッドは東方向へローマ数字、南方向へ大文字アルファベットを順に与え、小グリッドに対しては東方向へアラビア数字を０～９まで、南方向へ小文字アルファベットをａ～ｊまで順に与えるという方法である。ただし、今回調査範囲の半分以上は前回設定された大グリッドＩＡ～ＩＥ区ラインよりも西側に当たるため、これ以西の大グリッド名称についてはローマ数字に－（マイナス）を付けて、西方向へ－Ⅰ、－Ⅱとなるよう設定した。起点が北西隅である点に変更はない。これらの組み合わせにより、大グリッド名は－ⅡＡ、－ＩＢ、ＩＣ、小グリッド名は大グリッド名を冠して－ⅡＡ１ａ、－ＩＢ２ｂ、ＩＣ３ｃのように表した。

なお、グリッド設定のため設置した基準点の成果値は以下の通りである。

基準点１　Ｘ＝44,600.000　Ｙ＝75,100.000　Ｈ＝22.982m

基準点２　Ｘ＝44,540.000　Ｙ＝75,020.000　Ｈ＝29.376m

(2)　遺構の名称

平成６年度調査分報告の際の遺構名称は、調査時に用いていた調査区画名による呼称法を、遺構数が少ないという観点から室内整理の段階で第１号土坑、第５号陥し穴のように遺構種別毎に番号を冠する形に変更している。しかし、今回はこの方法を取らず、調査時に使用した－ⅡＣ３ｃ、－ＩＤ４ｄなどの調査区画名を遺構種別名に冠した－ⅡＣ３ｃ竪穴住居跡、－ＩＤ４ｄ土坑のような呼称法をそのまま用いることとした。今回調査で検出された遺構数もさほど多くはないが、室内整理期間に余裕がなく、変更により混乱をきたす恐れがあると考えたためである。ご了承いただきたい。

(3) 粗掘・遺構検出

最初に、地形の状態、及び事前に岩手県教育委員会文化課が行った試掘の結果に応じて４×２ｍのトレンチを32箇所程設定し、人力による粗掘を行った。遺構の有無の確認と地層の状況把握が目的である。これにより各地点における大まかな遺物・遺構検出層位及び土層堆積状況を確認し、重機による表土除去可能地域を定めた。重機による表土除去を行った範囲は、調査区南西側にあたる－ⅡＤ・－ⅡＥ・－ⅡＦ・－ＩＦの各区及び－ＩＤ区西半部で、これ以外の区域はＩ層からの遺物出土量が多いため人力で除去することとした。人力による試掘時、－ⅡＥ区南半以南では３箇所のトレンチを設定し、第Ⅶ層上面まで層位毎に掘削・検出を進めたが遺物・遺構とも無検出であった。さらに、重機による表土除去後に行った検出作業においても遺物・遺構とも無検出であったため、重機を使用して第Ⅶ層まで層位毎に掘削し、順次検出を行うという方法を取った。その結果、どの層位においても遺物・遺構が全く検出されなかったため調査終了とし、排土置場とした。－ⅡＥ区南半以南以外の区域については、遺物が検出された付近は随時小グリッド境に、また遺構が検出された場合はその性格に応じそれぞれ断面を設定し精査を行った。

(4) 遺構の調査方法・遺物の取り上げ方

竪穴住居跡の調査は四分法で、その他の遺構については原則的に二分法で行い、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を順次行った。

フィルムは35㎜モノクローム・カラーリバーサル、及び６×９㎝モノクロームの３種を使用し、調査終了時点でセスナ機により空中写真を撮影した。

実測図の縮尺は20分の１を基本としたが、種類や規模の大小により10分の１、50分の１を用いた。なお、調査の進行上土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみにとどめた遺構もある。

遺物は、遺構内出土のものは遺構名と出土層位（上位・中位・下位・床面直上・床面・底面）、床面・底面出土のものは出土位置を、遺構外出土のものは小グリッド毎に層位を記して取り上げた。ただしＩ層出土遺物中には大グリッド名のみのものもある。

２．整理方法

(1) 遺物整理

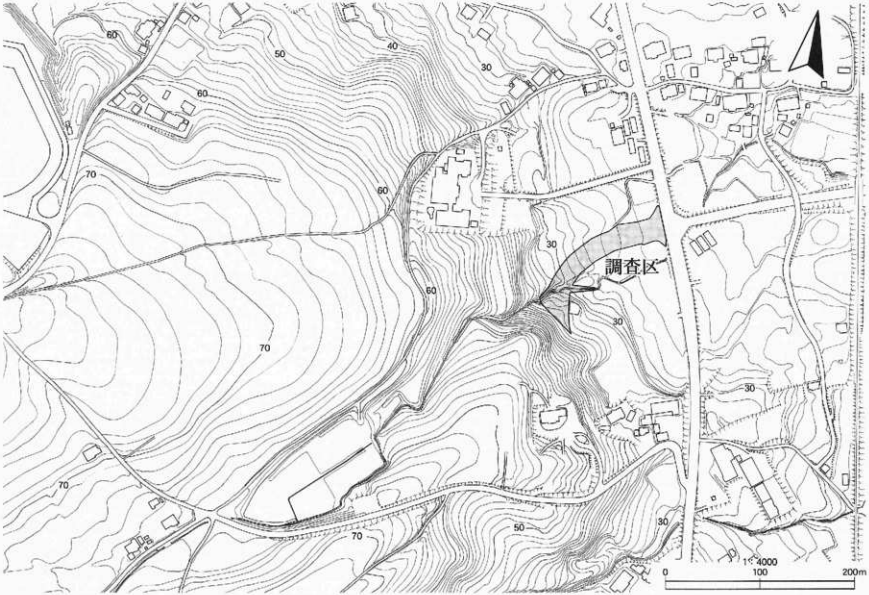
現場で水洗しきれなかった遺物の水洗から開始し、注記、仕分け、接合、掲載遺物の選別、写真撮影、実測、法量等の計測、トレースといった手順で行った。単年度発刊ということもあり整理期間が限定され、掲載遺物点数はかなり縮小している。特に土器破片、石核石器・礫塊石器類は各器種分類における典型的なもののみ選択して図化し、選から外れたものについては可能な限り写真図版で掲載するよう努めた。

(2) 遺構図面

現場で記録した遺構平面図・断面図の照合、土層注記・レベル等の確認、図面の合成、トレースという手順で進めた。期間の制約があるため、合成の必要であった図面以外は第２原図の作成を行っていない。

遺構図版は遺構種類で大別し、大グリッド毎に－ⅡＥ区（竜頭川右岸）、－ⅡＤ区、－ＩＣ区、－ＩＤ区、ＩＣ区、ＩＢ区（以上、竜頭川左岸）の順に掲載してある。グリッド名からすれば不整な順序であるが、調査範囲の形状及び地形等の観点を優先し、このようにすることとした。

第１図　遺跡の位置



第２図　周辺の地形

Ⅲ　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（第1図）

本遺跡の所在する種市町は、岩手県最北端に位置し、北は青森県三戸郡階上町、東は太平洋、西は軽米町、大野村、南は久慈市と接しており、総面積は167.57㎢である。本遺跡は、東日本旅客鉄道八戸線種市駅から南約1㎞の地点、太平洋の現海岸線から西へ約500mの海岸段丘上にあり、北緯40°23′53″東経141°43′3″付近に位置する。

本遺跡周辺は、縄文時代の石器・土器、及び古代の土師器散布地として以前から周知されていた場所であり、これまでに2回調査されている。1回目は、昭和36年に岩手大学草間俊一教授によってなされた学術調査で、記録によると、その調査地点は標高50m程の丘陵の頂上近く、海に面した東傾斜面と記されており、今回の調査地点より一段上の中位段丘上と考えられる。遺構は発見されず、縄文前期の土器多数、貝殻文のある縄文早期の1小片、弥生式土器と思われる撚糸を押捺した土器片3片、土師器らしい刷毛目のある1小片などの遺物が発見されている。2回目は、平成6年4月13日から7月29日までの約3ヶ月半にわたり当埋蔵文化財センターが行った町道種市漁港線建設に伴う緊急調査で（岩文振埋文　1996）、調査区域は今年度調査区域の東側、国道45号を挟んだ向側に当たり、標高19～20mの低位段丘上に立地している。調査面積は3,456㎡で、検出遺構は縄文時代の陥し穴6基、土坑2基、焼土遺構10基、時期不明の柱穴状小土坑33基、出土遺物は縄文時代早期・前期・中期・後期、弥生時代の土器（縄文時代前期初頭が主体）が中コンテナ（40×31×20㎝）約18箱分、礫石器を主体とした石器が小コンテナ（40×31×10㎝）約40箱分、及び享保か元文年間の所産と考えられる寛永通宝が1点である。

今回調査区域の標高は約22.5～35mで、平成6年調査範囲と同じ低位段丘～中位段丘前の段丘涯にかけて立地している。現況は畑地で、一部は山林である。

2．地理的環境

種市町は、西は北上山地の北端にあたり、階上岳（種市岳　740.1m）、久慈平岳（706.3m）など山岳地帯があり山林地帯が大部分を占める。それらの山裾部から川尻川、和座川・大浜川、有家川・高家川がそれぞれ並行し東流して太平洋に注ぐ。東側は沿岸沿いに狭隘ではあるが平地が展開し、集落を形成する。気候は年平均気温が10.4℃で、三陸地方特有のやませが海霧をもたらし、低温と日照不足が農業に大きな影響を与えている。気温は、海岸部では夏は涼しく、冬は内陸部より高い。

3．地形・地質概観（第3・4図）

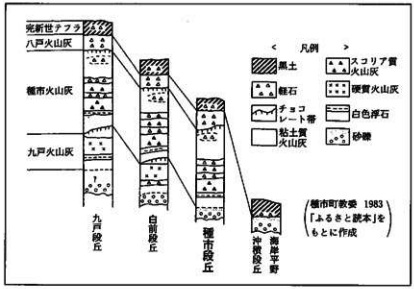
本遺跡の周辺では、南北方向にほぼ同一の地形配列が観察される。すなわち町境をなす階上岳・久慈平岳を中心とする山地が西側に展開し、その東側に

（石田ら、1969を部分使用）

第3図　地形分類図

は時期を異にする海岸段丘が、数段の階段状ないし緩斜面状に展開し、最後に狭隘な海岸平野を伴って太平洋へと続く。

西側に連なる山地群は、階上岳山地・久慈平岳山地・黒間山地に大別される。階上岳は、頂上部は緩傾斜を呈すが、高度を減ずるに従って傾斜の度合いを増し、下部の段丘面に接する付近から再び傾斜が緩やかになる凹型斜面である。南東側斜面は他斜面に比し侵食が進み、急傾斜である。久慈平岳は、階上岳よりは低いものの頂上南西部に緩斜面をもち、太平洋側へ連なる斜面形状も階上岳に等しい。東方には高取山・二ツ森などの小山塊が残丘状に存在する。黒間山地は大野村との境界に当たり高度は400m程度で、起伏量も少ない。これら山地群は、岩質学的には粗粒石英閃緑岩～花崗閃緑岩～石英モンゾニ岩によって構成され、硬質である。



第４図　各段丘面の被覆火山灰

山地群から延びる凹型斜面は九戸段丘へと移化する。九戸段丘は北上山地東縁部及び東翼に沿って分布し、種市周辺では標高120～240mで、内陸方へ高さを増すとともに傾斜も急となって、起伏量が増大する。その形状はむしろ丘陵の名に相応しい。この起伏は、原初的なものである可能性も無しとしないが、段丘面形成後の開析によるところが大きい。この段丘面には、基盤の花崗岩類の上に九戸火山灰をのせる。

九戸段丘の外縁には白前段丘が分布する。標高60～100m程度の小段丘の集合で、海方へ緩斜面をなしている。九戸段丘と接する高位面では扇状地状の形状を特徴とする。

種市段丘は、八木付近から八戸市湊まで海岸線に沿って帯状によく発達し、本遺跡周辺では15～25m前後の標高値を示す。段丘面は平坦で、比較的柔らかい上部白亜系種市層を基盤とし、その上に水成堆積物・種市火山灰・八戸火山灰・完新世テフラをのせる。

本調査区は種市段丘上及び白前段丘に至る段丘涯上にあり、前述の地質構成を呈する。

引用・参考文献

石田琢二　他　1969 『東北地方における第四紀海水準変化』地団研専報15号

岩手県　1979 『北上山系開発地域土地分類基本調査　三戸・階上岳』

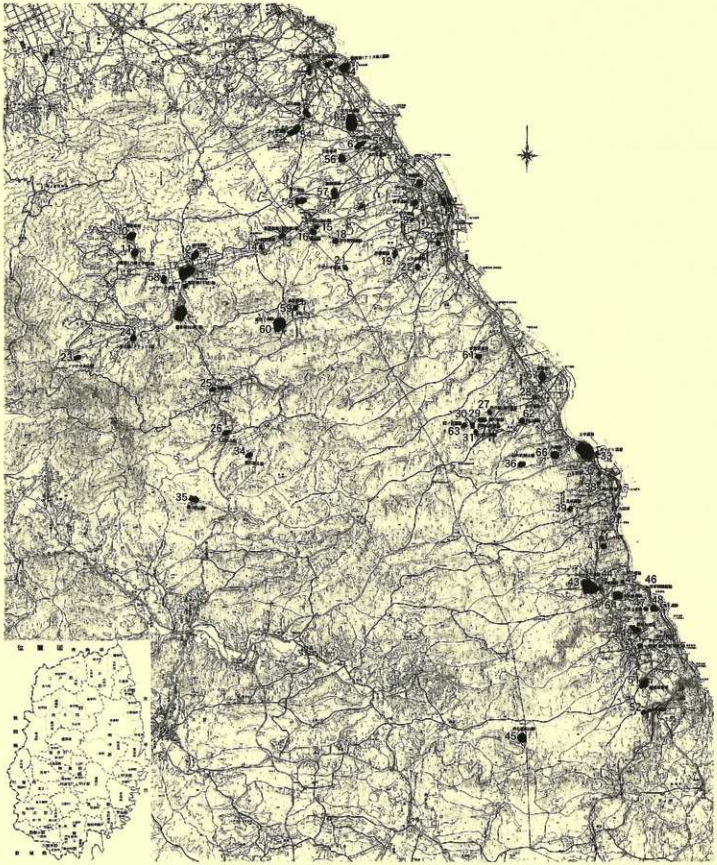
種市町教育委員会　1983 『ふるさと読本〈地質編〉』

平凡社　1990 『岩手県の地名』日本歴史地名体系３

岩文振埋文　1996 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第238集

４．周辺の遺跡（第５図・第１表）

種市町管内に所在する遺跡は、前回報告時の52遺跡から15遺跡増加し合計67遺跡を数えるに至っている。各遺跡の位置・主な出土遺物・時代等を第５図・第１表に示した。52遺跡については前回報告時に詳細に述



第５図　周辺の遺跡

No	遺跡名	種別			遺構・遺物	時代	所在地	備考
1	埋蔵城（山城）	城館	跡		堀	中世	城内	
2	角ノ浜	散布	地		縄文土器	縄文	角ノ浜	
3	伝宗	集落	跡		縄文土器（中期）、石斧、石鏃類	縄文中期	伝吉	
4	蝦夷森（アイヌ森）	集落	跡		縄文土器（中期・晩期）、フレーク	縄文中期・晩期	角ノ浜字蝦夷森	
5	千歳平	集落	跡		縄文土器（前期・晩期）、フレーク	縄文前期・中期	愛宕字千歳平	
6	平内	集落	跡		縄文土器（前期・中期）、フレーク	縄文前期・中期	平内	
7	庄館	城館	跡		堀	中世	田尻	59年調査
8	塚手	散布	地		縄文土器（晩期）、土師器	縄文晩期、古代	欅子	
9	トチの木	散布	地		縄文土器（後期・晩期）	縄文後期・晩期	欅子字トチの木	
10	荒巻	集落	跡		縄文土器（中期）、弥生土器	縄文中期、弥生	荒巻	
11	八幡館	城館	跡		堀	中世	武沢	59年調査
12	城内	集落	跡		土師器（長頸瓶、壺）	古代	城内	
13	愛宕館跡	城館	跡		堀の一部	中世	愛宕館	59年調査
14	館野館	城館	跡		堀	中世	館野	59年調査
15	小手野山金山	砂金採取	跡		石組	江戸	愛沢	
16	上猿	墓数	跡		無	中世	愛沢	59年調査
17	柳生城（平城）	城館	跡		無	中世	城内	59年調査
18	小手野民俗	城館	跡		五輪塔	中世	愛宕館	59年調査
19	新道館	城館	跡		三郭～三重堀	中世	秋葉	59年調査
20	ゴッソー	集落	跡		縄文土器（早～晩期）、製塩土器	縄文早～晩期	小路合字ゴッソー	
21	たけの子	散布	地		縄文土器（後期・晩期）	縄文後期・晩期	たけの子	
22	大久保	散布	地		縄文土器（前期・後期・晩期）、土師器、石斧	縄文前期・後期・晩期、古代	大久保	
23	ノソウケ金山	砂金採取	跡		石組	江戸	大沢	
24	小菅生館	城館	跡		無	中世	大沢	59年調査
25	宿戸館	城館	跡		二重堀	中世	宿戸	59年調査
26	大谷鉄山	製鉄	跡		鉄滓	江戸	大谷	
27	海の館	散布	地		縄文土器（後期・晩期）、石器	縄文後期・晩期	上岡谷	
28	宿戸館	城館	跡		堀	中世	宿戸	59年調査
29	西の館	城館	跡		堀、土塁	中世	宿戸	59年調査
30	強屋の田	散布	地		縄文土器（晩期）、石器、土偶	縄文晩期	上岡谷字西強の田	
31	上岡谷	散布	地		縄文土器（後期）	縄文後期	上岡谷	
32	大平	集落	跡		縄文土器（早期・晩期）、弥生土器	縄文早期・晩期、弥生	八本字大平	
33	ホックリ貝塚	貝		塚	縄文土器（晩期）、須恵土器、カキ	縄文晩期	八本字ホックリ	
34	畑沢鉄山	製鉄	跡		鉄滓	江戸	大谷	
35	湯口鉄山	製鉄	跡		鉄滓	江戸	大谷	
36	小田の沢鉄山	製鉄	跡		鉄滓	江戸	八木	
37	八木貝塚	貝		塚	縄文土器、製塩土器、獣角	縄文晩期	八木	
38	猫山	集落	地		縄文土器（中期・後期）	縄文中期・後期	八本字猫山	
39	長坂	散布	地		縄文土器（後期・晩期）	縄文後期・晩期	大字小子内字長坂	
40	小子内貝塚	貝		塚	貝、獣骨廃棄	縄文	大字小子内字長坂	
41	黒マッカ貝塚	貝		塚	縄文土器（後期）、土師器、石器	縄文後期、古代	大字有家	
42	海所戸	集落		跡	縄文土器（晩期）、石斧	縄文晩期	大字有家	
43	上のマッカ	集落		跡	縄文土器（前期・中期・後期）、フレーク	縄文前期・中期・後期	大字有家	
44	有家館	城館		跡	堀（埋められている）	中世	大字有家	59年調査
45	芦毛渡跡山	鉄鉱		跡	鉄滓	江戸	大字中野	
46	有家御用屋	殿舎	絵	跡	土礎	江戸	有家	59年調査
47	大宮Ⅱ	散布	地		縄文土器（早期）、弥生土器	縄文早期・弥生	大字中野字大宮	
48	大宮Ⅰ	集落	跡		縄文土器（早期・前期・晩期）、弥生土器	縄文早期・前期・晩期、弥生	大字中野字大宮	
49	長根塚	散布	地		縄文土器	縄文	大字中野字長根	
50	中野館	城館	跡		堀（埋められている）	中世	中野	59年調査
51	仙表塚	集落	跡		縄文土器	縄文	大字中野字仙表	
52	薬師沢	集落	跡		縄文土器（前期・晩期）、石刀	縄文後期・晩期	大字中野字薬師沢	
53	浜通	散布	地		縄文土器（中期）、磨製石斧	縄文	角ノ浜通	
54	東ノ沢	散布	地		縄文土器（中期）	縄文	弦巻北ノ沢	
55	平内Ⅲ	集落	跡		縄文土器（中期）、石器	縄文	平内	
56	石倉	集落	跡		縄文土器（後期）、土師器	縄文	石倉	
57	独鈷	散布	地		石棒	縄文	愛沢薬師	
58	ニキクドウ	散布	地		縄文土器（晩期）、土師器	縄文・奈良	城内字ニサクドウ	文舞出土
59	宮成	散布	地		縄文土器	縄文	高屋	
60	宮成Ⅱ	集落	跡		縄文土器（中期・晩期）	縄文	高屋	
61	戸頃家	散布	地		縄文土器（晩期）、土偶	縄文	戸頃家	いく津遺跡
62	岡山	散布	地		縄文土器	縄文	宿戸岡山	
63	田ノ沢	散布	地		縄文土器（晩期）	縄文	宿戸田ノ沢	
64	岡長根	散布	地		縄文土器	縄文	大字中野字岡長根	
65	中内Ⅱ	散布	地		縄文土器（後期）	縄文	中内	
66	大張	散布	地		縄文土器・石器	縄文	宿戸大沢	
67	館	集落	跡		縄文土器（中期）	縄文	宿戸館	

第１表　周辺の遺跡一覧

べられているのでそちらを参照していただくこととして、今回は新しく登録された15遺跡及び前回不明であった遺跡について若干記述する。まず、新たに登録された遺跡は№53の浜通遺跡から№67の館遺跡で、全て縄文時代に属する。集落跡が5、散布地が10である。中期の遺物出土が確認されているのは浜通・北ノ沢・平内Ⅲ・高取Ⅱ・館の5遺跡、同じく後期が石倉・平内Ⅱの2遺跡、晩期がニサクドウ・高取Ⅱ・戸類家・田ノ沢の4遺跡となっている。櫃割・高取・向山・向長根・大浜の5遺跡は時期が特定できていない。各時期別の遺跡立地を見てみると、中期5遺跡のうち現海岸線から600m以内のものが3遺跡、2km以上離れているものが2遺跡で、高取Ⅱ遺跡は5km以上離れている。前者の標高は概ね30m～40mである。後期の2遺跡は、両者とも現海岸線から700m以上離れており、その標高は40～50m以上となる。晩期の4遺跡では、現海岸線から一番近い戸類家遺跡で約1.4km、これ以外は更に山側に立地している。最も遠いニサクドウ遺跡で約8km程ある。標高は戸類家遺跡で約80～90m、以外は全てこれ以上を測る。

以上のように、中期・後期に関しては、これまでの分布状況と大差ないようである。一方晩期は、全て中位～高位段丘面での発見であり、これまでよりさらに内陸側へ分布が広がることとなった。

なお、ニサクドウ遺跡では奈良時代の土師器も出土しており、縄文時代と奈良時代の複合遺跡と考えられる。また、石倉遺跡でも土師器の出土が確認されている。

次に、前回報告において、岩手県遺跡台帳（1994年時のもの）に同名の登録が無いため不明とされた17遺跡中、新登録等により明らかになったものについて述べたいと思う。この17遺跡とは、『種市町の歴史』（草間俊一　1963）に記載されている44遺跡中の、高取、にしゃくどう、梅内、向ながれ、館野、和座、向山、渋谷、北野沢A・B、浜通り、石倉、櫃割、大谷地、久慈平、麦沢、戸類家の各遺跡のことである。このうち、今回追加15遺跡中の№53浜通遺跡（＝浜通り）、№54北ノ沢遺跡（＝北野沢Aか？、遺物時期から判断）、№56石倉遺跡（＝石倉）、№57櫃割遺跡（＝櫃割）、№58ニサクドウ遺跡（＝にしゃくどう）、№59・60高取遺跡・高取Ⅱ遺跡（＝ともに高取）、№61戸類家遺跡（＝戸類家）、№62向山遺跡（＝向山）、№64向長根遺跡（＝向ながれ）の計10遺跡がそれぞれ（＝）内の遺跡に相当するものと思われる。また、名称は異なるが位置及び遺物内容から、№4蝦夷森遺跡（渋谷）、№5千敷平遺跡（麦沢）、№12城内遺跡（梅内）の各3遺跡はそれぞれ同一遺跡と考えられる。さらに、『種市の土器・石器』（種市町歴史民俗資料館　1975）中に記載のあるいくつなみ貝塚は、№61戸類家遺跡と同遺跡であることも判明している。

引用・参考文献

草間俊一　1963　『種市の歴史』種市町役場

種市町歴史民俗資料館　1975　『種市の土器・石器』

岩文振埋文　1996　『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第238集

5．基本層序と調査地区内の地形（第6～8図・写真図版1～2）

(1) 基本層序（第6図・写真図版1）

今回の調査区は、平成6年度調査区の南西側、標高約22.5～35m付近にあり、等高線に斜行するような形で設定されている。途中、調査区を横断するようにワウザイ川という小河川が東流しており、これを境として北側・南側では土層堆積状況が若干異なる。川の左岸に当たる北側は緩やかに東傾する緩斜面地で、東端は中位段丘との段丘縁にあたっている。現況は畑地で、それ以前には水田として利用されていた時期もあったという。これらの行為により大半の部分が攪乱を受けている。特に、水田耕作が行われていた部分にあたる斜面下部・調査区東側の地形は、削平等により階段状に改変されている。また、旧河道跡が確認されてお

り、これによる土壌侵食・流入が見られ、地点により様相を異にしている。一方、川の右岸にあたる南側は東頻・北傾する斜面地で、低位段丘～中位段丘の段丘涯上にあたる。現況は山林である。そのため木の根による攪乱が部分的に見られるものの、耕作等による削平はほとんどなく、比較的良好な堆積状況を呈す部分が多い。ただし、沢状地形を呈する部分もあり、また、南西調査区外は中位段丘面へ向け更に急傾斜の上り勾配を呈することから、同面からの土砂等の流出・流入が常行していたものと考えられる。

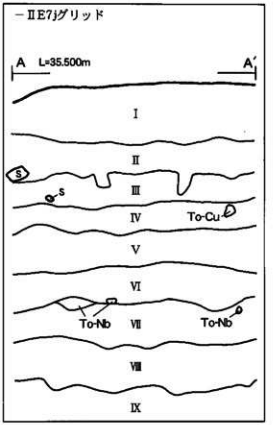
基本層序は、調査区各地点の土層観察後、比較的良好な堆積状況の認められた－ⅡＥ７ｊグリッド部分を基準として採用した。前述のように、地点によっては層厚を異にしたり欠落する層がある。また旧河道跡のために異なる土層の堆積がみられる区域もある。

第Ⅰ層　10ＹＲ1.85／1　黒色　シルト
粘性弱　締まり弱　現表土または耕作土。植生根や耕作によって攪乱を受けている。耕作土内に遺物を多量に含む。

第Ⅱ層　10ＹＲ1.7／1　黒色　シルト
粘性弱　締まり中　黒ボク土。植生根・耕作による攪乱を受けている。ワウザイ川右岸及び左岸旧河道跡部分以外には堆積がほとんど認められない。遺物を多量に含む層である。

第Ⅲ層　10ＹＲ２／２　黒褐色　シルト
粘性弱　締まり中　中礫浮石（ash状を呈する。以下、To－Cuと表記。）が全体に微量混入する。第Ⅱ層と同様にワウザイ川右岸及び左岸旧河道跡部分以外には堆積がほとんど認められない。遺物を多量に含む層である。

第Ⅳ層　10ＹＲ３／１　黒褐色　シルト
粘性弱　締まり中　To－Cuがブロック状に少量及び全体に微量、また、φ～３㎜程の南部浮石（以下、To－Nbと表記。）が全体に微量混入する。地点によってはTo－Cuが多量に混入する。同部分は粘性が微弱で、非常に締まる。ワウザイ川右岸及び旧河道跡の一部にのみに堆積し、他では欠落する。



第６図　基本層序（Ｓ＝1/25）

第Ⅴ層　7.5ＹＲ２／１　黒色　シルト　粘性中　締まり中　φ～３㎜程のTo－Nbが全体に少量混入する。

第Ⅵ層　10ＹＲ２／2.5　黒褐色　シルト　粘性中　締まり中　第Ⅴ・Ⅶ層の漸移層。φ～５㎜程のTo－Nbが全体に中量混入する。第Ⅴ層より粒径の大きいものが混じる。

第Ⅶ層　10ＹＲ３／３　暗褐色　シルト　粘性中　締まり強　φ～５㎜程のTo－Nbが全体に中量混入する。ただし第Ⅵ層より若干少ない。地点によってはブロック状に堆積する部分もある。

第Ⅷ層　10ＹＲ３／４　暗褐色　粘土質シルト　粘性強　締まり強　φ～10㎜のパミスが少量混入する。八戸火山灰の上位に相当する。

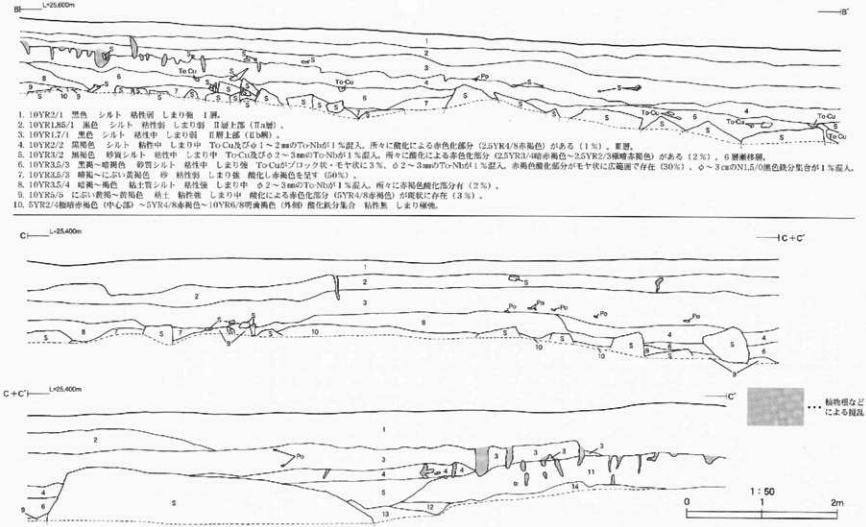
第Ⅸ層　10ＹＲ５／５　にぶい黄褐～黄褐色　シルト　粘性強　締まり強　第Ⅶ層と同様のパミスが少量混入する。八戸火山灰層に相当する。

(2) 旧河道跡（カラー写真図版４・写真図版２）

ワウザイ川左岸調査区で検出された旧河道跡について、その位置と概ねの堆積土（表土は除く）、河道であった時期等について概観したいと思う。旧河道跡は①～④の４本が確認されている。①は現河道のワウザイ川に沿うもので、２～３ｍ程の比高差がある。堆積土の上位には基本層序の第Ⅱ層が部分的にのみ観察され、順に砂層、黒色土層、砂層、砂礫層と堆積している。砂層は他に比して厚い。北側河道縁は第Ⅶ層を切っており、南側はワウザイ川へ続く。②は①の北側にあたる－ⅡＤ区南側に位置し、－ⅡＤ８ｈグリッド付近で①と合流する。上流部の堆積は、上から第Ⅱ層、第Ⅲ層、砂礫層となっており、河道縁は第Ⅵ～Ⅶ層を切る。③は②の北側にあたる－ⅡＤ区北東側から北東方向へ流れたもので、ＩＣ０ｇグリッド付近で④と合流する。堆積土は、上から第Ⅱ層、第Ⅲ層、砂礫が混入し酸化による赤色化が顕著に認められる第Ⅲ層、砂礫層となっており、部分的に第Ⅳ層の堆積も確認されている。第Ⅳ層は第Ⅲ層下部と同じく、酸化により赤色化している。河道縁は第Ⅵ層を切る。④は－ＩＣ～ＩＣ区境付近南側で確認されたもので、北流しており、前述のようにＩＣ０ｇグリッド付近で③と合流する。堆積土は、上から第Ⅱ層、砂層、砂礫層となっている。なお、旧河道跡における基本層序の第Ⅱ層・Ⅲ層相当の層には、白色の細かいパミス（南部浮石が風化し変質したものか、或いは中掵浮石の風化物か？）が少量混入していた。

次に、それぞれの河道時期について考える。まず、①・②・③は、河道の縁が第Ⅵ層或いは第Ⅶ層を切っていることから、下限年代は南部浮石降下以後ということになる。このうち、①については砂層間の黒色土の存在から、流水が時間を空けて最低２回存在したと考えられる。また、砂層が他に比して厚く、上位まで堆積していることから、比較的長期間、他よりも後まで流路であった可能性が高い。②については第Ⅲ層の堆積が確認されることから、同層堆積時期にはある程度治まっていたものと考えられる。また③には、①・②・④にほとんど堆積していない第Ⅲ～Ⅳ層が存在し、第Ⅲ層下部～Ⅳ層が酸化し赤色化していることが確認されている。このことから、中掵浮石降下時から第Ⅲ層堆積までのしばらくの間もある程度の流水があったものと考えられる。④は第Ⅲ層の堆積が確認されないことから、②・③より後まで存在していたものと考えられる。

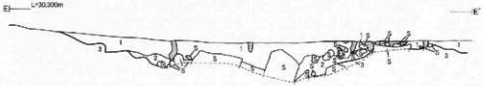
なお、今回調査中の７月９～10日、台風による大雨によってワウザイ川が氾濫したことがあった。その際、川北側の調査区が河道状になり、斜面下方の－ＩＣ区以東はプールと化した。また、旧河道跡付近では湧水が起こり、これは８月上旬まで続いた。住民の方のお話によると、年に数回程度は川から水が出るのだという。このような状況を見ると、一定の流水が途絶え河道で無くなった以後も、頻繁に水の影響を受けて一次的な流水が度々発生していたものと思われる。



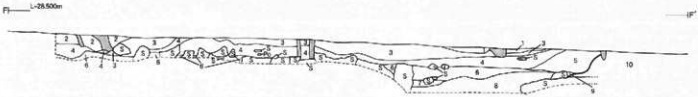
1. 10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり強　Ⅰ層。
2. 10YR1.8/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり弱　Ⅱ層上部（Ⅱa層）。
3. 10YR1/1　黒色　シルト　粘性中　しまり弱　Ⅱ層上部（Ⅱb層）。
4. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　To Cu及びϕ1～2mmのTo-Nbが1％混入。所々に酸化による赤色化部分（2.5YR4/8赤褐色）がある（1％）。Ⅱ層。
5. 10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　粘性中　しまり中　To-Cu及びϕ2～3mmのTo-Nbが1％混入。所々に酸化による赤色化部分（2.5YR3/4暗赤褐色～2.5YR2/3暗暗赤褐色）がある（2％）。6層崩落層。
6. 10YR3.5/3　黒褐～暗褐色　砂質シルト　粘性中　しまり強　To-Cuがブロック状・モヤ状に3％、ϕ2～3mmのTo-Nbが1％混入。赤褐色酸化部分がモヤ状に広範囲で存在（30％）。ϕ～3cmのN1.5/0黒色鉄分集合が1％混入。
7. 10YR3.5/3　暗褐～赤黄褐色　砂　粘性弱　しまり強　酸化し赤褐色を呈す（50％）。
8. 10YR3.5/4　暗褐～褐色　粘土質シルト　是性強　しまり中　ϕ2～3mmのTo-Nbが1％混入。所々に赤褐色酸化部分有（2％）。
9. 10YR5/6　にぶい黄褐～黄褐色　粘土　粘性強　しまり中　酸化による赤色化部分（5YR4/8赤褐色）が斑状に存在（3％）。
10. 5YR2/4暗暗赤褐（中心部）～5YR4/8赤褐色～10YR6/8明黄褐色（外縁）酸化鉄分集合　粘性無　しまり極強。

1. Ⅰ層　2. Ⅱ層上部　3. Ⅱ層下部　4. Ⅱ層
5. 8.75YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　To-Cuがモヤ状・ブロック状に3％混入。Ⅲ～Ⅳ層。
6. 10YR3/1.5　黒褐色　砂質シルト　粘性強　しまり中　To-Cuがブロック状・斑状に30％混入。酸化し赤色化している部分多い。Ⅳ層。
7. N1.5/0　黒色　シルト　粘性中　しまり弱。
8. 10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　粘性無　しまり弱　ϕ5mm以下、所々酸化し赤色化（10％）。
9. 7.5YR2.5/2　黒褐色　砂質シルト　粘性弱　しまり中　10cm程の小礫2％混入。所々酸化し赤色化。
10. 10YR4.5/6　褐～黄褐色　砂　粘性無　しまり弱　砂礫層。所々酸化し赤色化（5％）。
11. 10YR3/2.5　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中　しまり中　ϕ2～3mmのTo-Nb3％混入。Ⅳ～Ⅶ層。
12. 7.5YR3/2　黒褐色　砂質シルト　粘性強　しまり中。
13. 7.5YR2.5/2　黒褐色　砂質シルト　粘性強　しまり弱　所々酸化し赤色化。
14. 10YR4.5/6　褐～黄褐色　シルト　粘性中　しまり中　若干砂が混入。Ⅶ層。

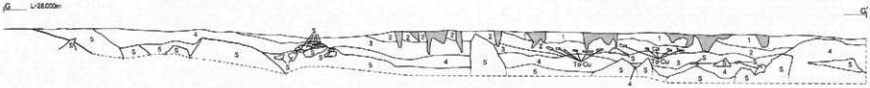
第７図　調査区土層断面図（１）



1. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　φ～3mmのTo-Nb及びTo-Cu？が3％混入。
2. 10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　φ～3mmのTo-Nb及びTo-Cu？が3％混入。
3. 10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまり強　φ～3mmのTo-Nb10％混入。Ⅶ層。地山。



1. 10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり弱　φ1～2mmの白色粒（パミス？）3％混入。Ⅱ層。
2. 10YR1.7/1　黒色　砂質シルト　粘性弱　しまり弱　白色砂がマーブルに3％混入。
3. 2.5YR4/2　暗灰黄色　砂　粘性無　しまり弱　砂質（φ～5mm）。所々酸化し赤色化。
4. N1.5/0　黒色　シルト　粘性中　しまり中　細粒。φ1mm以下の白色粒3％混入。
5. 10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　細粒。φ1mm以下の白色粒7％混入。
6. 10YR4/2　灰黄褐色　砂礫　粘性無　しまり弱　砂礫層。礫は大小様々。所々酸化し赤色化。
7. 10YR4/3　にぶい黄褐色　砂礫　粘性弱　しまり弱　砂礫層。6層に比して礫の割合高い。所々酸化し赤色化。
8. 10YR5/6　黄褐色　砂礫　粘性弱　しまり中　砂礫層。6・7層に比して礫の割合高い。所々酸化し赤色化。
9. 10YR6/6　明黄褐色　砂質シルト　粘性弱　しまり強。
10. 10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性中　しまり強　φ～3mmのTo-Nb3％混入。所々酸化し赤色化。Ⅶ～Ⅷ層。

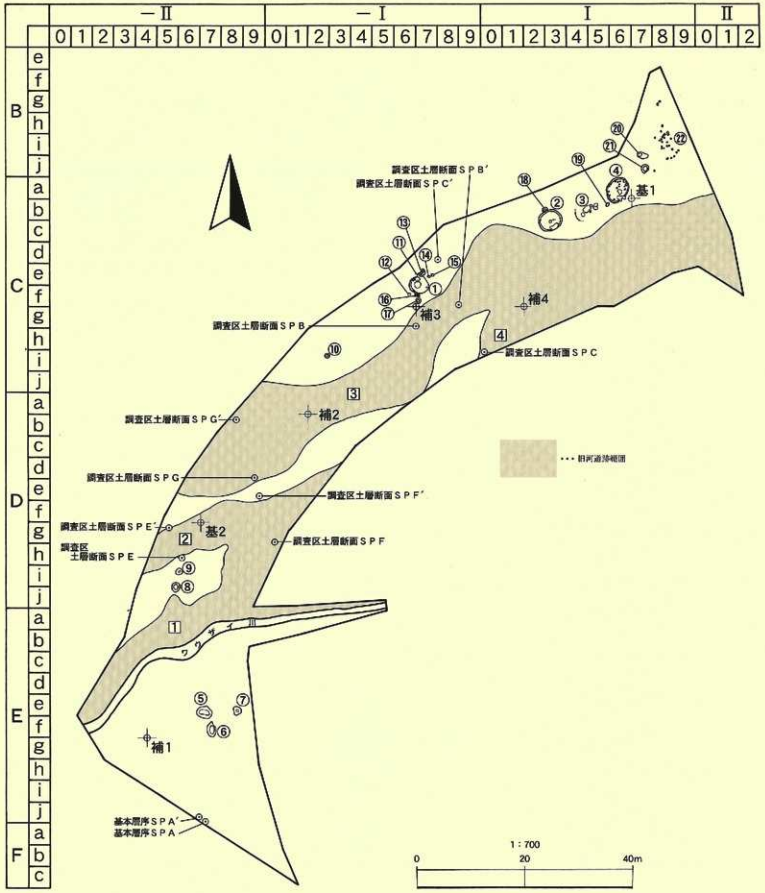


1. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　φ1mm以下の白色粒（パミス？）3％，φ～2mmのTo-Nb1％混入。Ⅱ層。
2. 10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To-Cu5％程度及びブロック程に3％，白色粒が3％，φ2～3mmのTo-Nb1％混入。Ⅲ～Ⅳ層。
3. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　φ1～2mmのTo-Nb3％，5mm以下の小礫1％混入。
4. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　20mm以下の小礫3％，φ～4mmのTo-Nb2％混入。
5. 10YR4/2　灰黄褐色　砂礫　粘性無　しまり弱　砂礫層。礫は大小様々。所々酸化し赤色化。F～F'の6層と同様。

1：50
0　1　2m

第８図　調査区土層断面図（２）

第９図　前回調査区とのグリッド相関図



第10図　遺構配置図・旧河道跡位置図

遺構

① －ＩＣ７ｆ住居跡
② ＩＣ３ｃ住居跡
③ ＩＣ５ｂ住居跡
④ ＩＣ６ａ住居跡
⑤ －ⅡＥ７ｅ土坑
⑥ －ⅡＥ７ｆ土坑
⑦ －ⅡＥ８ｅ土坑
⑧ －ⅡＤ５ｉ土坑
⑨ －ⅡＤ６ｉ土坑
⑩ －ＩＣ２ｉ土坑
⑪ －ＩＣ６ｅ土坑
⑫ －ＩＣ６ｆ土坑
⑬ －ＩＣ７ｅ①土坑
⑭ －ＩＣ７ｅ②土坑
⑮ －ＩＣ７ｅ③土坑
⑯ －ＩＣ７ｆ①土坑
⑰ －ＩＣ７ｆ②土坑
⑱ ＩＣ２ｂ土坑
⑲ ＩＣ５ｂ土坑
⑳ ＩＢ７ｊ①土坑
㉑ ＩＢ７ｊ②土坑
㉒ 柱穴状小土坑群

旧河道跡

1 旧河道跡①
2 旧河道跡②
3 旧河道跡③
4 旧河道跡④

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

調査の結果、竪穴住居跡４棟、土坑17基、柱穴状小土坑28基が検出された。遺構内からの遺物出土は少なく、床面・底面のものはごく少量である。

１．竪穴住居跡

－ＩＣ７ｆ住居跡

遺構（第11図・写真図版３）

［位置・検出状況］　－ＩＣ６ｅ・６ｆ・７ｅ・７ｆグリッドにまたがって位置する。第Ⅰ層除去後直ぐ、第Ⅵ層で土器破片の集中によって検出された。このため遺構上部が削平されているものと思われる。また、南東側には近年の重機による攪乱が入っており、さらに状態が悪い。なお、本遺構周辺に７基の土坑、南西側約２ｍに旧河道跡③がある。

［重複関係］　北側及び南側にはそれぞれ不整長楕円形（－ＩＣ７ｅ①土坑）、楕円形（－ＩＣ７ｆ①土坑）の小土坑が接している。覆土は住居跡本体のものと同様であるが、本遺構自体の残存状態が不良であるため付属するものか否か、詳細は不明である。

［規模・平面形］　規模は北西～南東3.55ｍ、北東～南西3.4ｍで、平面形は円形を呈する。

［覆土］　主に下部が黒褐色土、上部が黒色土で構成されているが、入り混じっているところもあり判然としない。ただし、２層以下には南部浮石が混入するという共通点が見られる。また、全域で耕作によると思われる攪乱及び植物痕が顕著に見受けられる。

［壁・床面］　検出面からの深さは残存状態の比較的良好な西側で20㎝、他の部分は平均10㎝前後で、南東側は２～３㎝残存するのみである。壁面はいずれも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層まで行われており、床面は若干西から東側へ傾斜している。同面は全般的に堅緻である。

［柱穴・ピット］　４基検出した。位置・形状に共通性がなく、柱穴と判断できるものはない。また、本住居跡周辺からは－ＩＣ６ｅ・－ＩＣ６ｆ・－ＩＣ７ｅ②・－ＩＣ７ｅ③・－ＩＣ７ｆ②の５基、及び本住居跡に接する－ＩＣ７ｅ①、－ＩＣ７ｆ①の２基の計７土坑が検出されている。それぞれ本住居跡と関係する可能性が考えられるものの、残存状況が悪く不明な点が多いためそれぞれ単独に処理した。

［炉］　住居中央やや西よりから検出した。径120㎝程度の円形を呈するピットで、深さは約20㎝を測る。明瞭な焼土は存在せず、底面付近に中量の炭化物粒がある以外は少量の焼土粒と炭化物粒、及び土器細片が微量混入するのみである。東半には石囲炉の形態を呈する配石があるが、礫の大部分は底面から10㎝程度上の覆土中に設置されており、この付近にも焼土・炭化物は少量しか存在しない。構成礫は10～30㎝程度の角礫及び円礫が14点である。

遺物（第19図・写真図版12）

［出土状況］　覆土から土器及び石器が出土している。床面からの出土はない。

［土器］　時期は前期～晩期とさまざまである。２・４は胎土に繊維を含む円筒下層式系の土器。５は大木８ｂ～９式相当と思われる。上位からは晩期の台付鉢（７）、鉢（８）も出土している。10・11は胎土や器形、調整の特徴から製塩土器と思われる。炉跡ピット覆土からは、円筒下層ｄ２式の口縁部片（１）、指頭圧痕の残る手づくね土器（６）、製塩土器の口縁部片（９）が出土した。

［石器］　剥片（14）、細部調整剥片（15）、片面礫器（12・16）、磨り石（17）、敲石（13・18）が出土してい

る。12及び13は炉跡ピットから出土したもので、道具として使用後、炉石に転用されたものと思われる。
時期　出土土器から縄文時代中期末以降と考えられる。

ＩＣ３ｃ住居跡

遺構（第12図・写真図版４）

［位置・検出状況］　ＩＣ２ｂ・２ｃ・３ｂ・３ｃグリッドにまたがって位置する。第Ⅰ層及び水田耕作時に敷いたと思われる客土除去後直ぐ、第Ⅵ層で黒色土の広がりとして検出された。このため遺構上部が削平されているものと思われる。北西側はＩＣ２ｂ土坑と接しており、同土坑は本住居跡に付属するものであった可能性も考えられる。ただし明確な関係が不明なため別々に処理することとした。なお、東側約３ｍにＩＣ５ｂ住居跡、南西側約4.5ｍに旧河道跡③+④がある。

［規模・平面形］　規模は北東～南西4.15ｍ、北西～南東3.27ｍで、平面形は楕円形を呈する。

［覆土］　主に周辺部に黒褐色土、中央部に黒色土が堆積しており、前者から後者の順に堆積したものと考えられる。また、全域に耕作によると思われる攪乱及び植物痕が顕著に入っている。

［壁・床面］　検出面からの深さは残存状態の比較的良好な西側で22㎝、他の部分は平均15㎝前後である。壁面はいずれも外傾している。掘り込みは第Ⅵ層中位まで行われており、床面は西から東側へ若干傾斜している。同面は全般的に堅緻である。

［柱穴・ピット］　３基検出した。このうちＰ２は出入り口施設に伴うものと思われ、壁から住居内側へ向かう ⊔ 字状を呈している。開口部がつながっていたため１つのピットとして数えたが、平面の形状及び底面の状況等（深さのピークが場所によって異なる）から、 ⊔ 字の縦左・右部と横部の３つに分けられる。このうち、横部底面の両端部付近からは柱穴が各１基確認された。東側のものは開口部径10㎝・底部径８㎝、床面からの深さ43㎝・ピット底面からの深さ16㎝、西側のものは開口部径17㎝・底部径15㎝、床面からの深さ33㎝・ピット底面からの深さ11㎝を測る。覆土には最大１～２㎝程の炭化物粒及び１～２㎜程の焼土粒が混入していた。Ｐ３は北西側へ斜めに下る斜穴で、柱穴と思われる。Ｐ１はＰ３と対称な位置に存在するが深さ約10㎝と浅く、Ｐ３とは形状が異なる。

［炉］　住居中央やや南東よりから地床炉が検出された。焼土は大・小の２個存在する。大は67×55㎝の不整楕円形を呈し、焼土の厚さは最大10㎝を測る。小は大の北東約20㎝に位置し、平面形は28×18㎝の長楕円形、厚さは最大４㎝である。

遺物（第20～21図・写真図版13～14）

［出土状況］　床面及び覆土中から土器・石器が、また覆土上位からは土製品が１点出土している。

［土器］　19～23は床面出土で、全て細片。19・20はＬＲ原体が縦位施文される粗製深鉢。21は微細な口縁部片で、細い沈線文が縦・横・斜位に施されている。22は櫛歯状の工具による縦位の沈線のみられる深鉢で、後期に位置付けられる。覆土は前・中・後期の遺物が混在している。31は口縁部片で、口唇部断面が内削ぎ状を呈し内面が肥厚している。体部には磨消帯が横走し、口縁部には０段多条・ＲＬの斜縄文が施される。32は底部片で、沈線文と磨消縄文による入組文？が施される。原体は０段多条・非結束の羽状縄文である。33は刻目帯を２条持ち、その間に羽状沈線が施されている。34は折り返し口縁で、地文の他に若干の沈線文が見られる。後期初頭～前葉か。

［土製品］　覆土上位から左半分が欠損した泥面子が１点出土した（38）。

［石器］　床面から石核石器を製作した際の調整剥片が２点出土した（39・40）。覆土中からは石鏃（41）、ピ

エス・エスキーユ（43）、細部調整剥片（44）、及び石核石器の調整剥片２点（45・46）、石斧（48～52）、敲石（53～56）が出土しており、45・46の剥片２点は接合した。42・48・50はＰ２覆土出土である。

時期　出土土器から縄文時代中期末～後期前半頃と考えられる。

ＩＣ５ｂ住居跡

遺構（第13図・写真図版５）

［位置・検出状況］　ＩＣ４ｂ・５ｂグリッドにまたがって位置する。第Ｉ層直下の第Ⅶ層で検出し、焼土と点在する黒褐色土及び暗褐色土の不整形な広がりとして確認された。床面まで削平が及んでおり、残存状態は非常に悪い。また、南東側は近年の構築と思われる円形の土坑（地元住民の方の話では防空壕ではないかとのこと）によって破壊されている。なお、北東側約1.5mにＩＣ５ｂ土坑、同約２mにＩＣ６ａ住居跡、西側約３mにＩＣ３ｃ住居跡が、南西側約3.5mには旧河道跡③+④がある。

［規模・平面形］　壁面が一部にしか残存していないため、規模・平面形は不明である。

［覆土］　覆土もほとんど残置していない。焼土付近の窪みに黒褐色～暗褐色土が10cm程堆積していたほか、壁面付近に黒褐色土が５cm程残っていたのみである。また、各所に耕作によると思われる攪乱及び植物痕が顕著に確認された。

［壁・床面］壁面が残存していたのは南西側の一部のみで、検出面からの深さは５cm程である。掘り込みは本遺構検出面付近まで行われたものと思われる。同面は全般的に堅緻である。

［柱穴・ピット］　５基検出した。このうちＰ５は近年構築されたものと思われる。柱穴と判断できるものはない。Ｐ１及びＰ２は楕円形を呈し、断面は円筒形に近い。Ｐ２は焼土に非常に近接していることから、これに伴うものである可能性が高い。Ｐ３及びＰ４は一部接しており、両者とも平面不整形の断面すり鉢状を呈する。

［炉］　Ｐ２の西側から地床炉が検出された。焼土は73×45cmの不整楕円形を呈し、厚さは最大14cmを測る。

遺物（第22図・写真図版14）

［出土状況］　床面から石器が２点、炉付近及びＰ１覆土から土器が出土した。

［土器］　57及び58は炉焼土面から、59は炉上覆土から出土したものである。57と59は文様及び胎土から円筒下層式と思われる。58は後期に属する粗製深鉢である。

［石器］　62は頁岩製の剥片を素材とした削器。63は敲石で、扁平な小礫の短軸両端部に敲打痕が観察される。

時期　出土土器から縄文時代後期頃と考えられる。

ＩＣ６ａ住居跡

遺構（第14図・写真図版６）

［位置・検出状況］　ＩＣ６ａグリッドに位置する。検出面は第Ｉ層直下の第Ⅵ層で、黒褐色土の広がりとして確認した。このため、遺構上部がある程度削平されているものと思われる。なお、南西側約0.5mにＩＣ５ｂ土坑、同約２mにＩＣ５ｂ住居跡、北東側約3.5mにＩＢ７ｊ⑧土坑、南西側約２mに旧河道跡③+④がある。

［規模・平面形］　規模は北東～南西4.81m、北西～南東3.87mで、平面形は楕円形を呈する。

［覆土］　黒褐色土で構成されている。全域で、耕作時のものと思われる攪乱及び植物痕が堅著に確認される。

［壁・床面］ 検出面からの深さは残存状態の比較的良好な西側で15㎝、他の部分は平均12～13㎝前後で、北東側は２～３㎝残存するのみである。壁面は、西側が比較的垂直に近い角度で立ち上がるほかは、いずれも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層まで行われており、床面は若干北西から南東側へ傾斜している。床面は全般的に堅緻である。

［砂塊］ 北西壁、北壁から10㎝内側、同40㎝内側の３箇所の床面付近で検出された。いずれも砂が凝固したものである。酸化し赤色化しており、内部にはラミナが見られる。①は床面と接しておらず、間に住居覆土を挟む。②・③は部分的に床面と接しているが、やはり覆土が介在している。なお、②・③の下（床面）からＰ18・19が検出された。

［柱穴・ピット］ 20基検出した。17基が壁周辺から検出されたもので、周縁にほぼ万遍なく位置している。このうちＰ20は南東壁の住居内・外にかけて存在するもので、住居内側へ向かって ⊓ 字状を呈しており、出入り口施設に伴うピットと思われる。１基として数えたが、ＩＣ３ｃ住居跡の同種ピットと同様にその形状及び底面の状況等から ⊓ 字の縦左・右部と横部の３部分に細分が可能である。底面には、横部の底面高に比して両縦部のそれが低いという特徴が見られ、床面からの深さは前者が15㎝前後であるのに対し後二者は約30㎝を測る。北東壁部分に位置するＰ14では、ほぼ同様な大きさの敲石１点及び礫３点の計４点が底面南西側から出土した。目的は不明であるが意図的に置かれたものと思われる。この他のピットに関しては、規模に相違が見られるものの、全てに柱穴であった可能性が考えられる。Ｐ18・19の２基は、前述した砂塊②・③の下に位置しており、その関係が示唆される。

［炉］ 住居中央南東よりから地床炉を検出した。部分的に植物痕による攪乱を受けている。平面形は、径74×69㎝の楕円形を呈する。中央部が若干低まっており、同部分には炭化物粒を微量含む黒褐色土の堆積が見られた。焼土最厚部の厚さは10㎝を測る。

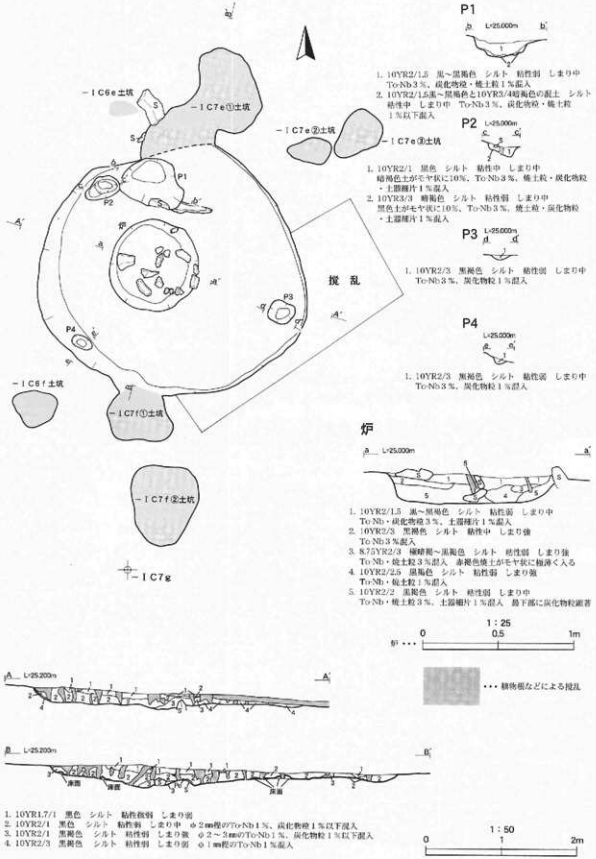
遺物（第22～23図・写真図版15）

［出土状況］ 床面及び覆土中から各時期の土器、石器が出土した。

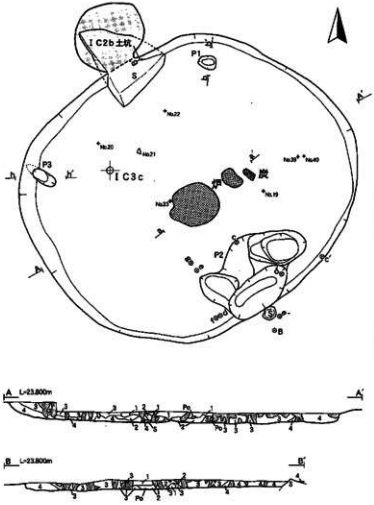
［土器］ 64は台部で、倒立した状態で床面から出土した。地文は０段多条のＲＬで、横位施文されており、台部付け根には磨消帯が廻る。床面出土はこの１点のみで、他は覆土中からの出土である。65・66は縄文原体圧痕の施された円筒下層ｃ～ｄ式の深鉢口縁部片、67はＬＲ原体圧痕が多様に施文された口縁部片で、円筒上層ａ式期相当と思われる。68は沈線と磨消縄文による入組文が施された深鉢口縁部片で、口唇部断面は内側ぎ状を呈し内側に肥厚している。69・70は壺形を呈するもので、口唇部断面形・体部文様は68と同様であるが、口唇部に刻目帯を持つ。

［石器］ 71はＰ20東側の床面から出土した横型石匙。72は石核石器の調整剥片で炉の覆土１層から、73は敲石でＰ14底面から出土したものである。74は覆土下位出土の石斧で、刃部表面は研磨、裏面は剥離によって調整されている。

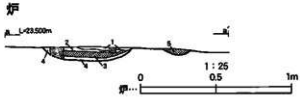
時期 出土土器から縄文時代後期頃と考えられる。

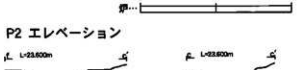


第11図 －ＩＣ７ｆ住居跡



1. 7.5YR1.7/1黒色シルトと10YR1.7/1黒色シルトの混土　粘性中　しまり弱
黄褐色土ブロック1％、To-Cu・炭化物粒1％以下混入
2. 10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中　しまり中
黄褐色土ブロック・炭化物粒・To-Cu・φ～1mmのTo-Nb3％混入
3. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中
To-Cu・To-Nb3％、赤褐色焼土粒・炭化物粒1％混入
4. 10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中　しまり強
To-Cu・To-Nb3％混入
5. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり弱
黄褐色土ブロック・炭化物粒10％混入





1. 10YR2/2.5　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中
To-Nb3％、炭化物粒1％以下混入

1. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり強
To-Nb・炭化物粒・焼土粒1％混入
2. 10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中　しまり強
To-Nb1％混入
3. 10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中　しまり強
To-Nb1％、炭化物粒・焼土粒1％以下混入

1. 10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中　しまり中
To-Nb・1～2cmの炭化物粒3％混入
2. 10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中　しまり中
To-Nb・1～2cmの炭化物粒3％混入

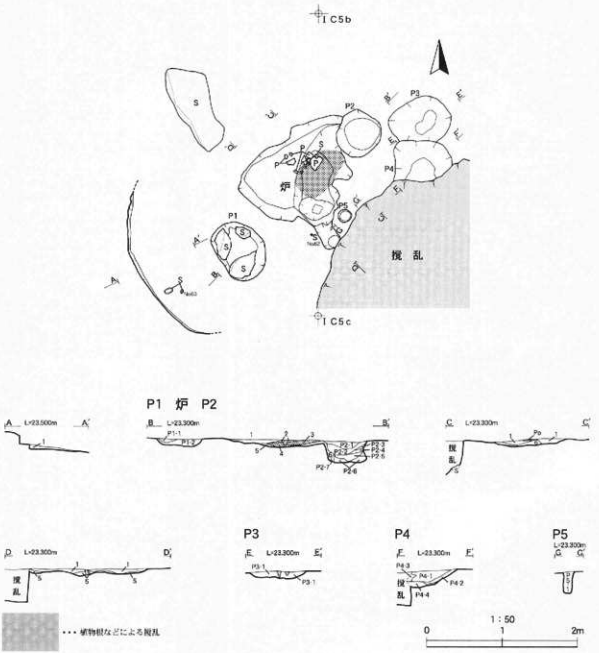
1. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中
To-Nb・炭化物粒・焼土粒1％混入

1. 10YR2/1.5　黒～黒褐色　シルト　粘性中　しまり中
To-Nb3％、炭化物粒・焼土粒1％混入

炉

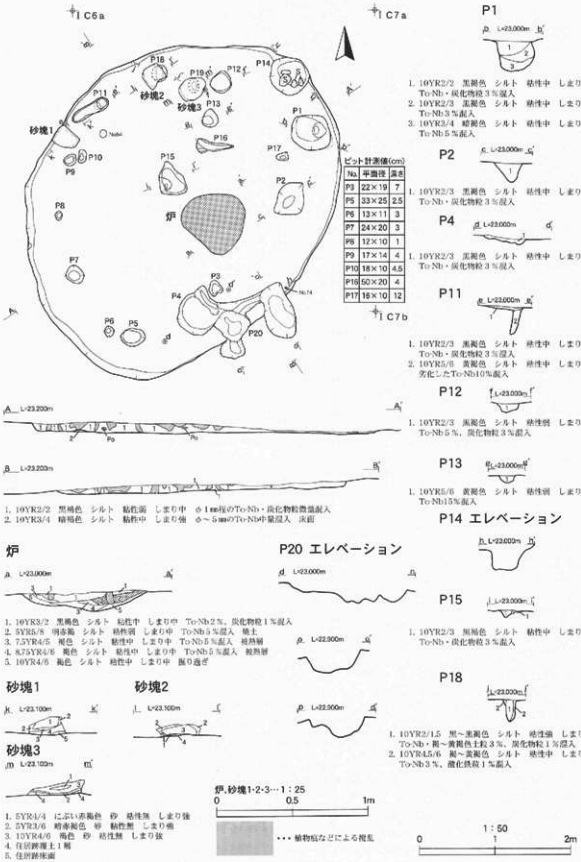
1. 10YR3.5/4　暗褐～褐色　シルト　粘性中　しまり中
2層・3層が粒状に1％、To-Nb1％混入　微かに被熱
2. 7.5YR4/5　褐色　シルト　粘性中　しまり中
To-Nb1％混入　被熱層
3. 5YR4.5/8　赤褐～明赤褐色　シルト　粘性強弱　しまり強
To-Nb3％混入　焼土
4. 5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　粘性弱　しまり強
To-Nb3％混入　被熱層
5. 2.5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまり中
To-Nb3％混入　焼土

第12図　ⅠC3c住居跡



1．10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To·Nb 2 %混入
2．8.75YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To·Nb 2 %混入
3．5YR3.5/7　暗赤褐～赤褐色　シルト　粘性無　しまり強　To·Nb・黒色粒(酸化鉄分)　1 %，To·Cu 1 %以下混入　地土
4．10YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまり中　黒色粒塊2 %混入　地土
5．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまり中　To·Nb 1 %以下混入
6．7.5YR3.5/5　暗褐～褐色　シルト　粘性微弱　しまり強　To·Nb 1 %，黒色砂礫（～50mm）　5 %混入
P1-1．10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To·Cu・To·Nb 2 %，炭化物粒 1 %混入
P1-2．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　褐色土ブロック 3 %，To·Cu・To·Nb 2 %，炭化物粒 1 %混入
P2-1，P1-2と同様
P2-2．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　地土粒・炭化物粒 1 %，To·Nb 1 %以下混入
P2-3．10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱　しまり中　P2-2ブロック30%混入
P2-4．10YR2/2.5　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　P2-2ブロック30%混入
P2-5．8.75YR2/1.5　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　暗褐色土ブロック 3 %，To·Nb 1 %混入
P2-6．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　暗褐色土ブロック 5 %混入
P2-7．6.25YR3/6　暗赤褐～暗褐色　シルト　粘性中　しまり強　酸化による赤色化
P3-1．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　暗褐色土がモヤ状に30%，To·Cu・To·Nb 2 %混入
P4-1．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　暗褐色土がモヤ状に10%，To·Cu・To·Nb 2 %混入
P4-2．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまり中　To·Nb 2 %，To·Cu 1 %，黒色砂礫 1 %以下混入
P4-3．10YR3/3.5　暗褐色　シルト　粘性中　しまり強　To·Nb 2 %混入
P4-4．8.75YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまり強　To·Nb 2 %，黒色砂礫 1 %以下混入　所々酸化による赤色化
P5-1．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　炭化物粒（～2 cm）・褐色土粒・黒色及び暗赤褐色砂礫（酸化鉄分）2 %，To·Nb 1 %混入

第13図　ＩＣ５ｂ住居跡



第14図　ＩＣ６ａ住居跡

2．土坑

－ⅡＥ７ｅ土坑

遺構（第15図・写真図版７）

［位置･検出状況］ －ⅡＥ７ｅグリッド付近に位置する。検出面は第Ⅱ層中位で、同面における本遺構付近の地形は、北東方向に約４～５°で下傾している。

［規模・平面形］ 長軸2.85m、短軸2.41mの楕円形である。

［壁･底面］ 各壁ともかなり外傾している。掘り込みは第Ⅲ層下位～第Ⅶ層上位まで行われており、底面は皿状を呈する。同面も周辺地形と同じく北東方向へ傾斜している。最大深は24cmを測る。

［覆土］ 黒色土主体で、植物痕により所々が攪乱されている。

遺物（第23図・写真図版15）

覆土から土器片２点が出土した。両者とも胴部片で、胎土の特徴から75は縄文前期、76は中期のものと思われる。

時期 底面出土遺物ではないため断言できないが、出土土器から縄文時代中期以降と考えられる。

－ⅡＥ７ｆ土坑

遺構（第15図・写真図版７）

［位置･検出状況］ －ⅡＥ７ｆグリッドに位置する。検出面は第Ⅱ層中位である。同面における本遺構付近の地形は北東方向に約７°で下傾している。

［規模・平面形］ 長軸2.98m、短軸1.65mの長楕円形である。

［壁・底面］ 各壁ともかなり外傾している。掘り込みは第Ⅲ層中位まで行われており、底面は皿状を呈する。同面も周辺地形と同じく北東方向へ傾斜している。最大深は11cmを測る。

［覆土］ 黒色土主体で、植物痕により所々が攪乱されている。

遺物（第23図・写真図版15～16）

覆土から土器片が７点出土した。時期はバラバラである。81はＬＲ原体が多方向に施文された中期後葉～後期前葉の粗製深鉢底部。82は口唇部外側に刻目帯を持つ鉢の後期中葉の口縁部片。78は波状口縁を呈し口縁部に縦位の原体圧痕が施された円筒上層式深鉢の口縁部片で、胎土に繊維を含む。79・80は上層ｂ～ｃ式の口縁部片、77は内傾する口唇部に円形刺突文が連続する以外は無文の口縁部片で、胎土に繊維及び砂粒を含む。

時期 底面出土遺物ではないため断言できないが、出土土器から縄文時代中期以降と考えられる。

－ⅡＥ８ｅ土坑

遺構（第15図・写真図版７）

［位置･検出状況］ －ⅡＥ８ｅグリッドに位置する。検出面は第Ⅱ層中位である。同面における本遺構付近の地形は北方向へ約６°で下傾している。

［規模・平面形］ 長軸1.75m、短軸1.56mの不整楕円形である。

［壁･底面］ 各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅲ層中位まで行われている。底面はすり鉢状を呈し、最大深は29cmを測る。

［覆土］ 上位に黄褐色焼土の混じる暗褐色・黒色・黒褐色土があり、下位には焼土のあまり混じない黒色土

が堆積している。検出時、焼土が環状に確認されたことから焼土遺構になるかと思われたが、ブロック状・粒状・モヤ状の混入であるため廃棄されたものと考えられる。

遺物　なし。

時期　不明。

－ⅡＤ５ｉ土坑

遺構（第15図・写真図版７）

［位置･検出状況］　－ⅡＤ５ｉ～５ｊグリッド付近に位置する。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅶ層で、このため上部はある程度の削平を受けた可能性がある。

［規模・平面形］　長軸1.76m、短軸1.55mの楕円形である。

［壁･底面］　各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層上位まで行われており、底面は椀状を呈する。同面には若干の凹凸が見られ、東半には１ｍを超える巨礫の一部分が露出している。検出面からの最大深は23cmである。

［覆土］　黒色土主体で、炭化物粒を微量混入する。

遺物　なし。

時期　不明。

－ⅡＤ６ｉ土坑

遺構（第16図・写真図版８）

［位置･検出状況］　－ⅡＤ５ｉ～６ｉグリッドに位置する。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅶ層で、このため上部はある程度の削平を受けた可能性がある。

［規模・平面形］　径1.85m程度の略円形を呈する。

［壁･底面］　各壁とも外傾しており、特に斜面上部にあたる南西側は傾斜角が緩い。掘り込みは第Ⅶ層上位まで行われており、底面は南西部を除き椀状を呈する。最大深は19cmを測る。

［覆土］　黒褐色土の単層。To－Ｎｂが少量混入する。

遺物　なし。

時期　不明。

－ＩＣ２ｉ土坑

遺構（第16図・写真図版８）

［位置･検出状況］　－ＩＣ２ｉグリッドに位置する。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅶ層で、このため上部はある程度削平を受けた可能性がある。

［規模・平面形］　長軸0.92m、短軸0.84mの円形である。

［壁･底面］　各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層中位まで行われており、底面は椀状を呈する。最大深は15cmを測る。

［覆土］　黒褐～暗褐色土の単層で、炭化物粒・焼土粒が微量混入する。植物痕の攪乱が見られる。

遺物　覆土から土器片が１点出土したが、手違いにより掲載していない。

時期　不明。

－ＩＣ６ｅ土坑

遺構（第16図・写真図版８）

［位置・検出状況］　－ＩＣ６ｅ～７ｅグリッドに位置する。検出面は第Ｉ層直下の第Ⅵ層で、このため上部はある程度削平を受けた可能性がある。東側が－ＩＣ７ｆ住居跡と近接している。

［規模・平面形］　長軸0.44m、短軸0.24mの長楕円形を呈する。

［壁・底面］　西側に最深部があり、東側は緩やかに立ち上がった後、浅い窪みを持つ。掘り込みは第Ⅶ層中位まで行われており、最大深は10cmを測る。

［覆土］　黒色土と黒褐色土の混土で構成される。色調に変わりはないが、底面近くが締まる。

遺物　なし。

時期　不明。－ＩＣ７ｆ住居跡と同時期である可能性がある。

－ＩＣ６ｆ土坑

遺構（第16図・写真図版８）

［位置・検出状況］　－ＩＣ６ｆグリッドに位置する。検出面は第Ｉ層直下の第Ⅵ層で、このため上部はある程度削平を受けた可能性がある。北東側に－ＩＣ７ｆ住居跡があり、近接している。

［規模・平面形］　長軸0.58m、短軸0.50mの楕円形を呈する。

［壁・底面］　各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層中位まで行われており、底面は椀状を呈する。最大深は11cmを測る。

［覆土］　黒色土の単層である。

遺物（第23図・写真図版16）

覆土から土器片２点と礫１点が出土した。礫は掲載していない。83は深鉢の頸～胴部片で、頸部に刺突のある隆帯、胴部に縦位に回転施文された多軸絡条体が見られる前期（円筒下層式）の土器。84は深鉢の口縁部片で、折り返し口縁で地文にＬＲが横位・斜位に回転施文されている後期の土器である。

時期　底面出土遺物がないため断言できないが、縄文時代後期以降と考えられる。また、－ＩＣ７ｆ住居跡と同時期である可能性がある。

－ＩＣ７ｅ①土坑

遺構（第16図・写真図版８）

［位置・検出状況］　－ＩＣ７ｅグリッドに位置し、南側が－ＩＣ７ｆ住居跡と重複している。検出面は第Ｉ層直下の第Ⅵ層で、このため上部は若干削平された可能性がある。西側は－ＩＣ６ｅ土坑と近接している。なお、－ＩＣ７ｆ住居跡との関係が不明であるため土坑として処理したが、付属施設の可能性もある。

［規模・平面形］　長軸（1.85）m、短軸1.1mの不整長楕円形を呈する。

［壁・底面］　－ＩＣ７ｆ住居跡と接している南側以外は外傾して立ち上がる。掘り込みは第Ⅶ層上位まで行われており、底面には４ヶ所の凹みがある。最大深は29cmを測る。

［覆土］　－ＩＣ７ｆ住居跡覆土と同様の土で構成される。

遺物（第23図・写真図版16）

南側覆土から赤色頁岩製の調整剥片（47）１点が出土した。

時期　不明。－ＩＣ７ｆ住居跡と同時期である可能性がある。

－ＩＣ７ｅ②土坑

遺構（第16図・写真図版９）

［位置・検出状況］　－ＩＣ７ｅグリッドに位置する。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅵ層で、このため上部はある程度削平を受けたものと思われる。南西側には－ＩＣ７ｆ住居跡があり、近接している。また、東側は－ＩＣ７ｅ③土坑と非常に近接しており、２cm程度の間隔があるのみである。このため、本来は－ＩＣ７ｅ③土坑と同一の土坑であった可能性がある。

［規模・平面形］　長軸0.59m、短軸0.36mの長楕円形を呈する。

［壁・底面］　東側は耕作時の攪乱を受けているため立ち上がりが不明。その他は外傾している。掘り込みは第Ⅶ層上位まで行われており、底面には若干の凹凸がある。最大深は11cmを測る。

［覆土］　黒色土と黒褐色土の混土で構成される。色調に変わりはないが、西側壁面近くが締まる。

遺物　覆土から微細な土器片及び礫が１点ずつ出土した。土器片は時期・型式とも判別できない。両者とも不掲載とした。

時期　不明。－ＩＣ７ｆ住居跡と同時期である可能性がある。

－ＩＣ７ｅ③土坑

遺構（第16図・写真図版９）

［位置・検出状況］　－ＩＣ７ｅグリッドに位置する。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅵ層で、このため上部はある程度削平を受けたものと思われる。南西側には－ＩＣ７ｅ②土坑及び－ＩＣ７ｆ住居跡があり、近接している。前述のように－ＩＣ７ｅ②土坑と同一の土坑であった可能性がある。

［規模・平面形］　長軸0.73m、短軸0.53mの長楕円形を呈する。

［壁・底面］　各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層上位まで行われており、底面は椀状を呈する。同面には若干の凹凸が見られ、最大深は18.5cmを測る。

［覆土］　黒色土と黒褐色土の混土で構成される。色調に変わりはないが、底面近くが締まる。

遺物（第23図・写真図版16）

覆土から土器片が１点出土している。深鉢の胴部と思われ、０段多条の斜縄文が施されている。縄文後期頃のものであろうか。

時期　不明。－ＩＣ７ｆ住居跡と同時期である可能性がある。

－ＩＣ７ｆ①土坑

遺構（第16図・写真図版９）

［位置・検出状況］　－ＩＣ７ｆグリッドに位置し、北側が－ＩＣ７ｆ住居跡と重複している。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅵ層で、このため上部はある程度の削平を受けた可能性がある。また、南側は－ＩＣ７ｆ②土坑と近接している。

［規模・平面形］　長軸0.9m、短軸（0.7）mの楕円形を呈する。

［壁・底面］　－ＩＣ７ｆ住居跡と接している北側を除き、各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層上位まで行われており、底面は比較的平坦である。最大深は12cmを測る。

［覆土］　－ＩＣ７ｆ住居跡覆土と同様の土で構成される。

遺物　なし。

時期　不明。－ＩＣ７ｆ住居跡と同時期である可能性がある。

－ＩＣ７ｆ②土坑

遺構（第17図・写真図版９）

［位置・検出状況］　－ＩＣ７ｆグリッドに位置する。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅵ層で、このため上部はある程度の削平を受けた可能性がある。北側が－ＩＣ７ｆ①土坑と近接している。

［規模・平面形］　長軸1.17m、短軸0.93mの楕円形を呈する。

［壁・底面］　各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層上位まで行われており、底面には凹凸が目立つ。北側が比較的フラットである。断面図には表れていないが最深部は北東側に存在し、39cmを測る。

［覆土］　上位と下位に黒色土と黒褐色土の混土があり、その間に黒褐～暗褐色土が部分的に堆積している。上位は締まりを欠くが、中位以下は比較的締まる。

遺物（第23図・写真図版16）

覆土から土器口縁部片１点が出土している。口縁部は無文で、胴部にはＬＲ０段多条が横位回転施文されているようである。胎土には砂粒を含む。縄文中期後葉から後期前葉のものと思われる。

時期　底面出土遺物ではないため断言できないが、出土土器から縄文中期後葉以降と思われる。－ＩＣ７ｆ住居跡と同時期である可能性もある。

ＩＣ２ｂ土坑

遺構（第17図・写真図版10）

［位置・検出状況］　ＩＣ２ｂ～３ｂグリッドに位置する。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅵ層で、このため上部はある程度削平を受けた可能性がある。南東側はＩＣ３ｃ住居跡とほぼ接するような状態にあり、これに付属するものであった可能性がある。

［規模・平面形］　長軸0.98m、短軸0.83mの円形を呈する。

［壁・底面］　各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層中位まで行われており、底面は椀状を呈する。最大深は18cmを測る。

［覆土］　下位から、暗褐色土、黒色土、黒褐色土の順で堆積しており、層による粘性・締まりの違いはない。植物痕による攪乱が顕著に見られる。

遺物（第23図・写真図版16）

覆土から土器片が２点出土している。87は口縁部片で、Ｒの原体圧痕が施されている。胎土には繊維を多量に含んでおり、円筒下層ｃ～ｄ式相当と思われる。88は胴部片で、ＬＲが斜位？回転施文されている。胎土から縄文中期頃のものと思われるが定かではない。

時期　底面出土遺物ではないため断言できないが、出土土器から縄文中期以降と思われる。また、ＩＣ３ｃ住居跡と同時期である可能性がある。

ＩＣ５ｂ土坑

遺構（第17図・写真図版10）

［位置・検出状況］　ＩＣ５ｂグリッドに位置する。検出面は第Ⅰ層直下の第Ⅲ・Ⅶ層である。このため、上部はある程度削平を受けた可能性がある。なお、北東側約0.8mにＩＣ６ａ住居跡、西側約1.5mにＩＣ５ｂ

住居跡がある。

［規模・平面形］ 長軸0.77m、短軸0.5mの長楕円形である。

［壁・底面］ 非常に浅いため言及しかねるが、底面には凹凸が見られ、皿状または椀状を呈するものと思われる。掘り込みは第Ⅶ層中位まで行われており最大深は6cmを測る。

［覆土］ 主に黒褐色土で構成されており、炭化物粒を含む灰黄褐色の粘質土が一部分に堆積している。

遺物（第24図・写真図版16）

覆土から土器片が数点出土した。90は注口土器で、約3分の1を欠く。口唇部・頸部・底部には刻目帯があり、胴部は沈線及び磨消縄文（0段多条の非結束羽状縄文の充填）による入組文が施文されている。また、口唇部と胴部には粘土瘤の貼付けがある。縄文後期中葉に位置付けられるものと思われる。なお、この遺物はＩＣ区Ｉ層出土破片と接合した。89は原体圧痕、綾絡文の施文された口縁部片で、胎土には繊維を多量に含む。前期後半に位置付けられる土器である。

時期 底面出土遺物ではないため断言できないが、出土土器から縄文後期以降と思われる。

ＩＢ７ｊ①土坑

遺構（第17図・写真図版10）

［位置・検出状況］ ＩＢ７ｉ～７ｊグリッドに位置する。検出面は第Ｉ層直下の第Ⅶ層中位である。このため、上部はある程度削平されているものと思われる。南側約１ｍにＩＢ７ｊ②土坑がある。

［規模・平面形］ 長軸2.07m、短軸1.14mの長楕円形である。

［壁・底面］ 各壁とも外傾している。掘り込みは第Ⅶ層まで行われており、断面には表れていないが底面には凹凸が顕著に見られ、北西側へ傾斜している。深さは南東側で約20cm、北西側で約35cmである。

［覆土］ 黒褐色土を主体とする。下位ほど粘性・締まりともに増す。各層ともTo－Nbが混入しているが、量・粒径、また、粘性・締まり全てにおいて下位ほど増す。

遺物 なし。

時期 不明。

ＩＢ７ｊ②土坑

遺構（第17図・写真図版10）

［位置・検出状況］ ＩＢ７ｊグリッドに位置する。検出面は第Ｉ層直下の第Ⅶ層中位である。このため、上部はある程度削平されているものと思われる。なお、北側約１ｍにＩＢ７ｊ①土坑、西側約１ｍに柱穴状小土坑の一部がある。

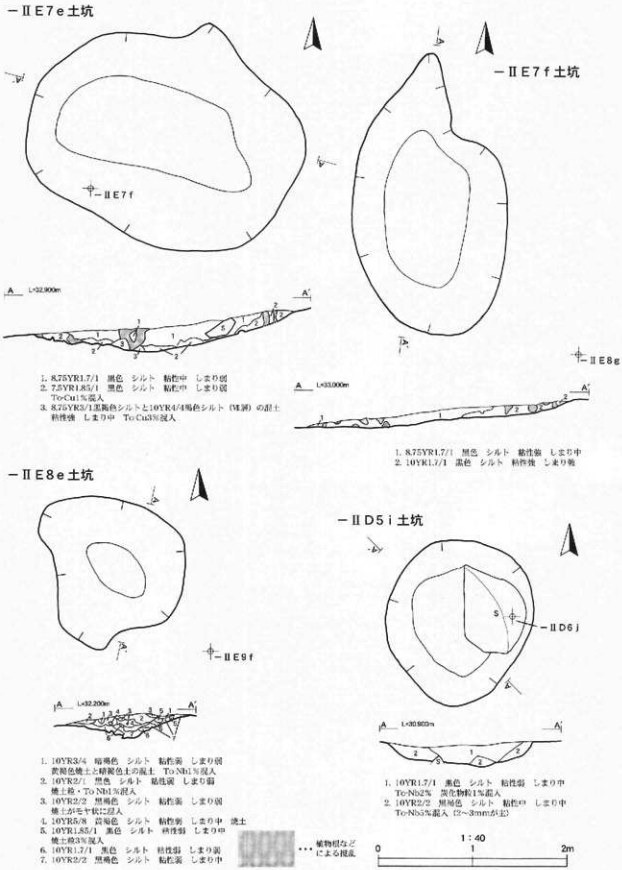
［規模・平面形］ 径1.55m程度の不整円形である。

［壁・底面］ 北東側は比較的急角度で立ち上がるが、他は緩やかに外傾しており、特に西側に顕著である。掘り込みは第Ⅶ層まで行われており、底面はすり鉢状を呈する。

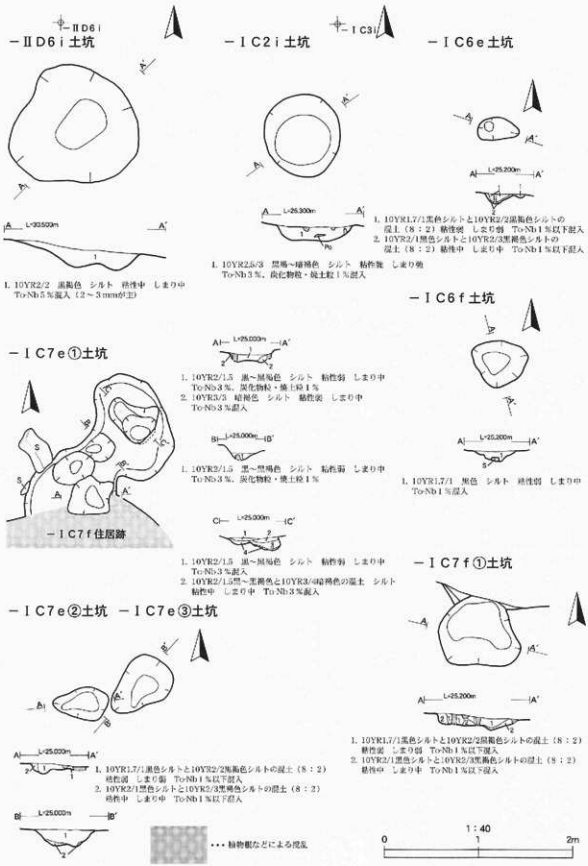
［覆土］ 質、混入物の異なる３層の黒褐色土で構成されている。各層ともTo－Nbが混入しているが、下位ほど粒径・量が増す。

遺物 なし。

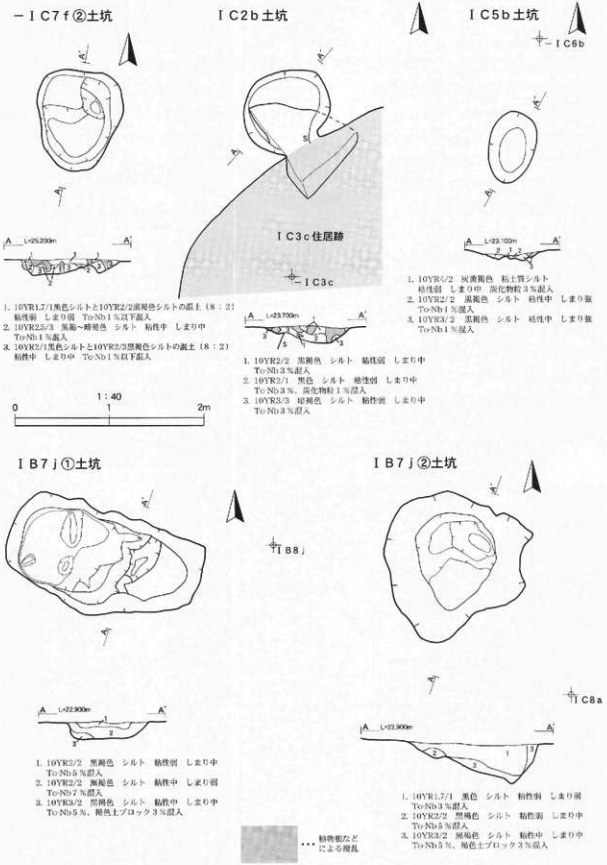
時期 不明。


－ⅡE7e土坑
－ⅡE7f
A L=32.900m A'
1. 8.75YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中 しまり弱
2. 7.5YR1.85/1 黒色 シルト 粘性中 しまり弱
To-Cu1%混入
3. 8.75YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルト（Ml層）の混土
粘性強 しまり中 To-Cu5%混入
－ⅡE7f土坑
－ⅡE8g
A L=33.000m A'
1. 8.75YR1.7/1 黒色 シルト 粘性強 しまり中
2. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性強 しまり強
－ⅡE8e土坑
－ⅡE9f
A L=32.200m A'
1. 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
黄褐色焼土と暗褐色土の混土 To-Nb1%混入
2. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性強 しまり弱
焼土粒・To-Nb1%混入
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性強 しまり弱
焼土がモヤ状に混入
4. 10YR5/8 黄褐色 シルト 粘性弱 しまり中 焼土
5. 10YR1.85/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり中
焼土粒3%混入
6. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱
7. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性強 しまり中
－ⅡD5i土坑
－ⅡD6j
S
A L=30.900m A'
1. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり中
To-Nb2% 炭化物粒1%混入
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中
To-Nb5%混入（2～3mmが主）
・・・植物根などによる撹乱
1：40
0 1 2m

第15図　土坑（1）


－ⅡD6ｉ土坑
－ⅡD6ｉ
A L=30.500m A'
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中
To-Nb 5％混入（2～3mmの土）
－ⅠC2ｉ土坑
－ⅠC3ｉ
A L=26.300m A'
1. 10YR2.5/3 黒褐～暗褐色 シルト 粘性強 しまり弱
To-Nb 3％，炭化物粒・焼土粒1％混入
－ⅠC6ｅ土坑
A L=25.200m A'
1. 10YR1.7/1黒色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの
混土（8：2）粘性弱 しまり弱 To-Nb 1％以下混入
2. 10YR2/1黒色シルトと10YR2/3黒褐色シルトの
混土（8：2）粘性中 しまり中 To-Nb 1％以下混入
－ⅠC6ｆ土坑
A L=25.200m A'
1. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり中
To-Nb 1％混入
－ⅠC7ｅ①土坑
A L=25.000m A'
1. 10YR2/1.5 黒～黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
To-Nb 3％，炭化物粒・焼土粒1％
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり中
To-Nb 3％混入
B L=25.000m B'
1. 10YR2/1.5 黒～黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
To-Nb 3％，炭化物粒・焼土粒1％
C L=25.300m C'
1. 10YR2/1.5 黒～黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
To-Nb 3％混入
2. 10YR2/1.5黒～黒褐色と10YR3/4暗褐色の混土 シルト
粘性中 しまり中 To-Nb 3％混入
－ⅠC7ｆ住居跡
－ⅠC7ｆ①土坑
A L=25.200m A'
1. 10YR1.7/1黒色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混土（8：2）
粘性弱 しまり弱 To-Nb 1％以下混入
2. 10YR2/1黒色シルトと10YR2/3黒褐色シルトの混土（8：2）
粘性中 しまり中 To-Nb 1％以下混入
－ⅠC7ｅ②土坑 －ⅠC7ｅ③土坑
A L=25.000m A'
1. 10YR1.7/1黒色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混土（8：2）
粘性弱 しまり弱 To-Nb 1％以下混入
2. 10YR2/1黒色シルトと10YR2/3黒褐色シルトの混土（8：2）
粘性中 しまり中 To-Nb 1％以下混入
B L=25.000m B'
・・・植物根などによる撹乱
1：40
0 1 2m

第16図 土坑（2）


－ＩＣ７ｆ②土坑
ＩＣ２ｂ土坑
ＩＣ５ｂ土坑
－ＩＣ６ｂ
ＩＣ３ｃ住居跡
－ＩＣ３ｃ
A L=25.200m A'
1. 10YR1.7/1黒色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混土（8：2）粘性弱　しまり弱　To·Nb１％以下混入
2. 10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中　しまり中　To·Nb１％混入
3. 10YR2/1黒色シルトと10YR2/3黒褐色シルトの混土（8：2）粘性中　しまり中　To·Nb１％以下混入
A L=23.700m A'
1. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To·Nb３％混入
2. 10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり中　To·Nb３％、炭化物粒１％混入
3. 10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To·Nb３％混入
A L=23.100m A'
1. 10YR1/2　炭黒褐色　粘土質シルト　粘性弱　しまり中　炭化物粒３％混入
2. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり強　To·Nb１％混入
3. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり強　To·Nb１％混入
1：40
0　1　2m
ＩＢ７ｊ①土坑
ＩＢ８ｊ
ＩＢ７ｊ②土坑
ＩＣ８ａ
A L=22.900m A'
1. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To·Nb５％混入
2. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり弱　To·Nb７％混入
3. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　To·Nb５％、褐色土ブロック３％混入
A L=22.900m A'
1. 10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり弱　To·Nb３％混入
2. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To·Nb５％混入
3. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　To·Nb５％、褐色土ブロック３％混入
…植物根などによる撹乱

第17図　土坑（３）

3．柱穴状小土坑

遺構（第18図、写真図版11）

［位置・検出状況］　調査区北東端のＩＢ８～９・ｇ～ｊグリッドから28基が検出された。検出面は第Ⅰ層及び水田造成時に盛られたと思われる攪乱層の直下に当たる第Ⅶ層である。このため、上部はある程度削平を受けたものと思われる。遺構は円形を呈する黒褐色土によって確認された。形態の近似する土坑がこの他にも若干確認されたが、覆土が第Ⅰ層と同じ様相を示していたことから、同覆土堆積分は近年のものとして除外した。また、調査区東端部分が遺構の全くない空白地となっているが、これは国道45号建設及び国道西側下水槽設置の際に攪乱を受けていることによる。

［規模・平面形］　平面形は円形基調のものが大半を占めるが、半月形、三日月形を呈するものもある。規模は開口部径12～65cm、最大深６～56cmと多様である。

［壁・底面］　各壁とも柱穴状に急角度で立ち上がる。

［覆土］　大半が粘性・締まりともに弱い黒色土で構成される。

［配置］　各土坑の位置から規則性を見出すことは出来ない。

遺物　なし。

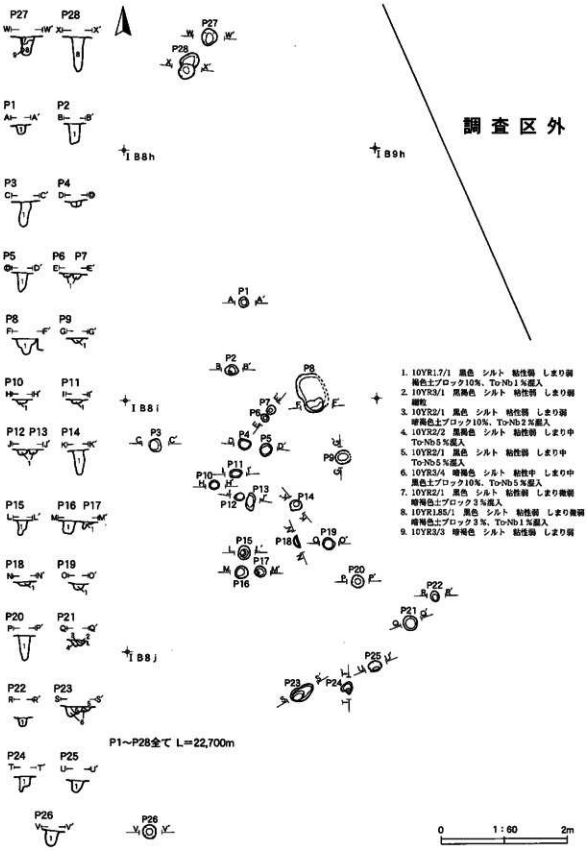
時期　不明。

小結　平成６年度調査区南西端付近からも同様の遺構群が検出されている。標高値も近いことから、同一の遺構群である可能性が高い。

柱穴状小土坑計測値（単位；cm（　）は残存値）

No	開口部径	深さ	No	開口部径	深さ	No	開口部径	深さ
P 1	18×16	14	P11	19×13	6	P21	25×23	10
P 2	21×16	32	P12	16×11	8	P22	16×13	13.5
P 3	21×18	39	P13	28×12	7	P23	40×21	15.5
P 4	21×16	8	P14	19×15	38.5	P24	20×19	24.5
P 5	22×18	30	P15	23×19	23.5	P25	21×17	19
P 6	14×12	6	P16	21×20	21	P26	24×21	25
P 7	16×13	8	P17	18×18	11.5	P27	27×25	55.5
P 8	65×(39)	24.5	P18	20×8	6	P28	43×25	29
P 9	21×(17)	7.5	P19	19×17	9			
P10	14×13	7.5	P20	20×20	38.5			

第３表　柱穴状小土坑　計測値


調査区外
I 88h
I 89h
I 88i
I 88j
P1～P28全て L=22,700m
1. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 褐色土ブロック10%、To-Nb 1 %混入
2. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 細粒
3. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 暗褐色土ブロック10%、To-Nb 3 %混入
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb 5 %混入
5. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb 5 %混入
6. 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性中 しまり中 黒色土ブロック10%、To-Nb 5 %混入
7. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり微弱 暗褐色土ブロック 3 %混入
8. 10YR1.85/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり微弱 暗褐色土ブロック 3 %、To-Nb 1 %混入
9. 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
0 1:60 2m

第18図　柱穴状小土坑

Ⅴ　遺構外出土遺物

出土した全遺物は縄文土器、土製品、石器、石製品、銭貨で、土器は縄文時代前期初頭から晩期（前期が主体）のものが大コンテナ（40×31×30cm）で約15箱分、石器は石核石器・礫塊石器を主体に中コンテナ（40×31×20cm）で約10箱分が出土している。これ以外のものは、土製品４点、石製品２点、銭貨２点と少量である。

遺物の出土地点及び層位には、ワウザイ川の北と南で若干の相違が見られる。北側では、遺物の大半が旧河道の流路及びその周辺から出土した。河床面礫層からも部分的に出土したが少量に限られ、ほとんどはその上位層、基本層序の第Ⅱ～Ⅲ層相当層から出土したものである。遺物の時期と出土層位に相関関係は見られない。一方、南側では、筋状に窪んだ－ⅡＥ４ｉ～９ｄグリッドライン付近からの出土が大半を占める。各層位毎の出土量にも大差はなく、第Ⅳ層からも一定量の出土が見られた。

なお、各遺物の分類は遺構内・遺構外とも本章で一括して行っている。ただし、遺構内出土遺物については前章で述べているので、ここでは遺構外分の詳細を記すこととする。また、作業時間の都合上、図化せず写真掲載のみとしたものが多々ある。ご了承いただきたい。

１．土器

出土した土器は多くが小破片であり、接合を試みても器形を復元できるものは少なく、完形品は全くない。ここには、接合の結果器形の推定が可能となったものは全て取り上げている。破片については、口縁部片で径５cm×５cm以上のもの、またはこれ以外でも器形・文様に特徴を持つもの、本遺跡における出土量の少ないものを最大限網羅するよう抽出し、可能な限り掲げた。

分類については、現在までの研究成果を基にして大まかな時期区分毎に次のような群を設定した。縄文時代早期末～前期前葉：第Ⅰ群、前期中葉～後葉：第Ⅱ群、中期：第Ⅲ群、後期：第Ⅳ群、晩期：第Ⅴ群の５群である。これらの中での小分類は第１類、第２類、のように表し、さらに細分した場合はａ種、ｂ種、のように表した。なお、前回報告（岩文振埋文　1996）との対比時に混乱をきたさぬよう同一の群名・類名・種名、項目を使用するのが望ましいと思われたが、出土遺物の内容に異なる点が多いため、新たな名称、項目を使用することとした。よって前回の分類とは一致しない部分が多々ある。ご了承いただきたい。

第Ⅰ群土器

縄文時代早期末葉～前期前葉に位置付くと考えられる土器群である。所々で散見される程度であるが、竜頭川南側にあたる－ⅡＥ区から比較的まとまって出土している。胎土には繊維を多く含み、砂粒・小礫が混入するものも目立つ。

第１類：結束羽状縄文が施されたもの（№91～94　第24図、写真図版17）

前回報告の第Ⅱ群第４類にあたる。94は０段多条の結束第１種で、原体の上下逆転により菱形状を作出している。胴部には綾絡文が横位に施文される。口唇部断面は丸い。胎土には繊維を含む。92は他に比して繊維の量が少なく、口唇部断面が内削ぎ状を呈する。

第２類：並行する横位の沈線が施されたもの（№95　第24図、写真図版17）

結束第一種の羽状縄文を横位に施文した後、５～10mmの間隔で横位の沈線が施されている。押し引き状を呈する所もみられるが、ごく一部のみで、はっきりしない。地文はおそらく０段多条かと思われる。

本群第７類に含まれる可能性が考えられる。

第３類：斜縄文主体のもの（№96～108　第24～25図、写真図版17・18）

前回報告の第Ⅱ群第６類にあたる。97・100～102はＬＲの斜縄文で、横位回転によるものである。０段多条が多用されている。胎土には繊維の他、１～２mm程度の粗砂粒（小礫）が目立つ。口唇部断面は、丸みを帯びるもの（97・100）と平坦なもの（101・102）がある。

99もＬＲ０段多条の横位回転であるが、節がかなり小さく、胎土に砂粒も含まないという点で前者と異なる。口唇部は平坦である。

103・104はＲＬの横位回転によるものである。103は丸底を呈し、底部付近の施文は多方向の回転による。やはり０段多条で、胎土には粗砂粒を多量に含んでいる。口唇部断面は平坦である。104の口縁直下約５mmは無施文であり、縄文施文部分との凹凸により庇状に浮き出したような状態を呈している。

106・107はＲＬＲの複節斜縄文である。106は胎土に砂粒を含み、口唇部断面は平坦である。107も砂を混入するが106に比して粗く、口唇部断面も丸形となっている。

第４類：組縄縄文が施文されたもの（№75　第23図、写真図版15）

前回報告の第Ⅱ群第７類にあたる。胴部片１点のみの出土である。胎土には繊維の他、粗砂粒を多く含む。

第５類：組紐回転文が施文されたもの（№109～111　第25図、写真図版18）

前回報告の第Ⅱ群第８類にあたるもので、胎土には砂粒を多く含む。109は口縁部片で、原体が粗悪だったのか、文様は大きく粗い。口唇部には原体圧痕が施される。110は胴部片で、内面にケズリに近い調整がみられる。

第６類：付加条縄文が施文されたもの（№112～114　第25～26図、写真図版18）

112は平縁の尖底土器で、口縁部付近が僅かに外反する。原体は０段多条のＬＲにＬを巻き付けたもので、これを横位回転で施文している。内面には丁寧なミガキ調整が入る。口唇部断面は概ね平坦である。胎土には繊維・砂粒とも含むが多量ではない。113には綾絡文が施されている。

第７類：押し引き沈線が施文されたもの（№115　第26図、写真図版18）

－ⅡＥ区第Ⅲ～Ⅳ層から出土した115の１個体のみである。波状口縁の尖底土器で、横位・斜位の押し引き沈線による広い口縁部文様帯、胴部に施文された０段多条の蕨状縄文、押し引き沈線が縦位に施文された底部などの特徴を有する。春日町２群Ｂ類、早稲田第６類ｂに相当する。

第８類：綾絡文が口縁部上端に施文されたもの（№116　第26図、写真図版18）

小波状口縁を呈し、口縁直下に横位の綾絡文が施文されている。地文は０段多条・結束第１種の斜縄文で、胎土には多量の繊維及び粗砂粒を含み軟質である。器形は若干丸みを帯びる。底部は未出土のため不明であるが、尖底の可能性が考えられる。

第９類：撚糸文が施文されたもの（№24・117～121　第20・26～27図、写真図版13・18～19）

撚糸文の施文されたものを一括したが、器形・原体・胎土ともに全く異なる様相を呈している。

ａ種：小波状口縁で平底と思われるもの（117・118）。117と118は直接接合しないが、文様・胎土・内面調整ともほぼ同じであるため同一個体と思われる。118の様相からおそらく平底であったものと思われるが確実ではない。胎土には繊維を多量に含む。小波状口縁を呈し口唇部断面は角形である。胴部は若干括れる。撚糸文は口縁部付近で斜位ぎみに、胴部で横位に回転施文されている。内面には丁寧なミガキ調整が入る。

b種：尖底を呈すると思われるもの（119・120）。原体は0段と思われる。色調は明褐色を呈し、胎土には繊維の他に細かい砂粒を多く含み、厚ぼったく脆い印象を受ける。

c種：細密な原体を使用しているもの（24・121）。121は口縁直下に横位の、体部には縦位の撚糸文が施される。胎土には粗砂粒を少量含む。

第10類：縦位の沈線を有するもの（122）

前回報告の第Ⅱ群第10類にあたるものである。沈線は半載竹管状の工具によるものと考えられる。胎土には細砂粒を多く含む。本類はこの1点のみの出土である。

第Ⅱ群土器

縄文時代前期中葉から後葉に位置付けられる土器群を一括する。分布の傾向は第Ⅰ群と若干異なり、多くが竜頭川北側からの出土である。円筒下層式に相当するもの、大木式に相当するもの及び両者の要素を併せ持つものが存在する。基本的に胎土には繊維を多く含む。

第1類：口縁部に綾絡文による文様帯が構成されるもの（№123～129　第27～28図、写真図版19）

口縁部の形状及び綾絡文の施文状態によって細分する。

a種：口唇部断面が角形で、綾絡文が口縁部上端に存在するもの（123～125）。口唇部断面は非常に明瞭に角張り、綾絡文施文による凹みと相俟って外側へ庇状に張り出したような印象を与える。器形は直線的で、胎土には多量の繊維を含み、焼成が良く硬質である。器厚は13mm前後と厚い。文様帯は幅の広いもの（123）と狭いもの（124・125）とがある。地文は器面全体に施文されており、前者には非結束で菱形を構成する羽状縄文が、後者には0段多条・非結束の羽状縄文が施されている。概ね大木1～2a式に並行するものと思われる。

b種：口唇部断面が角形で、綾絡文が頸部付近に存在するもの（126）。表裏縄文の土器で、地文は外面全体及び内面頸部付近、口唇部に施文されている。口唇部は角張るが、a種程ではなく庇状も呈さない。綾絡文は頸部付近に施文されており、幅は比較的広い。胎土には繊維を若干含む。

※本類a種及びb種は、口縁部の形状が第Ⅰ群第9類a種と類似しており、また同形状及び口縁部文様から第Ⅰ群第8類との共通点もみられる。今回はこの2類を第Ⅰ群、本類を第Ⅱ群（前期大木式相当は全て第Ⅱ群に含めた）と分けて報告したが、相互に影響を受けているものと考えられる。またその前後関係も不明である。

c種：口唇部断面が丸形で、綾絡文が等間隔に施文されるもの（127～129）。口唇部断面はa・b種と異なり丸い。127は綾絡文が2節1対で2条施文されている。この部分には地文が無い。地文は口縁部上端に約1cm程、以下は胴部から施文されている。128・129は綾絡文の各節間に一定の間隔が空く。大木2a式または円筒下層a式に相当するが詳細は不明である。

第2類：頸部に太い隆帯を廻らして口縁部文様帯を区画するもの（№83・130・131　第23・28図、写真図版16・20）

破片ばかりで、口縁上部を欠損しているものが多いため不明な点が多く、第3類a種を含んでいる可能性がある。隆帯は1条のもの、及び2条のものがあり、その上に回転縄文や連続刺突を施文する。130は隆帯上に円形竹管文が連続し、胴部には木目状撚糸文が施文される。

第3類：口縁部文様帯が広く、同帯に幾何学状の原体圧痕が施文されるもの（№26・65・87・132～141　第20・22・23・28図、写真図版13・15・16・20）

概ね円筒下層b～c式に相当するものと思われるが、細片が多く個々の時期判別は難しい。文様帯を区

画する頸部文様によって細分する。

a種：隆帯により区画するもの（132～135）。132・133・135の隆帯上には連続刺突が、134は原体圧痕が施文されている。132は小波状口縁で口縁部は外反し、頸部が括れる。

b種：原体圧痕により区画するもの（136～138）。他種に比べ脆く、粗雑な印象を受ける。口縁は上部で外反している。137は小波状口縁を呈する。

c種：原体圧痕＋連続刺突により区画するもの（26）。

d種：綾絡文により区画するもの（139）。口唇部表面には原体による刻みがあり、断面は平坦である。口縁部は外反し、頸部に括れを持つ。内面には丁寧なミガキ調整が入る。

第4類：単軸絡条体6A類が口縁部文様帯を構成するもの（142～144）

胎土に繊維及び粗砂粒を含み、南部浮石状の黄褐色粒もみられる。142の口縁部は直線的に立ち上がるが、143・144は口唇部断面が先細りして内側が薄く、やや外反気味となっており本群第5類と類似している。142・143は頸部にそれぞれ、原体圧痕＋円形竹管文、原体圧痕が施され、文様帯を区画している。円筒下層c式相当と思われる。

第5類：口縁部文様帯が狭く、同帯に原体圧痕が施文されるもの（№1・145～157　第19・29～30図、写真図版12・20～22）

円筒下層d式に相当する。文様帯を区画する頸部文様によって細分する。

a種：頸部区画のないもの（145～148）。文様帯は横位の原体圧痕数条によって構成され、同部には地文が施されない。胴部文様は斜縄文・羽状縄文で、おそらく口縁部と同原体を使用したものと思われる。

145～147の口唇部断面は丸いが、148は先細りして内側が薄く、内面には丁寧なミガキ調整がみられる。

b種：綾絡文が施されるもの（149・150）。149は胴上部2／3が結束したLR斜縄文、下部が多軸絡条体縦位施文によって構成されている。150は原体圧痕2条のみで構成され、地文は施文されていない。口唇部断面は丸く、a類146・147に類似する。

c種：連続刺突文が施されるもの（151～156）。6点とも刺突は右方向から行われており、器表面が若干隆起している。152～154の文様帯には絡条体圧痕（巻紐？）が施文されている。また、全点とも口唇部断面が先細り気味で、内面が若干薄い。内面には丁寧なミガキ調整が施される。154は頸部付近に括れを持つ。なお、器表面の色調が灰白色がかるものが多い。

d種：原体圧痕が施されるもの（157）。口唇部が先細りして内側が薄い、内面に丁寧なミガキ調整が施されるなど、本群第4類及び本類a・c種に近い様相を呈する。胴部には多軸絡条体が縦位に回転施文されている。胎土には繊維の他、粗砂粒を含む。

第6類：口縁部文様帯に縦位の原体圧痕もしくは隆帯が施文されるもの（№158～165第30～31図、写真図版22）

縦位施文部分が小波状もしくは小突起状を呈し、口縁部文様帯は横位・斜位の原体圧痕によって構成される。円筒下層d式に相当するものである。縦位文様によって細分する。

a種：原体圧痕が垂下するもの（158～160）。小波状口縁を呈し、内面に丁寧なミガキ調整が施され、胎土には繊維の他に粗砂粒を含む。159・160は綾絡文が頸部に横位、胴部に縦位施文されており、器表面の色調は灰白色を呈する。

b種：隆帯が垂下するもの（161・162）。隆帯上には原体圧痕が施文される。161は文様帯が広く、頸部を境に以上は内傾する。頸部には綾絡文が施されている。文様帯は縦位隆帯の他、横位の原体圧痕、刺突

列４条によって構成される。162は平縁で、隆帯が突出し小突起状を呈する。頸部に綾絡文横位施文による区画を持ち、括れる。内面には丁寧なミガキ調整が施される。図には表れていないが、口唇部断面は先細りして内面が薄い。161・162・165は小波状口縁を呈し、口唇部断面は丸い。胎土には砂粒を多量に含み、粉っぽい。165は頸部に刻み状の刺突がみられる。

第７類：口縁部文様帯に横位の原体圧痕が広間隔で施文されるもの（№66・163～169　第22・31図、写真図版15・22～23）

口唇部断面は丸く、胎土には砂粒を多量に含む。第Ⅲ群第１類にかなり近いグループである。文様帯構成は本群第６類ｂ種に似るが、原体圧痕の間隔、隆帯の大きさ、胎土に多量の砂粒を含む点が異なる。

第８類：内部に仕切を有するもの（№170　第32図、カラー写真図版１～２）

170は、口縁部径が長軸25.7㎝×短軸約20㎝のラグビーボールのような楕円形で、同長軸両端部が波状口縁を呈する土器である。この２単位の波状部内面ほぼ中央に、口縁から底面まで仕切板の一部が残存している。おそらく土器内部を二分していたものと思われる。底部径は口縁長軸方向10.5㎝×同短軸方向11.3㎝で、口縁～胴部と異なりほぼ円形である。内部調整は下半部が斜・縦方向、上半部が横方向のミガキであるのに対し、仕切部周辺はこれを切るように極端な縦方向のミガキが施されている。また、仕切部付け根の両脇にはクラック状の空間（ヒビ）が多く見られ、一部は側面から剥がれたような状態を呈している。これらのことから、仕切は土器本体の内面整形後に付けられたものと考えられる。仕切板の厚さは平均７～８㎜で、底面が若干厚く最厚12㎜を測る。仕切板はほぼ垂直に立ち上がるが、実測図Ａ面側へ若干傾く。胎土には繊維の他、粗砂が多く含まれており、本群第４類と同様の特徴を持つ。土器本体と仕切板の胎土に違いは確認されない。

文様は他と異なり特徴的である。断面が概ね丸い口唇部の上端に原体圧痕による刻みを持ち、頸部付近には竹管状工具による連続刺突のある隆帯が巡り、文様帯を区画している。同文様帯には原体圧痕が施される。他との大きな相違点は縦位隆帯及び胴部文様である。２波状部及びその中間の計４ヶ所に、口縁からほぼ底部まで隆帯が施されている。波状部（Ｂ面）の隆帯は２条あり、下方が長いＸ字状（鳥居状）を呈する。中間部（Ａ面）には底面と垂直に１条施文される。これら隆帯上には横位隆帯と同じく竹管状工具による連続刺突がある。胴部文様は結束第１種の羽状縄文であるが、横位ではなく縦位回転施文である。また、縦位隆線の左右数㎝に限って多軸絡条体が横位回転施文されている。

仕切の付いた土器の類例は、県内では軽米町の大日向Ⅱ遺跡にみられる。

第９類：第１類～第８類に属さないもの（№89・171～178　第24・33図、写真図版16・23）

第１～８類とは異なった様相を呈するもので、第１類（大木１？～２ａ式）を除く前期大木式（２～６式）に相当すると思われるものである。出土数がそれぞれ１～２点（破片）と少量であるため一括した。

171と172は接合しないが同一個体と思われるもので、全面に網目状撚糸文が横位施文されている。胎土には砂粒を多量に含み、繊維は他に比して少ない。大木２式相当と思われる。173は口唇部上及び口縁部に連続円形刺突、胴部に横位のＳ字状連鎖沈文が施されたもので、大木２ｂ式相当と思われる。176は頸部に２条の沈線と粗雑な連続刺突が施される。177は突起部にＵ字形の貼付がある。共に大木６式相当であろうか。

第10類：胴部・底部資料（№27・57・179～196　第22・33～34図、写真図版13・14・23～24）

第Ⅱ群土器の底部資料を一括した。179は複節・非結束の羽状縄文で、菱形を呈する。180は底部に綾絡文が横位施文される。195は上部に多軸絡条体、下部にＲＬが施されている。

第Ⅲ群土器

縄文時代中期に位置付けられる土器を一括する。第Ⅱ群に比して胎土には砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈するものが多い。第Ⅱ群に比して出土量は減少する。

第1類：口縁部に横・縦・斜位の原体圧痕が施されるもの（№197～201　第34図、写真図版25）

胎土には繊維を少量含む。197・200・201は山形状の突起部。198・199は横位・縦位原体圧痕の間にC字状の短い圧痕が並ぶ。円筒上層a式に相当する。

第2類：波状口縁で、波状部下に縦方向を主体とした隆帯或いは貼付を持つもの（№202～204　第35図、写真図版25）

貼付には∩状のもの（202・203）、ボタン状のもの（204）がある。内面調整は丁寧なミガキである。202は4単位の頂部を持ち、相対する頂部がそれぞれ凸形と凹形を呈する。また、それぞれの間には俵状の貼付が付されている。口唇部には平坦工具と半截竹管状工具による刺突が半円ずつ施され、胴部には縦位の綾絡文がみられる。円筒上層a式に相当する。

第3類：口縁部に縦方向の原体圧痕が施されるもの（№78・205　第23・35図、写真図版15・25）

78は山形突起を有し、205は折り返し口縁で同部が肥厚する。形態はそれぞれ第1類、第4類に似る。

第4類：口縁部文様帯に多様な隆帯を持ち、隆帯間にC字状の原体圧痕が施文されるもの（№206・207　第35図、写真図版25）

両者とも平縁で、口唇部には鋸歯状隆帯が廻る。隆帯上には直交する原体圧痕が施文され、内面調整は丁寧なミガキである。207は折り返し口縁で、口唇部が肥厚している。円筒上層b式に相当する。

第5類：口縁部文様帯に多様な隆帯を持ち、隆帯を縁取るように原体圧痕が施文されるもの（№79・208　第23・35図、写真図版16・25）

第4類と類似する。原体圧痕は隆帯施文後に施される。円筒上層b式に相当する。

第6類：口縁部文様帯に多様な隆帯を持ち、隆帯間にC・D字状の刺突が施文されるもの（№209～211　第35～36図、写真図版26）

209・210は同一個体の可能性が高いが、両者では刺突の形態が若干異なる。209にはC字状が多く、原体圧痕に似た痕跡を残すものがあるのに対し、210は大半がD字状である。突起は大形で花弁状を呈し、各突起部内面には長さ6～7㎝、幅1～1.5㎝の横位沈線が存在する。また、表面突起下13～14㎝程にはボタン状貼付がみられる。円筒上層c式に相当する。

第7類：文様帯のないもの（№212　第36図、写真図版26）

山形突起を有し、口唇部内外面に隆帯が施されており、同部は若干肥厚している。外面部分には篦状工具による刻みが入る。また、突起下にはボタン状貼付がある。地文にはLRが口縁部付近で横位、胴部では斜位に施文されている。円筒上層c～d式に相当するものと思われる。

第8類：口縁部・胴部に弧状・波状の沈線文が施されるもの（№80・213～217　第36図、写真図版16・36）

胎土に含まれる砂粒径が第7類までより若干大きい。214は口唇部に鋸歯状の隆帯が廻る。217は胸骨状を呈する沈線文が施されている。80・214は、胎土・文様・出土状況から同一個体である可能性がある。213は山形突起を有し、突起頂部から短い隆帯が垂下する。215は口唇部断面が三角形で、外面に斜位の太い刻みが入る。円筒上層e式に相当するものと思われる。

第9類：大木8～9式に相当するもの（№218～228　第36～37図、写真図版26～27）

主に隆沈線、粘土紐貼付によって渦巻文を構成するグループである。8b式が最も多い。218はキャリ

パー形を呈する。218・220の胴部文様は3本組の沈線によって構成されている。

第10類：大木10式に相当するもの（№229　第37図、写真図版27）

1個体のみの出土である。大形の深鉢で4波状口縁を呈し、口縁部には下方から施文された2～3列の刺突が廻る。胴部には隆線によって描かれたC字状文様が展開している。

第11類：粗製土器及び胴部・底部資料（№19・20・25・28～30・60・76・88・230～254　第20・22・23・37～38図、写真図版13・14・15・16・27～29）

第Ⅲ群に属すると思われるものを一括した。230は円筒上層式と思われるが地文のみのためここに含めた。口縁部片は全て中期後半に位置付けられるものと思われる。

第Ⅳ群土器

縄文時代後期に位置付けられる土器を一括する。住居跡付近からの出土が多いが全体的に遺物は少なく、遺構以外では調査区全域に散見される程度である。

第1類：沈線文或いは原体圧痕が施され地文のみられないもの（№255～257　第38図、写真図版29）

小破片のみであるため詳細は不明だが、残存部に地文はみられない。255･256には沈線文、257には原体圧痕が多様に施される。後者は折り返し口縁である。後期初頭に位置付けられる。

第2類：沈線と磨消縄文による方形・鉤状文様が施されるもの（№258　第38図、写真図版29）

沈線による区画内には斜縄文が施されており、器形は若干括れている。第3類に比して胎土に粗砂粒を多く含み、内面調整も粗い。後期前葉に位置付けられる。

第3類：沈線と磨消縄文による入組文様が施されるもの（№32・33・68～70・90・259・260　第20・22・24・38図、写真図版13・15・16・29）

口唇部断面は内削ぎ状で、同部内側は肥厚している。内面には丁寧なミガキ調整が施される。後期中葉に位置付けられるものである。刻目帯の有無で細分する。

a類：刻目帯のないもの（32・68）。原体は0段多条で、68は斜縄文主体、32は非結束の羽状縄文が施される。

b類：刻目帯を有するもの（33・69・70・90・259・260）。259は突起部のみのため胴部文様が不明であるが、近似しているためここに含めた。33は沈線区画内に羽状沈線がみられる。これ以外のものは全て0段多条・非結束の羽状縄文である。

第4類：粘土瘤の貼付が施されるもの（№261～266　第38～39図、写真図版29）

口唇部断面形、内面調整、原体の種類は第3類と同様であるが、原体がさらに細密になる。また、入組文等の帯も小柄となる。後期後葉に位置付けられるものである。瘤の形状により細分した。

a種：丸いもの（261・262）。口唇部及び頸部？に貼付られており、直径約5㎜と小さい。

b種：叉状のもの（263～265）。264は口唇及び口縁部の帯間沈線上に施されており、口唇部のものは大小一対になるものと思われる。

第5類：折り返し口縁のもの（№34・35・84・267～269　第20・23・39図、写真図版13・16・29）

84・267・268は口縁から底部にかけてほぼ地文のみが施文される。施文方向は斜位が多い。34には沈線もみられ、地文は横位施文である。後期初頭～前葉頃に位置付けられるものと思われる。

第6類：条線文が施文されるもの（№270・271　第39図、写真図版30）

櫛目状の工具による施文と考えられる。第Ⅰ群第10類とは、条線が直線的で均等である、胎土が脆くな

いなど状態が異なる。後期初頭～前葉に位置付けられるものと思われる。

第７類：粗製土器及び胴部・底部資料（№36・37・58・61・81・85・272～277　第20・22・23・39～40図、写真図版13・14・16・30）

第Ⅳ群に属すると思われるものを一括した。粗製土器の口唇部断面は内削ぎ状で内側が肥厚している。

第Ⅴ群土器（№７・８・82・278～285　第19・23・40図、写真図版12・16・30～31）

縄文時代晩期に位置付けられる土器を一括する。全て斜面下部に当たるーＩＣ及びＩＣ区からのもので、出土量は極少数である。大洞ＢＣ、Ｃ式相当が存在する。

製塩土器（№９～11・286～296　第19・40図、カラー写真図版２～３、写真図版12・31）

前回報告の第４群第８類「無文で薄手の土器」に相当するもの。器厚が薄く非常に脆い、器表面の剥落している割合が高い、ほとんど無文でナデ・ミガキなどの調整のみが施される、色調は灰白色或いは黄橙色を呈する、尖底またはこれに近い形を呈する、等の特徴を有するもので、製塩土器と考えられるものである。本遺物群も例に漏れず各時期の遺物と伴出する状態であり、しかも文様が施文されず、製作技法も他の土器と似ないため時期の特定は難しいが、久慈市大声Ｉ遺跡では大洞ＢＣ～Ｃ１式と伴出している（岩文振埋文1999）。ただし本遺跡出土品の明確な時期は不明である。

出土量は40×31×20cm規格のコンテナ約１箱弱分で、総重量は1,650ｇを測る。今回出土した製塩土器は大きく２種に分類される。１種（９～11・287～291・295）は胎土が灰黄褐色やにぶい黄橙色で、器厚は約３～５mm、外面の剥落がひどい。口縁はおそらく平縁で、尖底だったものと思われる。もう１種（286・292～294・296）は胎土が灰白色、器厚は５～６mmで前者より厚く、外面に細かいクラックが顕著に見られるものである。口縁はおそらく平縁で、底部は小平底・丸みを帯びた尖底を呈する。両者とも指頭による押圧及びナデによって調整されており、同調整は内面の場合全体に施されるが、外面は輪積付近以外はほとんど施されない。

ミニチュア土器（№６・297～300　第19・40図、写真図版12・31）

ミニチュア土器と思われるものを一括した。６・298～300は胎土が白色で、手づくね製で文様は無い。299はワイングラス形を呈する。本遺物群も各時期の遺物と共伴する状態であり、明確な時期は不明である。

２．土製品

土製品は３種４点が出土している。

(1)　**土偶**（№301　第40図、写真図版31）

ーＩＤ５ａグリッドＩ層からの出土で、欠損品である。おそらく右脚部に当たるものと思われる。表面には連続刺突により何らかの模様が描かれている。縄文時代後期中葉頃のものと思われる。

(2)　**環状？土製品**（№302　写真図版31）

ーＩＣ８ｆグリッドＩ層からの出土。欠損品で２cm前後しか残っていないため詳細は不明。

(3)　**泥面子**（№38・303　写真図版13・31）

２点出土しており、38はＩＣ３ｃ住居跡覆土中から、303はーＩＣ５ｊグリッドⅡ層下位からの出土で、後者は完形である。江戸時代以降のものと思われる。

3．石器

石器として、遺構内31点・遺構外143点の計174点を登録した。この内訳は、剥片石器・剥片類51点、石核5点、石核石器・礫塊石器118点である。剥片類、特に石核石器製作に伴う剥片及び剥片石器素材と思われる赤色頁岩製剥片（両極打法を多用）が相当量出土したが、今回は遺構内出土分のみ登録し、遺構外出土分は時間的制約のため登録から除外した。また、礫塊石器類はかなり数を絞って（1／2程度）掲載している。

器種の掲載順序については基本的に前回報告と同様の方法で行っている。ただし土器と同様に、①前回調査で出土していない器種がいくつか存在し、またその逆の場合もあること、②同様器種が出土している場合でも、新たに別分類を行ったものがあること等、若干の変更点があるのでご了承いただきたい。

石鏃（№41・304～307　第21・41図、写真図版13・32）

扁平で左右対称、尖頭部とそれより幅の広い基部を有する小形の石器を石鏃とした。5点出土しており、茎の有無によりⅠ～Ⅱ類に分類した。

第Ⅰ類：無茎のもの（41・304～306）

304は基部が直線状を呈し、側縁部がやや外湾している。41・305・306の基部は内側に緩く内湾する。

第Ⅱ類：有茎のもの（307）

菱形状を呈する凸基有茎鏃の範疇に入る。先端部・基部ともに若干欠損している。

尖頭器（№308　第41図、写真図版32）

両側縁からの調整によって先端部を作り出しているもので、1点のみ出土した。基部が横方向からの加撃により折れている。

石錐（№42　第21図、写真図版13）

鋭い尖頭部を有し、孔を穿つのに用いられたと考えられる石器である。両側縁とも表・裏両面から緩斜度調整が施されており、先端部の調整は急斜度で、特に入念である。末端部にも若干の剥離が見られるものの、連続的でない。石錐はこの1点のみの出土である。

石匙（№71・309～312　第22・41図、写真図版15・32）

一端部に両側縁から抉りを入れることによってつまみ部を作出し、他側縁に刃部を有する石器である。平面形状によりⅠ～Ⅱ類に分類した。

第Ⅰ類：つまみ部が器体の長軸方向に位置するもの（309～311）

縦型のもので、3点出土している。内、2点は刃部下半が欠損しているため同部の詳細は不明である。完形品である309は右側縁が直線状で左側縁が「く」の字状に張り出す横向きの二等辺三角形状を呈する。表面全側縁に急斜度調整が施されており、特に左側縁下半の調整は深い。裏面の調整は緩斜度で、つまみ部および左側縁中央部に見られるのみである。後者の調整は打瘤除去を意図したものであろう。欠損品2点は、ともに打瘤部分がつまみ部にあたり、素材の用い方という点で共通している。

第Ⅱ類：つまみ部が器体の長軸方向と直交する方向に位置するもの（71・312）

横型のもので、2点出土している。ただし、裏面の調整状態が若干異なる。71は表・裏両面ともに急斜度調整が施され、特に末端部に顕著である。断面は凸レンズ状を呈する。素材の打瘤部分がつまみ部にあ

たっており、打瘤はつまみ作出の際に除去されている。一方、312は表面のほぼ全側縁に急斜度調整が施されるが、裏面ではつまみ抉入部付近および右側縁に限られ、末端部は調整されていない。このため、断面形はかまぼこ状を呈する。本遺物は素材の打瘤部分が右側縁にあたっており、裏面の調整は打瘤の除去とつまみ部の作出を目的として行われたものと考えられる。

石匙（№313～316　第41図、写真図版32）

平面形は基部が狭い撥形・短冊形・楕円形を呈し、緩斜度調整により刃部を設けているものを石匙とした。4点存在する。313・314は短冊形を呈するが、前者は片面調整、後者は両面調整である。315は楕円形で両面調整である。ただし、両面調整の2点は裏面に極緩斜度調整が施されており、片刃状に成形しようとした意図が窺われる。316は薄手の不整剥片を素材とし、幅広端部にのみ連続調整を施し刃部を形成している。片面加工であるが両刃状を呈する。

掻器（№317～321　第41～42図、写真図版32）

剥片片面の一側縁以上に急斜度調整を施し刃部を設けているものを掻器とした。5点出土している。石材・形状ともに共通性は見られない。317～319は、素材の一端に刃部を持つ。317は円形を呈し、刃部は平刃に近い。318はホルンフェルス製の薄い剥片を素材としており、右側縁側が裏面からの加撃により折れている。形状は扇形で、調整は刃部付近にのみ施され、弧状を呈する。刃部右半に摩滅が見られる。319は方形で刃部は平刃を呈し、刃部角は90°に近い。基部側は表面からの加撃により欠損している。320は左側縁から素材末端部へかけて連続的な調整が行われており、側縁部には浅形、末端部には深形調整が施されている。また、本遺物の表面には縦長剥片を獲得していたと思われる規則的な剥離痕が並行して見られることから、本遺物素材剥離の前段階にはある程度規格的な剥片を作出していたことが予想される。321はほぼ全周に刃部を持つもので、硬質頁岩製の縦長剥片を素材としている。

削器（№62・322～329　第22・42図、写真図版14・33）

剥片の側縁に、縁辺の1／2以上の長さの連続的な調整を施して刃部を作り出したものを削器とした。9点出土している。322・324・325は硬質頁岩製の縦長剥片を素材としており、322は右側縁表面側に、325は右側縁表面側および左側縁裏面側に、324は左側縁裏面側にそれぞれ連続調整を施し刃部を設けている。326は黒色頁岩製で、横長剥片の末端部に刃部を作出している。327は緑色頁岩製で、左右両側縁に表・裏両面から調整を施しており、尖刃形を呈する。

ピエス・エスキーユ（№43・330～332　第21・43図、写真図版13・33）

対向する両側縁に、階段状またはリングの密な剥離や打滅痕が認められるもので、4点出土している。石材は全て頁岩であるが、43・331は灰白色、330は赤色、332は黒色である。330は一部に礫面を残すもののほぼ全体に入念な両面調整が施され、平面形は台形状を呈する。331は両極打法で獲得された剥片を素材とし、末端部裏面に細部調整が加えられている。332の調整は4方向から入っているものの非常に粗い。

細部調整剥片（№15・44・333～338　第19・21・43図、写真図版12・13・33）

細部調整が行われた剥片で、定型的な刃部を持たないものを一括した。44・333～336は素材長軸の一端部

付近、15・337・338は側縁にそれぞれ調整が見られる。15は削片状を呈し、幅1cm程と非常に小形である。

石核（№339～343　第43図、写真図版34）

石核と思われるものは5点出土した。石質は全てチャートである。両面に作業面が存在するのは339のみで、他はほぼ片面の側縁1／2程度に限って剥片剥離を行っている。339は片面のみ全周を打面として使用しており、裏面は他と同じく側縁1／2程度からの剥離に限られる。

剥片・石器片（№14・39・40・45～47・72・344・345　第19・21・23・43図、写真図版12・13・15・16・34）

特徴的なもののみ掲載し、他は時間的制約のため不掲載とした。石斧・礫器等、石核石器の剥片が大半を占めており、剥片石器の調整剥片はほとんど出土していない。

344は右側縁に表面からの打撃による平行する剥離痕を有するもので、スポール状を呈する。石核の打面再生剥片の可能性がある。39・40・45・46・72は石核石器の調整剥片である。

345は石器片で、尖頭器の基部と思われる。

石斧（№48～52・74・346～369　第21・23・43・44、写真図版14・15・34～36）

ここにはいわゆる打製石斧と磨製石斧等の石斧類、およびそれらの未製品と思われるものを掲げた。調整方法とその部位の違いなどからⅠ～Ⅴ類に分類している。

第Ⅰ類：細かい敲打・研磨によって器形・刃部が成形されるもの（48・51・346～356）

いわゆる磨製石斧である。表面形に大きな違いはなく、短冊形や撥形を呈する。調整方法・部位から以下の3種に細分した。

a種：刃部の表・裏両面に顕著な研磨痕が観察されるもの（51・346～350）。器面全体に渡って入念な研磨が施されているのは（346・347・349）の3点のみで、他は敲打痕を残す。形態は350のみ短冊形で、他は撥形を呈する。

b種：刃部の片面に顕著な研磨痕が観察されるもの（48・351～353）。353は表面刃部付近および裏面基部側に研磨痕がある。これ以外は刃部周縁が局部的に研磨されるのみである。a種と同じく研磨されていない部分には敲打痕が残る。48・352は刃部が若干欠損しており、連続的な調整のように見える部分もあるが、無剥離部分に研磨痕が残っていることから意図的な剥離ではなく、使用時の欠損と思われる。

c種：a・b種以外のもの（354～356）。欠損・風化等により分類が困難なものを便宜的にcとした。354は基部側が欠損しており、風化著しい。355・356は刃部側が欠損したもので、全体に敲打痕が観察される。356の表面中央部は研磨されている。

第Ⅱ類：剥離調整によって器形・刃部が成形されるもの（49・52・357～362）

いわゆる打製石斧である。調整方法とその部位の違いから2種に細分した。

a種：片面に礫面を大きく残し、もう片面は調整剥離が施されているもの（49・52・357～361）。礫面をそのまま利用しているタイプである。358・359は裏面全部に剥離調整が施される。361は分銅形を呈し、両側縁中央上半部は両面からの調整によって括れている。着装を意図したものと思われる。

b種：両面が剥離調整で成形されているもの（362）

1点のみの出土。今回出土した石斧類の中で最も大形である。

第Ⅲ類：Ⅰ・Ⅱ両類の特徴を併せ持つもの（50・74・363～366）

剥離、敲打、研磨の各調整痕が残置しているもの。刃部の調整方法から2種に細分した。

a種：刃部の片面が研磨、もう片面が剥離によって調整されているもの（74・363～365）。4点出土した。74・364はⅡ類a種と同様の剥離調整が入っており、この後部分的に敲打→研磨が行われている。363はほぼ全体に敲打痕があり、その後表面研磨→裏面末端部に剥離調整を施し刃部を作出している。剥離調整は刃部以外見られず、Ⅰ類に非常に似る。365は両面とも研磨されているが、敲打痕は見られない。

b種：刃部が両面とも剥離によって調整されているもの（50・366）。剥離→敲打→研磨の順で調整されるが、研磨は表面の中央部付近から上方に行われるのみである。

第Ⅳ類：未製品と思われるもの（367・368）

製作途中と思われるものである。367はこの状態で使用していた可能性もある。

第Ⅴ類：丸のみ形石斧（369）

打製石斧の範疇に入るが、特殊な形態であることから別分類とした。円柱状の礫を素材とし、一端部の片面にほぼ平坦で広い調整を入れ、この剥離面を打面として反対面に弧状を呈する刃部を形成している。なお、基部側裏面にも刃部裏面と同様の剥離が入っており、最初の剥離を行う際に両極打法を用いた可能性がある。

礫器（№12・16・370～403　第19・44～45、写真図版12・36～37）

礫の一部に連続的な剥離によって刃部が作られた石器である。出土石器中最も数量が多く、半数程度のみ抽出して掲載した。今回出土したものは全て片面礫器で、両面礫器は未出土である。

刃部角は鋭角なものと鈍角なものとがあり、後者は刃部の再生を重ねたことによるものと思われ、器長が短い。また、刃部形態は、弧刃状、平刃状、尖刃状、斜刃状を呈するものなど様々である。なお、刃部がほとんど摩滅していないものが相当数あり、これらは石核であった可能性も考えられる。

使用石材は砂岩や細粒閃緑岩が多く、その他石英安山岩、ヒン岩、ホルンフェルスなどが用いられている。

半円状扁平打製石器（№404～410　第45図、写真図版38）

礫の一側縁が直線状、反対側縁が弧状で、器形が概ね半円状を呈するように剥離調整の施された石器である。出土数は9点と少ない。他の石核石器類、特に石斧・礫器と区別する際、①側縁部を意識的に加工しているか（長軸末端部を刃部としていないか）、②側縁に磨痕が存在するか、③半円状を呈するか、等をポイントとした。まず①を重要視して分類しているため、必ずしも半円状を呈していない。

第Ⅰ類：両側縁に磨痕が認められるもの（404）

扁平な円礫を素材としており、両面に礫面を残す。両側縁とも両面調整が施されているが、弧状を呈する側縁部（実測図左側縁・以下、弧状部と呼ぶ）の両端部側は他に比して調整が深く、意図的にこの形状を作出したことが窺える。その他は直線を呈する側縁部（実測図右側縁・以下、直線部と呼ぶ）の調整と大差ない。

第Ⅱ類：直線部にのみ磨痕が認められるもの（405～407）

405以外は表面の広範囲に円礫面が残る。406・407は磨痕が顕著で、弧状部は裏面のみの調整によって作出されている。なお、407はほぼ半分が折れにより欠損している。405の素材は意図的に作出されたものではなく、元々薄手であった角礫を素材として使用したものと思われる。調整は両側縁中心に施されており、形状は短冊形を呈する。

第Ⅲ類：磨痕の認められないもの（408～410）

直線部の調整により細分した。

a種：両面調整のもの（408・409）。408は、Ⅰ類の405と同様に薄い角礫を素材として利用したものと思われる。側縁部には左右両側とも両面調整が施されており、直線部は概ね緩斜度調整である。一方、左側縁上半部は急斜度浅形調整が施されており、同部分は丸みを帯びる。409は両面に円礫面を残す。左側縁の調整は下半部にのみ施され、これにより弧状を呈している。

b種：片面調整のもの（410）。直線部の調整は裏面に集中しており、表面の大部分に円礫面を残す。同部の調整は極緩斜度である。弧状部の調整は、表面では上部を除く全域、裏面では上部及び下部に見られる。同部には素材剥離時の打面が9～13mmの厚さで残置している。

磨り石（№17・411～416　第19・45図、写真図版12・38～39）

円形、扁平、或いは断面三角形を呈する縦長の円礫を用い、その縁辺に細長い磨面が見られる石器である。7点出土している。平面形が半円状扁平打製石器に近い形態のものもあるが、これとは磨面（直線部）に連続剥離調整が施されているか否かで区別した。

第Ⅰ類：扁平な礫の一側面に磨痕がみられるもの（411・412）

形態が「半円状」に近いものである。磨面の幅は「半円状」に比して広い。412の磨面中央部には若干の剥離がみられるが非常に単発的で、礫面をそのまま使用している部分が大半を占める。一方、左側縁には急斜度調整が両面に施されており、表面末端部には若干緩く深い調整が入る。なお、上半部は折れにより欠損している。411の磨面中央部にも同様の剥離が存在する。また、一端部にも磨痕が若干観察される。

第Ⅱ類：断面三角形の礫の側面に磨痕がみられるもの（413～415）

413・414は1側面に、415は2側面に磨痕が存在する。いずれも端部には敲打痕が観察される。なお、415は一端部が欠損している。

第Ⅲ類：円形の礫の一部に磨痕がみられるもの（17・416）

2点とも小さく、17・416の最大径はそれぞれ3.6cm・5.5cmと小さい。磨面が平坦化しており、若干の光沢を帯びている。

石錘（№417～419　第45図、写真図版39）

礫の長軸両端部に抉りを有するもの。3点出土した。417・418は片面から、419は両面からの剥離により抉りを作出している。417は打面側にのみ礫面を残す。

敲石（№13・18・53～56・63・73・420～442　第21・22・23・45～46図、写真図版12・14・15・39～41）

礫の端部や周辺部に敲打痕が認められるもの。2／3程度を抽出して掲載した。「敲く」行為のみのものと、これに「磨る」行為が加わったものの2種類が存在する。前回報告に従い、面的な敲打の見られるもの（敲磨の認められるもの）をⅠ～Ⅲ類、それ以外のものをⅣ類として分類した。

第Ⅰ類：面的な敲打痕が一端（1側面）にみられるもの（73・420～424）

ほぼ円形に近い礫及び平面円形の扁平礫を用いたもの（420・421）と楕円形・長楕円形のもの（73・422～424）とがある。420は一端の広範囲を使用しており、円錐状を呈する。423・424は磨り棒状を呈しており、端部に僅かな敲打痕が残る。

第Ⅱ類：面的な敲打痕が両端（２側面）にみられるもの（54・55・63・425～428）

ほぼ円形に近い礫及び平面円形の扁平礫を用いている。425は砂岩製で、縁辺両面を使用しており、同部の断面はく字状を呈する。

第Ⅲ類：面的な敲打痕が３側面以上にみられるもの（53・429・430）

平面円形の扁平礫を用いている。全て砂岩製で、53・429は３側面に、430は全周に使用痕が観察される。形態も全て同一で、縁辺両面を使用しており断面がく字状を呈する。

第Ⅳ類：敲打痕がⅠ類～Ⅲ類のような面的な構成をとらず、従って「磨る」という所作は考えられないもの（13・18・56・431～442）

便宜的な類設定であるので、様々なタイプのものを含めている。一端（１側面）に敲打痕が観察されるもの（13・431～435）、両端（２側面）に観察されるもの（18・436～438）、３側面に観察されるもの（439）、長めの礫の側辺に敲打痕が観察されるもの（440）、片面・全面に浅い敲打痕が観察されるもの（56・441・442）などがある。

凹石（№443・444　第46図、写真図版41）

礫の平坦面に凹みがみられるものである。２点出土しており、凹面は片面中央部に存在する。

台石（№445・446　写真図版41）

礫の平坦面に磨痕や潰痕が観察されるものである。２点出土しており、445は径５cm程の潰痕が存在する。446は断面がかまぼこ形を呈する長方形の礫で、長さは37.3cmを測る。微細な潰痕が平坦面全体に観察される。

４．石製品（№447～449　第46図、写真図版41）

３点出土しており、それぞれ別種である。447は円盤状石製品で、風化がひどく整形方法は不明。凝灰岩製である。448は環状を呈するもので、側縁近くに径約22mmの穴が１ヶ所穿たれている。裏面は平坦に加工されているが表面は欠損しているらしく、凸凹が顕著に残る。449は雲或いは耳のような形を呈するもので、片面に約25mmの凹みが２ヶ所存在する。何なのかは不明だが、新しいものの可能性がある。

５．銭貨（№450・451　第46図、写真図版41）

寛永通宝が２枚出土した。450はーＩＥ区内の現河道岸において表採、451はＩＣ５ｅグリッドＩ層から出土したもので、両方とも新寛永である。451は磨耗が激しい。

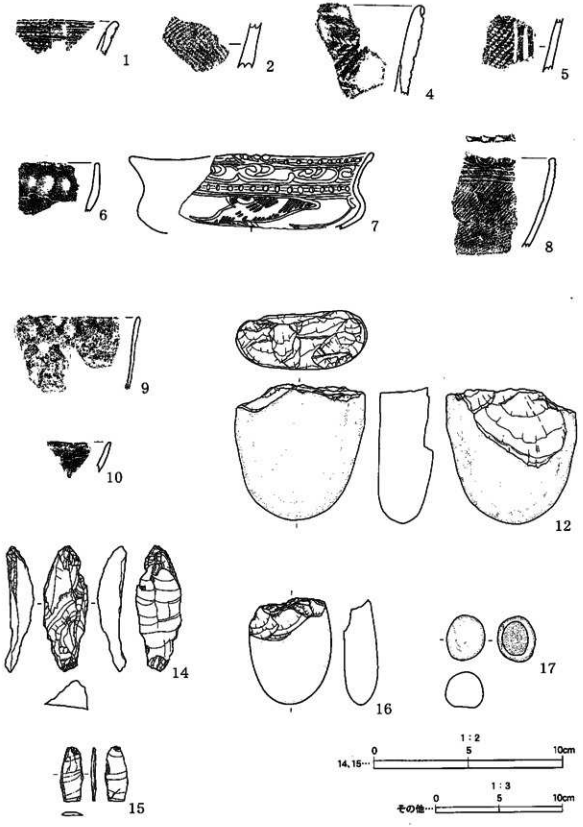
参考・引用文献

岩文振埋文　1996　『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第238集

岩文振埋文　1998　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第６次～第８次調査－』岩文振埋文調査報告書第273集

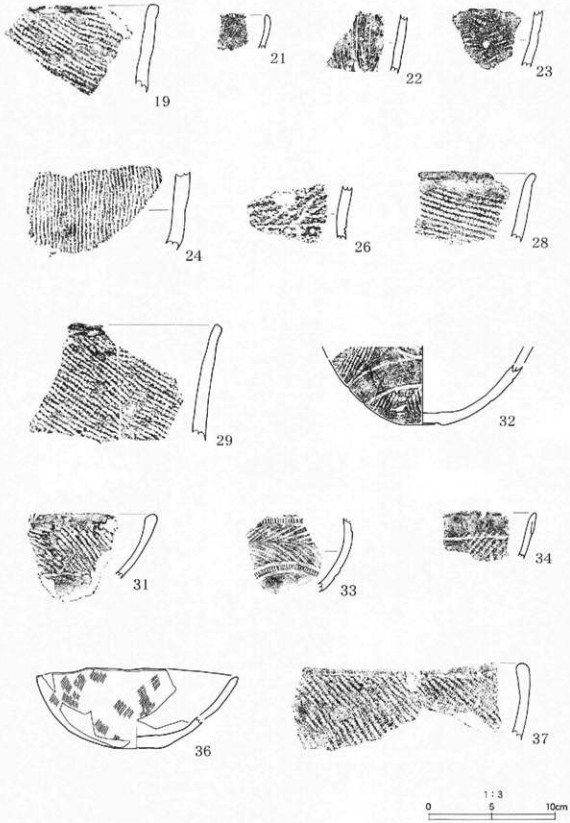
岩文振埋文　1999　『大声Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第306集

－ＩＣ７ｆ住居跡

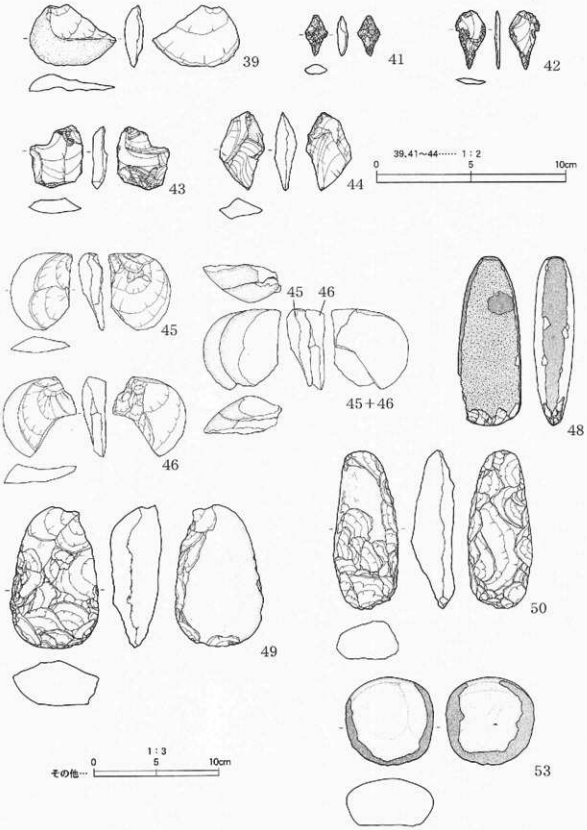


第19図　遺構内出土遺物（１）

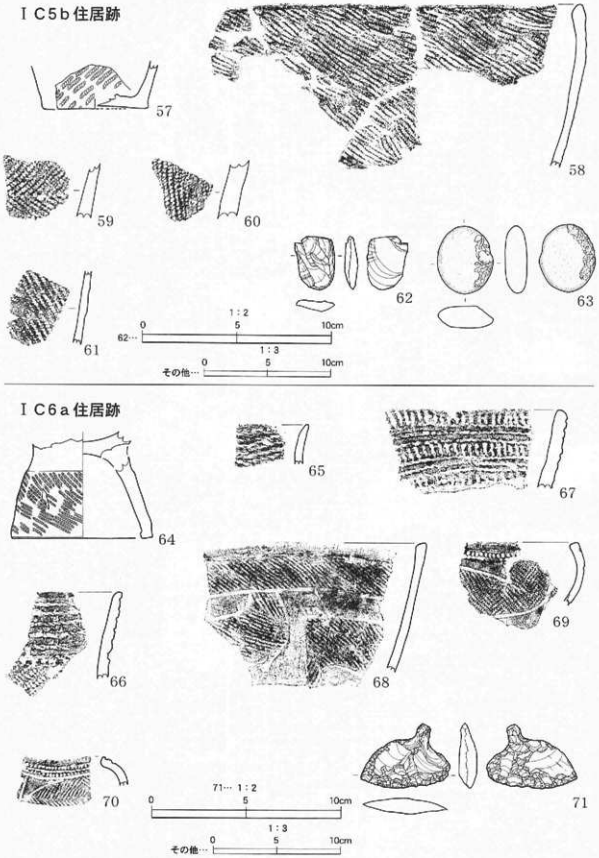
ＩＣ３ｃ住居跡



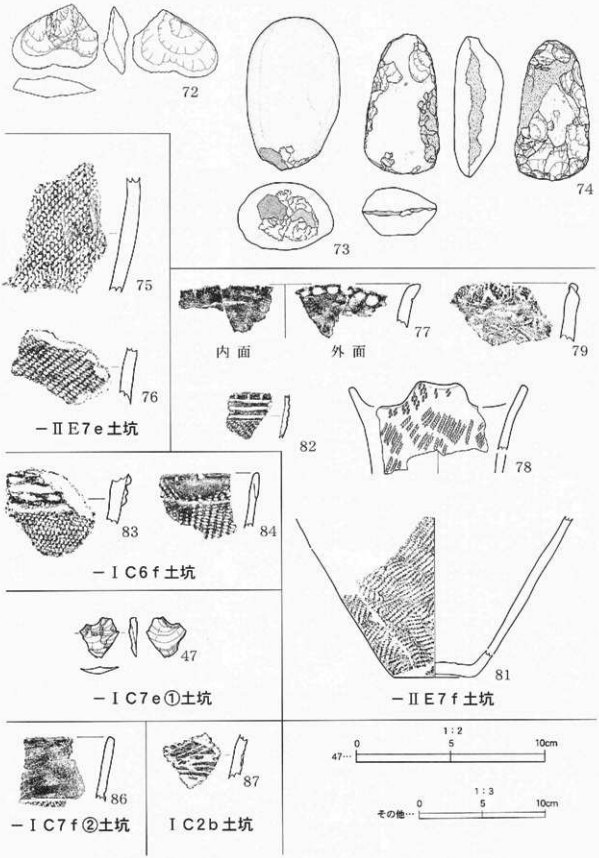
第20図　遺構内出土遺物（２）



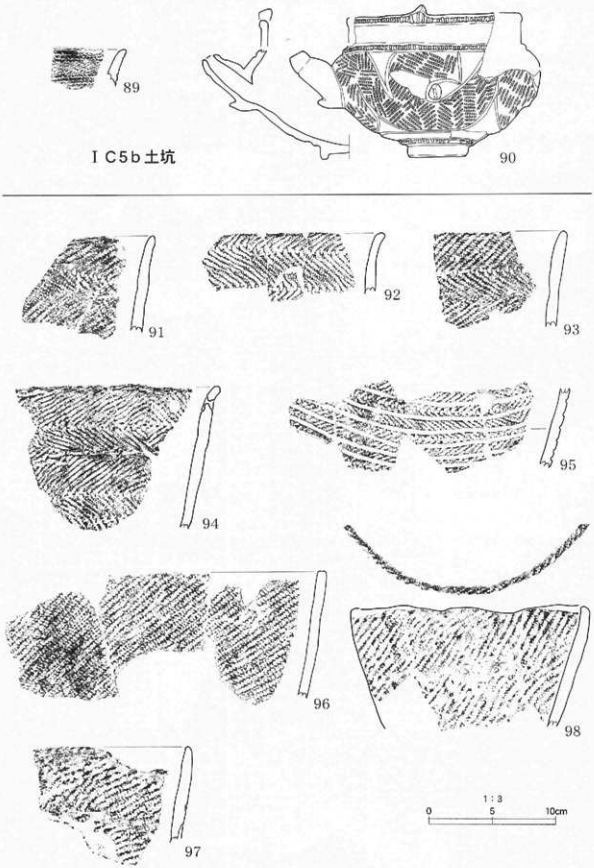
第21図　遺構内出土遺物（3）



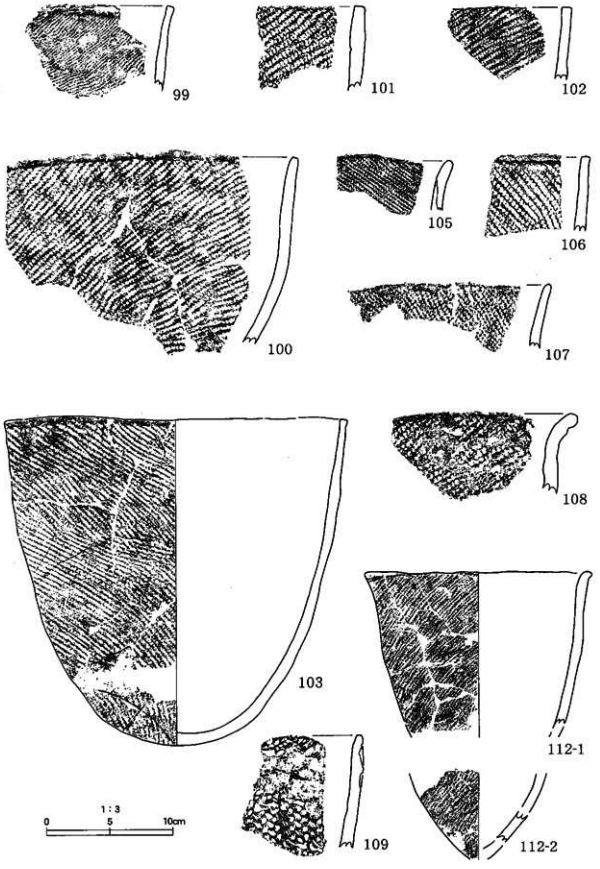
第22図　遺構内出土遺物（4）



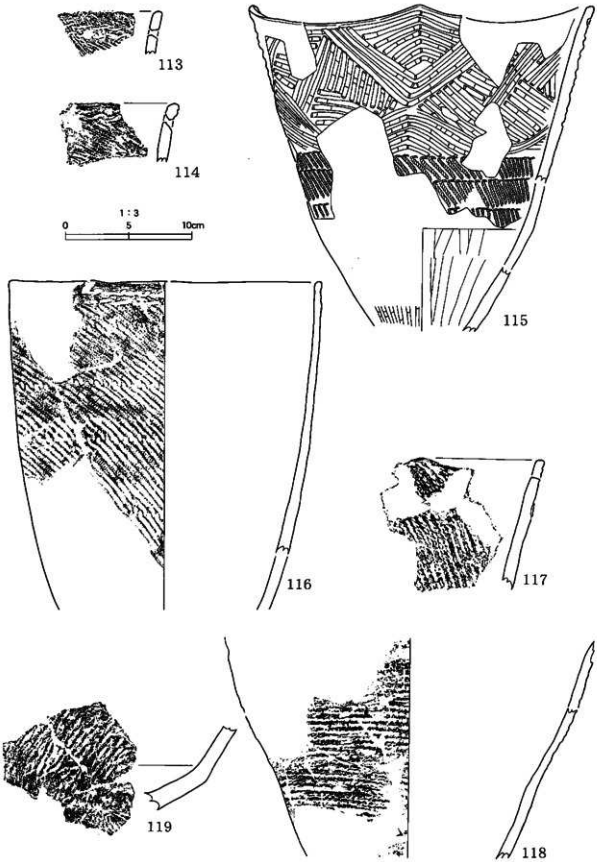
第23図　遺構内出土遺物（5）



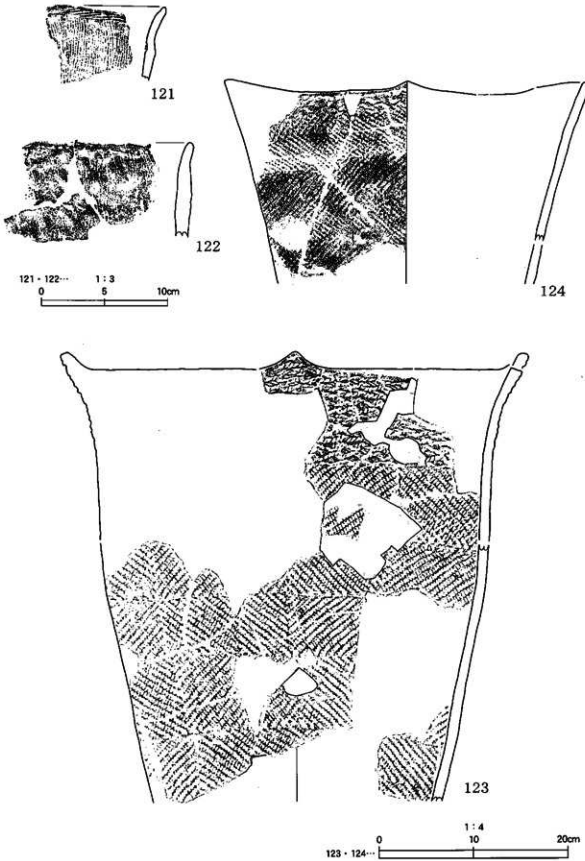
第24図　遺構内出土遺物（6）・遺構外出土遺物　土器（1）



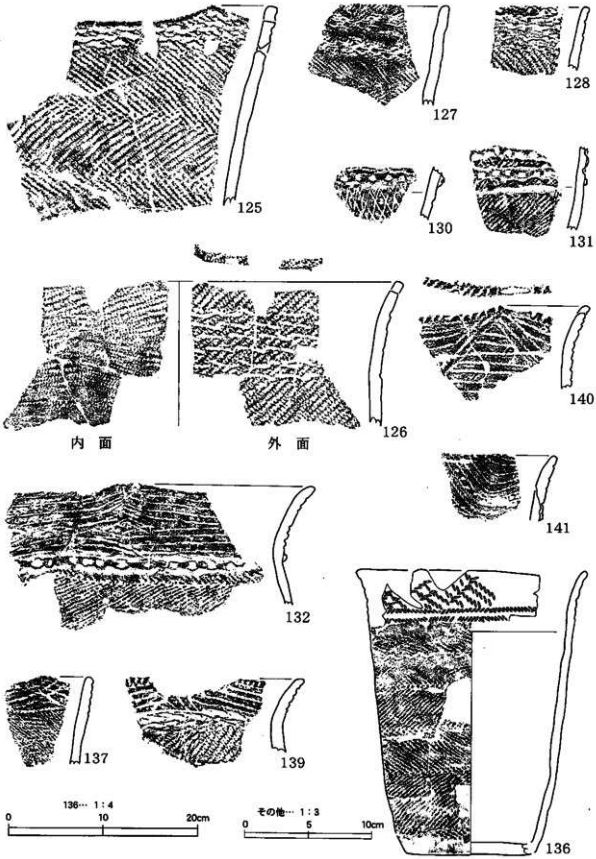
第25図　遺構外出土遺物　土器（2）



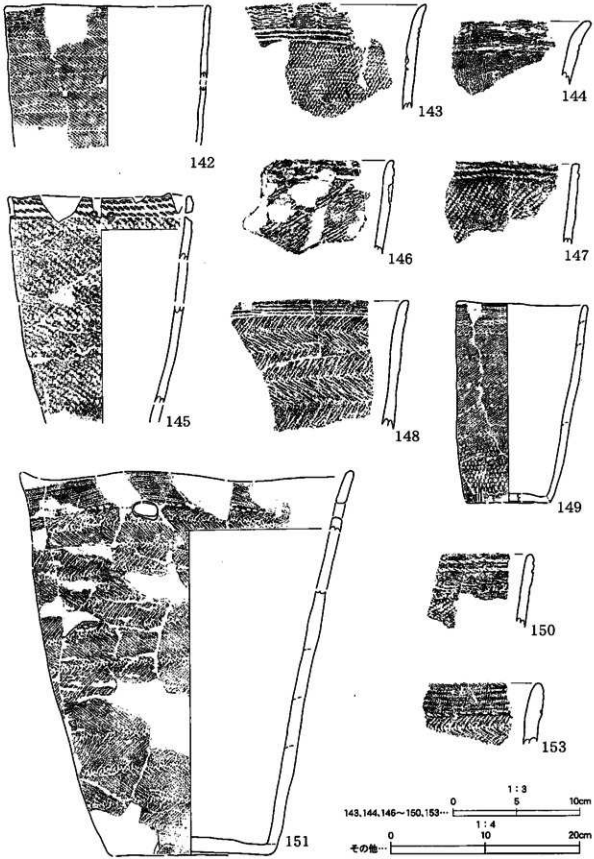
第26図　遺構外出土遺物　土器（3）



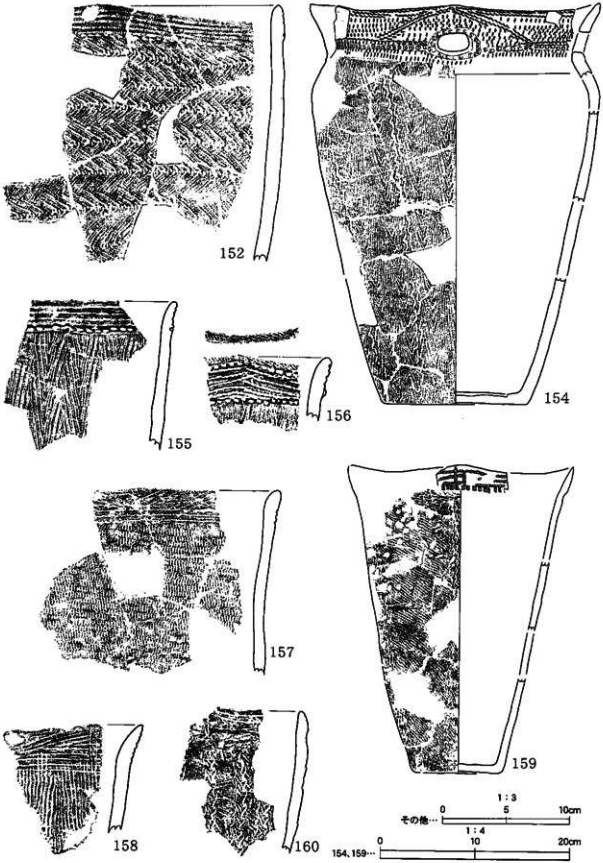
第27図　遺構外出土遺物　土器（4）



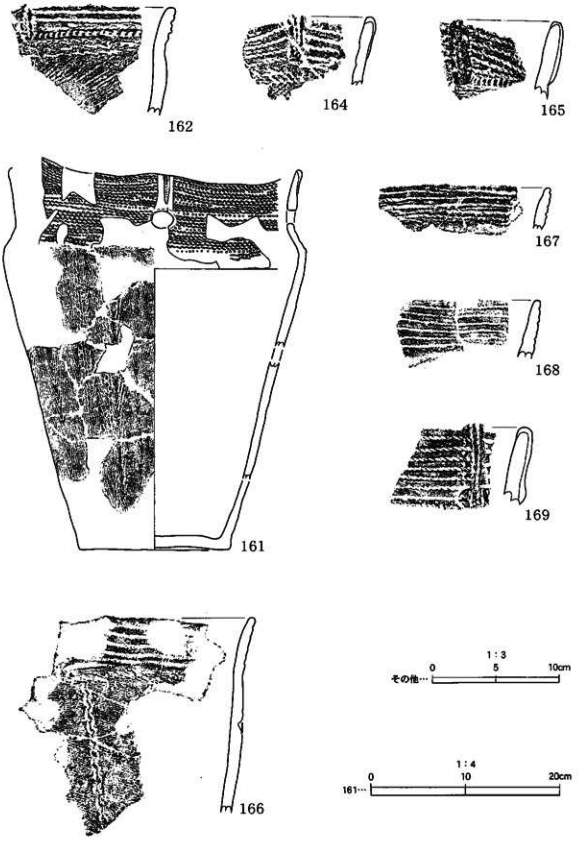
第28図　遺構外出土遺物　土器（5）



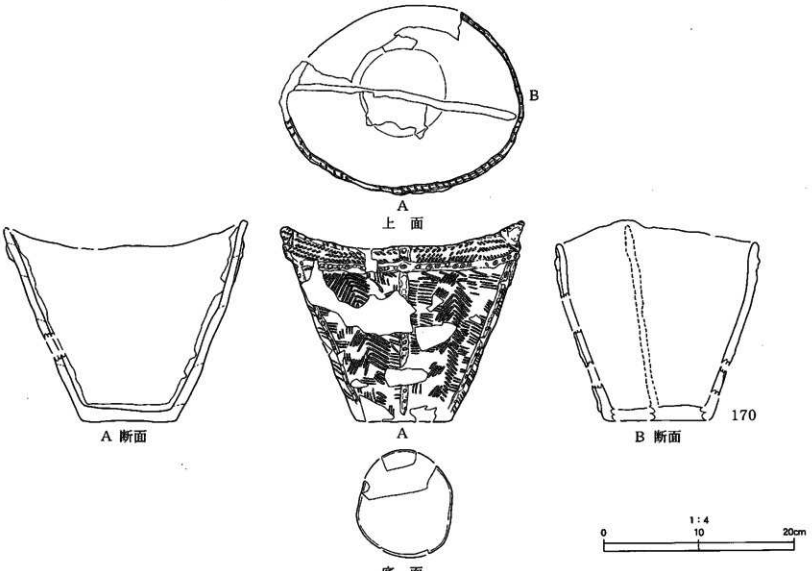
第29図　遺構外出土遺物　土器（6）



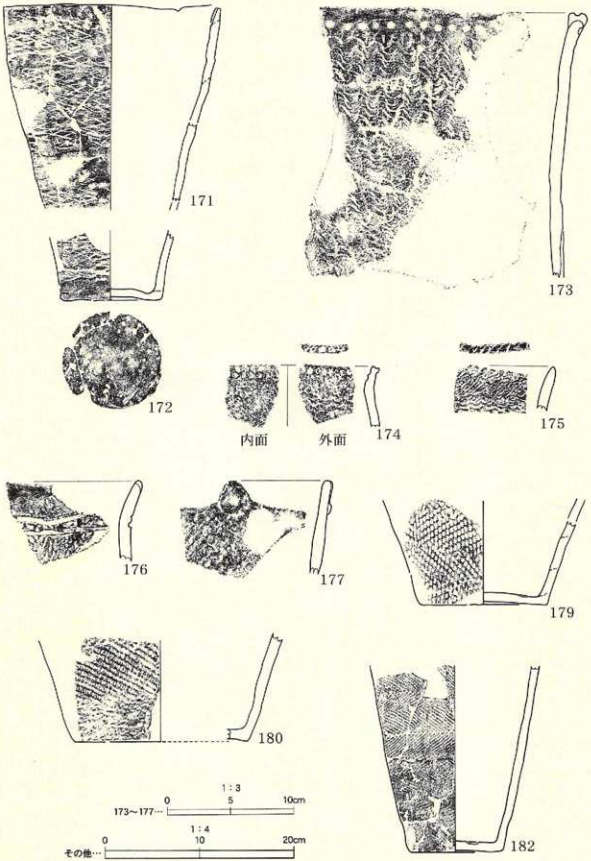
第30図　遺構外出土遺物　土器（7）



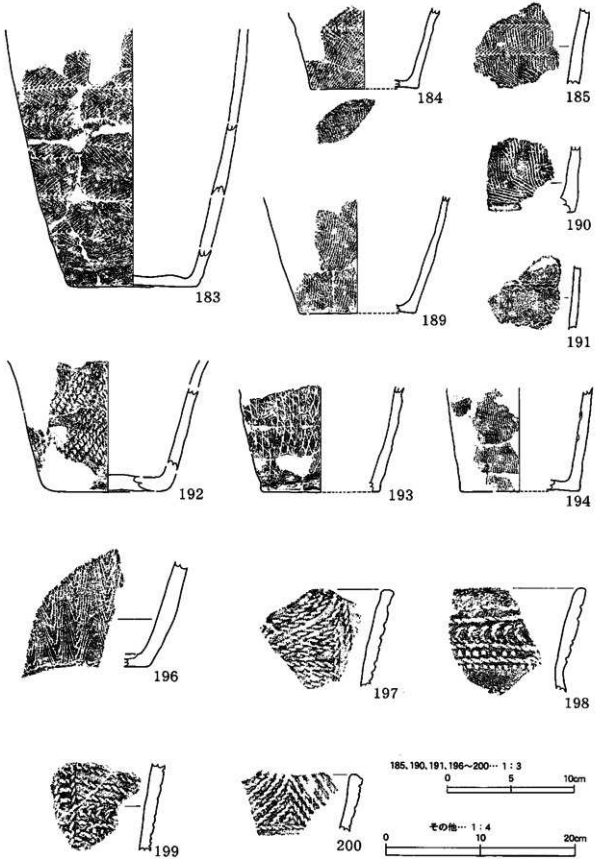
第31図　遺構外出土遺物　土器（8）



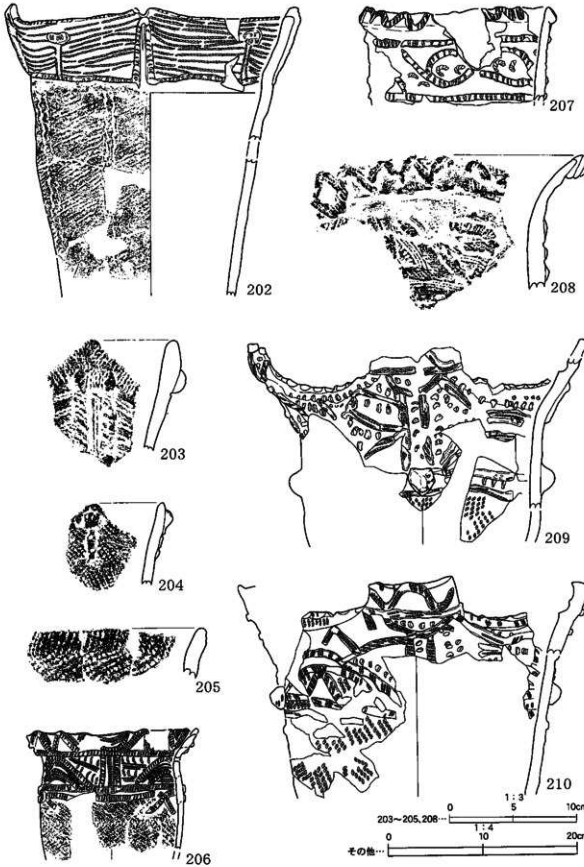
第32図　遺構外出土遺物　土器（9）



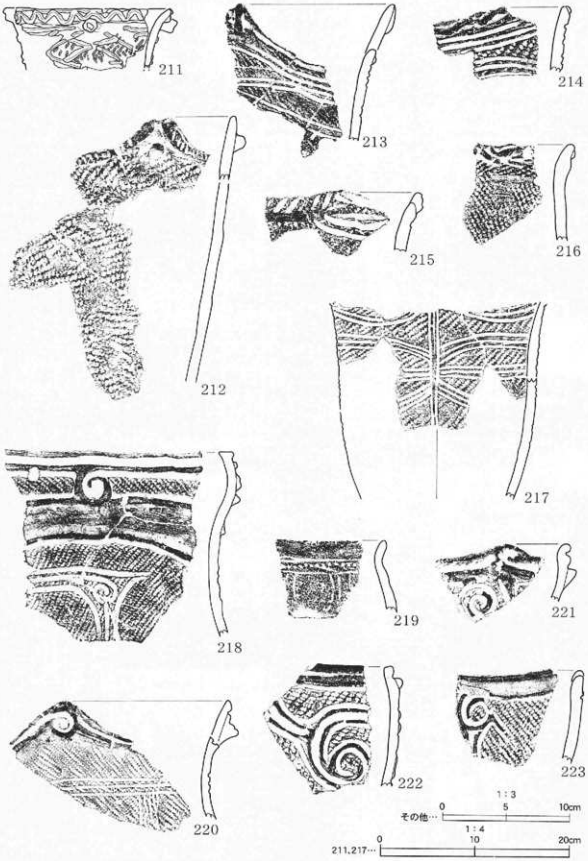
第33図　遺構外出土遺物　土器（10）



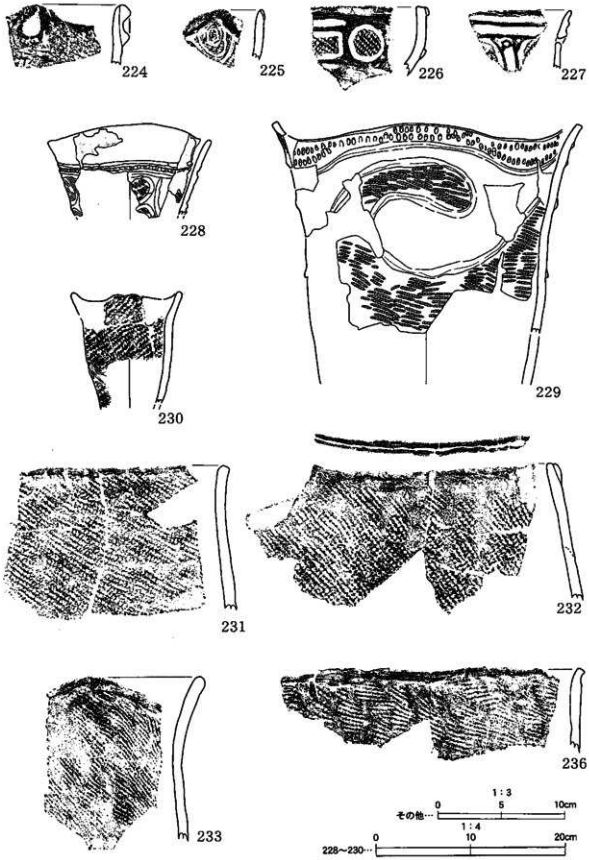
第34図　遺構外出土遺物　土器（11）



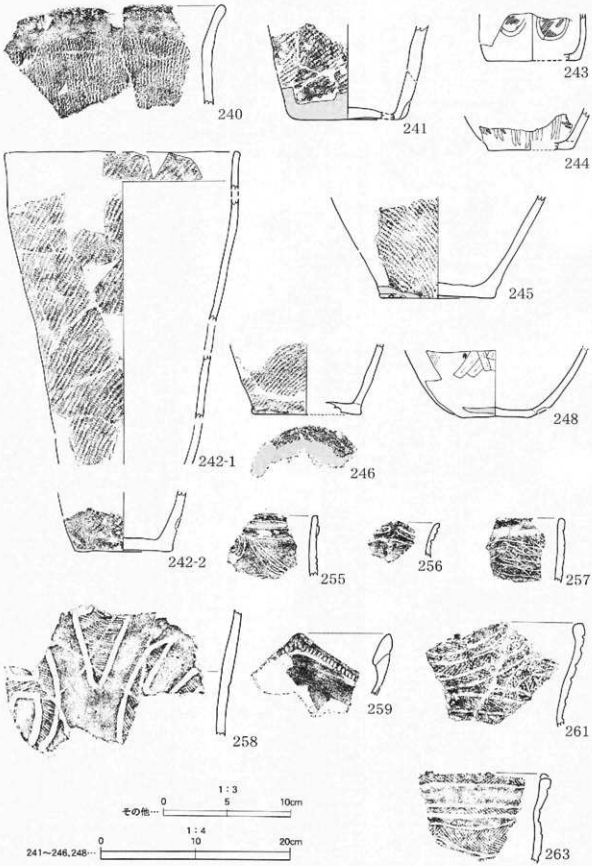
第35図　遺構外出土遺物　土器（12）



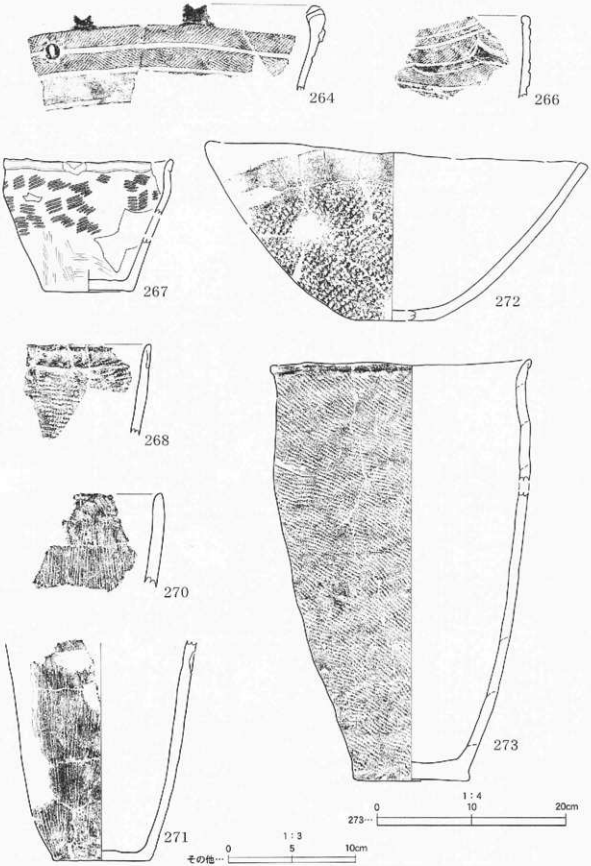
第36図　遺構外出土遺物　土器（13）



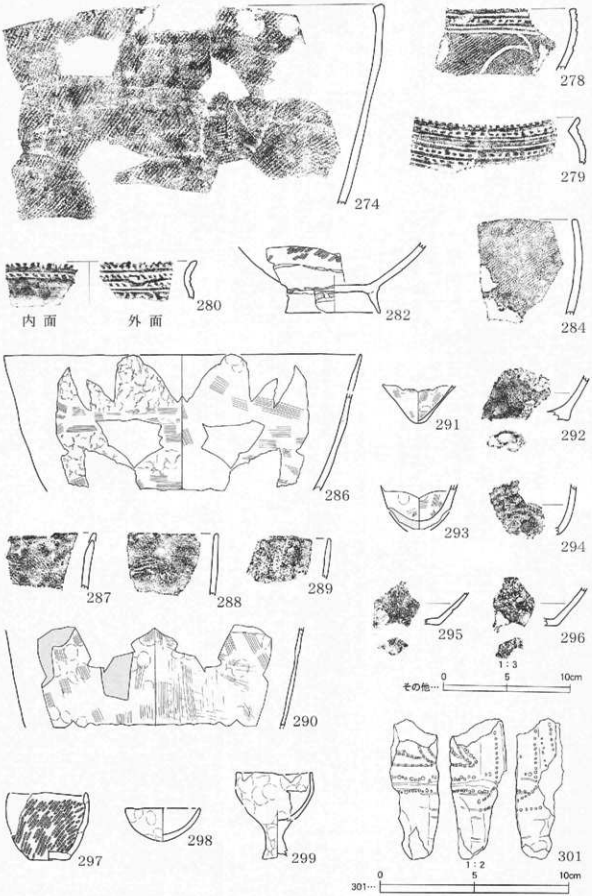
第37図　遺構外出土遺物　土器（14）



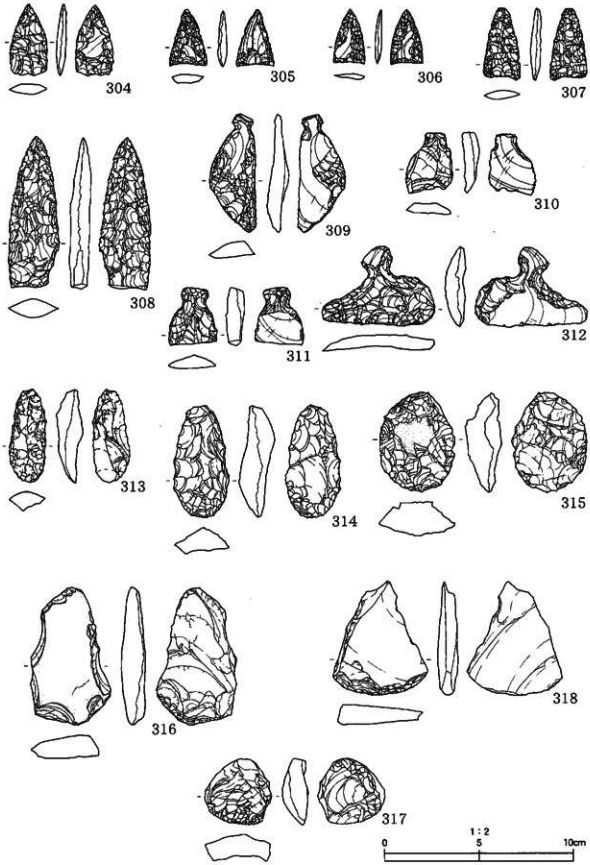
第38図　遺構外出土遺物　土器（15）



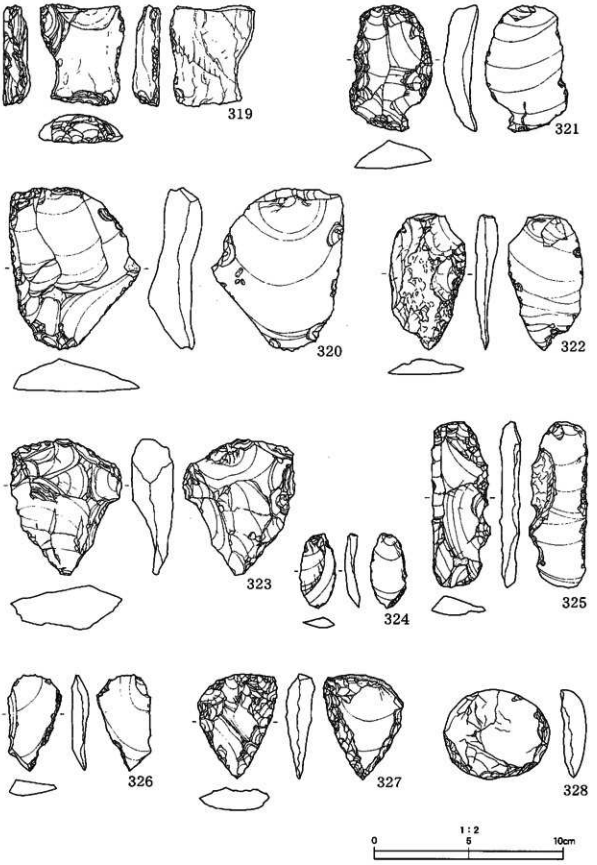
第39図　遺構外出土遺物　土器（16）



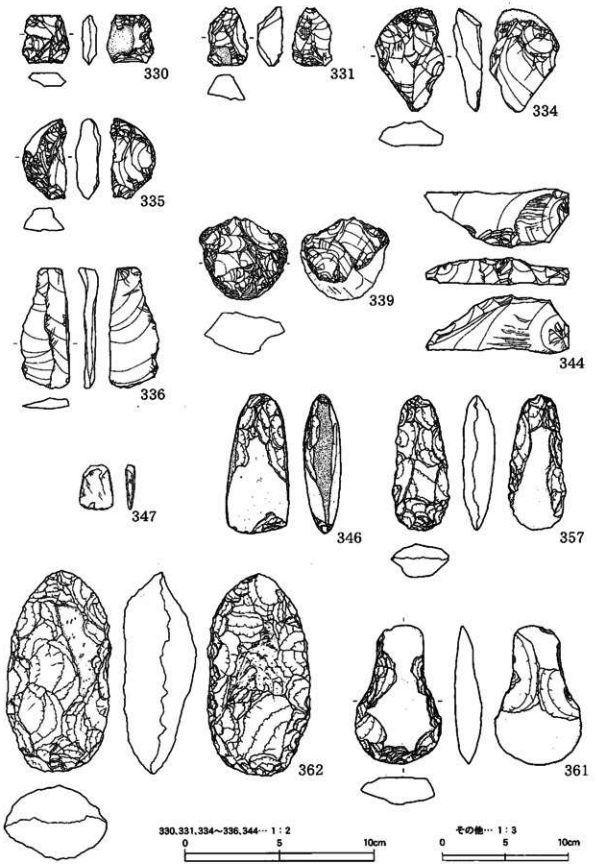
第40図　遺構外出土遺物　土器（17）・土製品



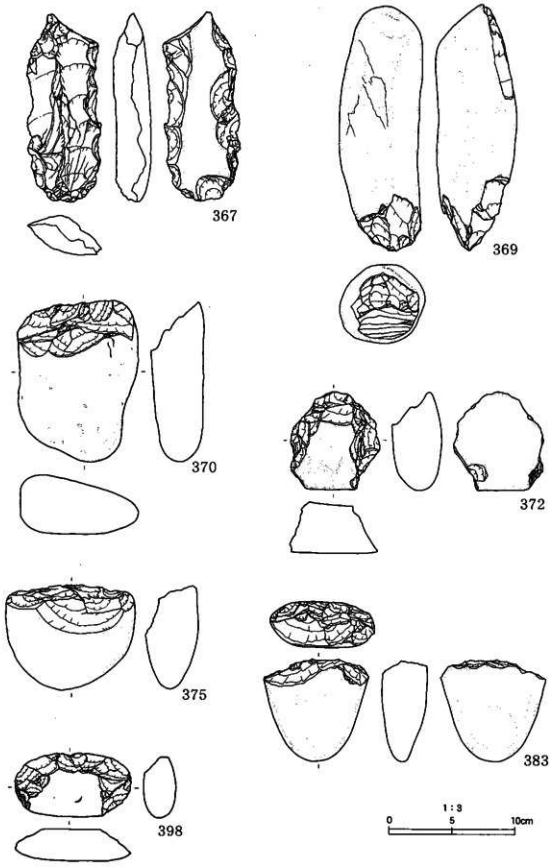
第41図　遺構外出土遺物　石器（1）



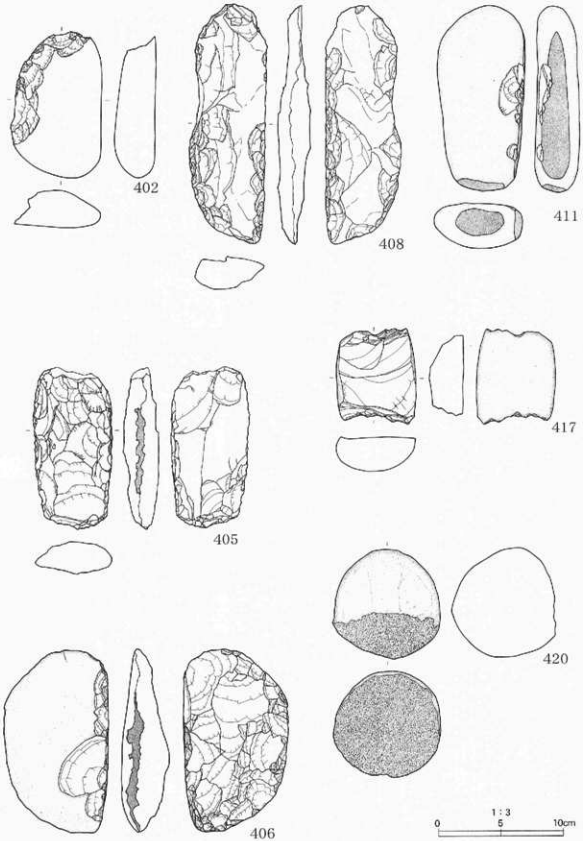
第42図　遺構外出土遺物　石器（2）



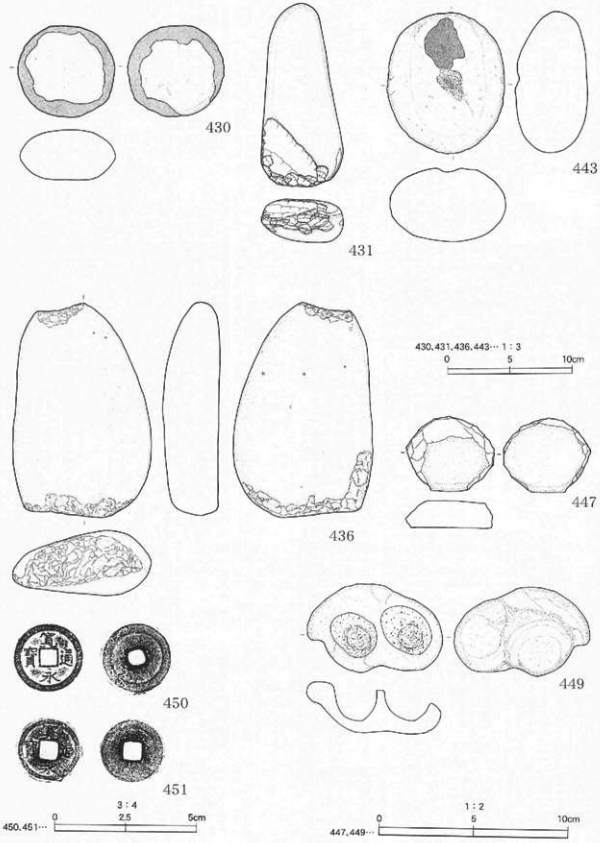
第43図　遺構外出土遺物　石器（3）



第44図　遺構外出土遺物　石器（4）



第45図　遺構外出土遺物　石器（5）



第46図　遺構外出土遺物　石器（6）・石製品・銭貨

№	図版	写図	出土地点	器種	残存部位	分類	文様の特徴	内面調整	胎土	備考
1	19	12	－IC7住 ピット1覆土	深鉢	口縁部	Ⅱ5	LR及び R原体圧痕、連続竹管刺突	ナデ	繊維多量	
2	19	12	－IC7住 覆土上位	深鉢	胴部	Ⅱ10	RL・LR羽状ヨコ	ナデ	繊維少量	
3	19	12	－IC7住 覆土下位	深鉢	胴部	Ⅱ10	RL・LR羽状ヨコ	ナデ	繊維 砂粒	
4	19	12	－IC7住 覆土上位	深鉢	口縁部	Ⅲ1	LR原体圧痕	ナデ	繊維・砂粒少量	
5	19	12	－IC7住 覆土中位	深鉢	胴部	Ⅲ	LRL ヨコ、縦位隆沈線		砂粒少量	内面に砂鉄状の付着物
6	19	12	－IC7住 ピット1覆土	鉢？	口縁部	ミニチュア？	てづくね、指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕		輪積み痕
7	19	12	－IC7住 覆土上位	台付鉢	口～胴部	Ⅴ	列点文、平行沈線、蛇行文、磨消、LRヨコ 内面：横位沈線	ミガキ	金雲母	突起（1単位）
8	19	12	－IC7住 覆土上位	鉢	口～胴部	Ⅴ	口：隆帯＋沈線＋刻目 胴：LR（主にヨコ）	ナデ	砂粒	
9	19	12	－IC7住 ピット1覆土	深鉢	口縁部	縄文	ナデ？縄部ひどく不明	ナデ		器厚薄 非常に脆い
10	19	12	－IC7住 覆土中位	深鉢	口縁部	無文	ナデ	ナデ	砂粒	器厚薄 非常に脆い
11	－	12	－IC7住 覆土中位	深鉢	胴部	無文	ナデ	ナデ	砂粒	器厚薄 非常に脆い
19	20	13	IC3c住 床面	深鉢	口縁部	Ⅲ11	LRタテ	ナデ		折返し口縁（狭い）
20	－	13	IC3c住 床面	深鉢	胴部	Ⅲ11	LRタテ	ナデ	砂粒 金雲母	
21	20	13	IC3c住 床面	鉢	口縁部	Ⅳ7	細い多方向の沈線	ナデ	砂粒	
22	20	13	IC3c住 床面	深鉢	胴部	Ⅳ6	棒状工具による縦位の条線	ナデ	砂粒	
23	20	13	IC3c住 床面	深鉢	胴部	？	LR多方向	ナデ	砂粒	
24	20	13	IC3c住 床面直上	深鉢	胴部	Ⅰ9c	R然糸文タテ	ナデ	繊維多量 粗砂粒	
25	－	13	IC3c住 床直直上	鉢	底部	Ⅲ11	無文	ナデ	砂粒少量 海綿骨針	
26	20	13	IC3c住 覆土中位	深鉢	頸部	Ⅱ3c	LR原体圧痕、連続竹管刺突	ミガキ	繊維 砂粒	
27	－	13	IC3c住 覆土上位	深鉢	胴部	Ⅱ10	本目状撚糸文タテ	ミガキ	砂粒 繊維少量	
28	20	13	IC3c住 覆土中位	深鉢	口縁部	Ⅲ11	LRタテ	ナデ	砂粒 金雲母	折返し口縁（狭い）
29	20	13	IC3c住 覆土中位	深鉢	口縁部	Ⅲ11	LRタテ	ミガキ？		
30	－	13	IC3c住 覆土上位	深鉢	底部	Ⅲ11	LRタテ？	ナデ		
31	20	13	IC3c住 覆土上位	鉢	口縁部	Ⅳ	RL（0段多条）ヨコ、磨消、区画沈線	ナデ	砂粒	
32	20	13	IC3c住 覆土中位	浅鉢	口～底部	Ⅳ3a	区画沈線、RL・LR（共に0段多条・非結束）羽状充填	ミガキ	砂粒	
33	20	13	IC3c住 覆土上位	鉢	胴部	Ⅳ3b	平行沈線・刻目帯、羽状沈線	ナデ	砂粒少量	
34	20	13	IC3c住 覆土中位	鉢？	口縁部	Ⅳ5	LRヨコ？、沈線	ナデ	粗砂粒	折返し口縁（15mm程度）
35	－	13	IC3c住 覆土撹乱上位	鉢	口縁部	Ⅳ5	口：磨消 胴：LR（0段多条）ナナメ	ナデ		
36	20	13	IC3c住覆土中位、IC2c1層	浅鉢	口～底部	Ⅳ7	LR（0段多条）ヨコ	ミガキ	砂粒	
37	20	13	IC3c住 床面直上、e覆土上位	深鉢	口縁部	Ⅳ7	RL（0段多条）ヨコ	ナデ		口唇部内側ダボ状・肥厚
57	22	14	IC5b住 炉	深鉢	底部	Ⅱ10	LRヨコ		砂粒多量 繊維	
58	22	14	IC5b住 炉	深鉢	口縁部	Ⅳ7	RL（0段多条）ヨコ	ミガキ	砂粒多量	口唇部内面やや肥厚
59	22	14	IC5b住 1層	深鉢	胴部	Ⅱ	LR異方向（ヨコ・ナナメ）羽状	ナデ	繊維多量	
60	22	14	IC5b住 ピット1覆土	深鉢	胴部	Ⅲ11	RLナナメ		砂粒少量	
61	22	14	IC5b住 ピット1覆土	深鉢	胴部	Ⅳ7	LR（0段多条）タテ	ナデ	砂粒少量	
64	22	15	IC6a住 床面	台付？	台部	Ⅳ	無文帯、RL（0段多条）ヨコ	底内面：ミガキ	砂粒多量	
65	22	15	IC6a住 覆土上位	深鉢	口縁部	Ⅱ3	2段合撚原体圧痕？	ナデ	繊維 砂粒	
66	22	15	IC6a住 覆土下位	深鉢	口～胴部	Ⅱ7	口：LR原体圧痕 胴：押引沈線 胴：LRヨコ	ナデ	砂粒多量 繊維少量	Ⅲ1に近い
67	22	15	IC6a住 覆土下位	鉢	口縁部	Ⅲ1	LR原体圧痕	ナデ	繊維	
68	22	15	IC6a住 覆土下位	深鉢	口縁部	Ⅳ3a	RL（0段多条？）ヨコ、区画沈線、磨消（充填）	ナデ		
69	22	15	IC6a住 覆土下位	鉢	口縁部	Ⅳ3b	口唇：刻目帯 胴：区画沈線、RL（0段多条）羽状多方向、磨消（充填）	ミガキ	砂粒	
70	22	15	IC6a住 覆土上位	鉢	口縁部	Ⅳ3b	口唇：沈線、刻目帯 胴：区画沈線、羽状（非結束）、磨消（充填）	ナデ		
75	23	15	－IIE7e土坑 覆土	深鉢	頸部	Ⅰ4	組紐縄文	ナデ	繊維・砂粒多量	
76	23	15	－IIE7e土坑 覆土	深鉢	胴部	Ⅲ11	RLタテ	ナデ	砂粒多量	
77	23	15	－IIE7f土坑 覆土	鉢	口縁部	？	口唇：連続円形刺突 以外は無文	ナデ	繊維 砂粒	

第4表 土器観察表（1）

No.	図版	写真	出土地点	器種	残存部位	分類	文様の特徴	内面調整	胎土	備考
78	23	15	－ⅡE7イ土坑 覆土	深鉢	口～胴部	Ⅲ3	口縁：LR狭小圧痕 胴：LRヨコ	ナデ	繊維 金雲母	
79	23	16	－ⅡE7イ土坑 覆土	深鉢	口縁部	Ⅱ5	隆帯＋LR狭小圧痕	ナデ	繊維少量	
80	－	16	－ⅡE7イ土坑 覆土	深鉢	口～胴部	Ⅲ8	口：波状隆帯 胴：LRヨコ、並行沈線	ナデ	砂粒	波状口縁
81	23	16	－ⅡE7イ土坑 覆土	深鉢	胴～底部	Ⅳ7	LR多方向	ミガキ	砂粒	
82	23	16	－ⅡE7イ土坑 覆土	鉢	口縁部	Ⅴ	口唇：刻目 胴：並行沈線、RLヨコ		砂粒	
83	23	16	－IC6イ土坑 覆土	深鉢	頸～胴部	Ⅱ2	頸：隆帯＋波状刺突 胴：多軸絡タテ	ナデ	繊維多量 雑砂粒	
84	23	16	－IC6イ土坑 覆土	深鉢	口縁部	Ⅳ5	口：無文（消失？） 胴：RLナナメ	ナデ	砂粒	折返し口縁
85	－	16	－IC7イ㉓土坑 覆土	深鉢	胴部	Ⅳ7	RL（0段多条）ヨコ		砂粒	
86	23	16	－IC7イ㉓土坑 覆土下位	鉢	口縁部	Ⅳ	口：無文 胴：LRヨコ	ナデ	砂粒	
87	23	16	IC2ｂ土坑 覆土	深鉢	口縁部	Ⅱ3	R無体圧痕	ナデ	繊維多量	
88	－	16	IC2ｂ土坑 覆土	深鉢	胴部	Ⅲ11	LRヤナメ	ナデ	砂粒多量	
89	24	16	IC5ｂ土坑 覆土	鉢	口縁部	Ⅱ9	LR無体圧痕、横絡文ヨコ	ナデ	繊維 砂粒	
90	24	16	IC5ｂ土坑覆土、ICⅠ層	注口	口～底部	Ⅳ3ｂ	口：波状；隆沈線＋刺目帯、無文帯 胴：区画沈線、RL（0段多条）多方向、磨消（光沢）、瘤1ヶ所（本来は指つ）	ミガキ	砂粒少量	
91	24	17	－ⅡE7g V層	深鉢	口縁部	Ⅰ1	LR・RL羽状ヨコ		繊維多量	
92	24	17	－ⅠD3ｂ 第単独	深鉢	口縁部	Ⅰ1	LR・RL（共に0段多条）羽状ヨコ	ナデ	繊維少量	口唇部内面ミ状
93	24	17	－ⅡE6g 撹乱層	深鉢	口縁部	Ⅰ1	LR・RL（共に0段多条）羽状ヨコ	ナデ	繊維多量	口唇部平坦
94	24	17	ICⅠ3d 撹乱層	深鉢	口～胴部	Ⅰ1	LR・RL（共に0段多条）羽状ヨコ（蛇形）	ナデ	繊維多量	口唇部一部平坦 補修孔
95	24	17	－ⅡE6h 第層	深鉢	胴部	Ⅰ2	LR・RL（0段多条？）羽状ヨコ、並行沈線	ミガキ	繊維多量	
96	24	17	－ⅡE5hⅣ層、撹乱	深鉢	口～胴部	Ⅰ3	LRヨコ	ナデ	砂粒多量 繊維	
97	24	17	－ⅡE3g Ⅳ層	深鉢	口縁部	Ⅰ3	LRヨコ	ナデ	砂粒・繊維多量	
98	24	17	－ⅡE3h Ⅳ層	深鉢	口～胴部	Ⅰ3	LR（0段多条）ヨコ	ナデ	砂粒多量 繊維	
99	25	17	－ⅡE4g Ⅳ層上位	深鉢	口縁部	Ⅰ3	LRヨコ	ナデ	繊維多量	口唇部平坦
100	25	17	－ⅡE4h Ⅳ層	深鉢	口～胴部	Ⅰ3	LRヨコ	ナデ	繊維多量 砂粒	口唇部平坦
101	25	17	－ⅡE6g Ⅳ層	深鉢	口縁部	Ⅰ3	LRヨコ		繊維多量 雑砂粒	口唇部平坦 指紋有
102	25	17	－ⅡF8a Ⅳ層	深鉢	口縁部	Ⅰ3	LR（0段多条？）ヨコ		砂粒多量 繊維	口唇部平坦
103	25	17	ICⅠ7a・＊7b 第層	深鉢	口～底部	Ⅰ3	RL（0段多条）口～胴：ヨコ、底：多方向	ナデ	繊維・砂粒多量	
104	－	17	ICⅠ6b Ⅳ層上位	深鉢	口縁部	Ⅰ3	RL（0段多条）ヨコ	ナデ	砂粒 繊維少量	口唇部平坦
105	25	17	ICⅠ6b 第層	深鉢	口縁部	Ⅰ3	RLRヨコ	ナデ	繊維多量	小波状口縁
106	25	17	ICⅠ3c Ⅰ層	深鉢	口縁部	Ⅰ3	RLRヨコ	ナデ	繊維少量	口唇部平坦
107	25	17	－ICⅠ9g 第層上位	深鉢	口縁部	Ⅰ3	RLRヨコ	ナデ	砂粒多量 繊維	
108	25	18	－ICⅠ9g 第層下位	深鉢	口縁部	Ⅰ3？	LRLヨコ	ナデ	砂粒多量 繊維	口唇部外湾
109	25	18	－ⅠD0ｂ 第層	深鉢	口縁部	Ⅰ5	口唇：組紐原体圧痕？ 口：r・l各2本の4本組紐ヨコ	ナデ	砂粒 繊維	
110	－	18	－ⅡE5ｂ Ⅳ層	深鉢	胴部	Ⅰ5	組紐回転文	ナデ	繊維 砂粒	
111	－	18	－ⅡE5g 第層	深鉢	胴部	Ⅰ5	r・l各2本の4本組紐ヨコ	ナデ	砂粒多量	
112－1	25	18	－ⅡD9a第～Ⅳ層上位、－ⅠD0ｂⅡ層	深鉢	口～胴部	Ⅰ6	LR（0段多条）＋L（付加条）ヨコ	ミガキ	繊維	
112－2	25	18	－ⅡD9a 第～Ⅳ層上位	深鉢	底部	Ⅰ6	LR（0段多条）＋L（付加条）ヨコ	ナデ	繊維	
113	26	18	ICⅠ1 Ⅰ層	深鉢	口縁部	Ⅰ6	RL（0段多条）＋R（付加条）ヨコ、L横絡文ヨコ	ナデ	繊維	補修孔
114	26	18	－ICⅠ7g 第層	深鉢	口縁部	Ⅰ6？	RL（0段多条）ヨコ、L横絡文ヨコ		繊維	補修孔 歯化跡？付着
115	26	18	－ⅡE6g・＊6hⅣ層、＊7f第層、＊7g撹乱	深鉢	口～底部	Ⅰ7	口：押引沈線 胴：RL原状縄文（0段多条） 底：押引沈線タテ	ミガキ	繊維多量 砂粒	
116	26	18	－ⅡE6f・＊7f・＊8f 第層	深鉢	口～胴部	Ⅰ8	口：L横絡文ヨコ 胴：RL・RLヨコ	ナデ	繊維多量 雑砂粒	小波状LR様
117	26	18	－ⅡE6g 第層	深鉢	口縁部	Ⅰ9a	R熟糸文タテ	ミガキ	繊維多量	口唇部平坦
118	26	18	－ⅡE6g第層、撹乱	深鉢	胴部	Ⅰ9a	R熟糸文ヨコ	ミガキ	繊維多量	
119	26	19	－ⅡE5g Ⅳ層	深鉢	胴～底部	Ⅰ9b	R？熟糸文タテ		繊維多量	
120	－	19	－ⅡE4h 第層	深鉢	胴部	Ⅰ9b	0段？熟糸文ナナメ	ナデ	砂粒	
121	27	19	ICⅠ1e Ⅰ層	深鉢	口縁部	Ⅰ9c	R熟糸文 口：ヨコ、胴：タテ	ナデ	繊維・砂粒多量	

第5表 土器観察表（2）

№	図版	写図	出土地点	器種	残存部位	分類	文様の特徴	内面調整	胎土	備考
122	27	19	－ⅡD9f～－ⅠD6fトレンチ　砂質シルト～砂礫層	深鉢	口～胴部	Ⅰ10	櫛歯状工具による？縦位の条痕	ナデ	繊維	
123	27	19	－ⅡE9a・＊9b　貯蔵	深鉢	口～胴部	Ⅱ1a	口：R縄紋文ヨコ　胴：LR・RL（0段多急？・非結束・撚糸）羽状ヨコ	ナデ	繊維多量　砂粒	口唇部平坦・疵状　焼成良
124	27	19	－ⅡE6f・＊6g・＊7f・＊8g　Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ1a	口：R縄紋ヨコ　胴：LR（0段多急）・RL（0段3条）羽状（非結束）ヨコ	ナデ	繊維多量　砂粒	口唇部平坦・疵状　焼成良
125	28	19	－ⅡE6h　貯蔵	深鉢	口～胴部	Ⅱ1a	口：縄紋文ヨコ　胴：RL・LR（共に0段多急・非結束）羽状ヨコ	ナデ	繊維多量　砂粒	口唇部平坦・疵状　補修孔　焼成良
126	28	19	－ⅠC1j　Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ1b	口唇：LR回転　口：LRヨコ、R縄紋文ヨコ　内面上部：LR（大）ナナメ　下部：LR（小）ナナメ	ナデ	繊維	表裏縄文　口唇部平坦　焼成良
127	28	19	－ⅠC8f　Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ1c	RLヨコ、縄紋文ヨコ	ナデ	繊維・砂粒多量	摩滅
128	28	19	－ⅠC7h　Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ1c	口唇：RL回転　口：L縄紋文ヨコ　胴：RLヨコ	ナデ	繊維　砂粒少量	
129	－	19	－ⅠD1f　砂礫層	深鉢	口縁部	Ⅱ1c	R縄紋文ヨコ		繊維少量	摩滅激しい
130	28	20	ⅠC2e　Ⅱ層	深鉢	頸～胴部	Ⅱ2	頸：隆帯＋連続竹管刺突　胴：細目状撚糸文タテ	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
131	28	20	－ⅠC9g　Ⅱ層下位	深鉢	頸～胴部	Ⅱ2	頸：隆帯＋LRヨコ、連続刺突（押引に近い）　胴：LRヨコ	ナデ？	砂粒多量	
132	28	20	－ⅠC8g・＊9f　Ⅱ層下位	深鉢	口～胴部	Ⅱ3a	口：R縄体圧痕　頸：隆帯＋連続刺突　胴：RL・LR羽状ヨコ	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
133	－	20	ⅠC8s　埋炉列	深鉢	頸～胴部	Ⅱ3a	口：L原体圧痕　頸：隆帯＋連続竹管刺突	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
134	－	20	ⅠB　Ⅰ層	深鉢	頸部	Ⅱ3a	口：LR原体圧痕、隆帯２条＋LR原体圧痕	ナデ	繊維多量	
135	－	20	ⅠB　Ⅰ層	深鉢	頸部	Ⅱ3a	口：R原体圧痕　頸：隆帯２条＋連続竹管刺突、隆帯間にR原体圧痕　胴：LRヨコ	ナデ	繊維多量	
136	28	20	－ⅠC9g　Ⅱ層下位、＊Ⅱ層下位	深鉢	口～底部	Ⅱ3b	底：LR　口：原体圧痕　胴～底：羽状ヨコ、R縄紋文ヨコ	ナデ	繊維多量　砂粒	
137	28	20	－ⅠC8f　Ⅱ層上位、＊Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ3b	口：LR原体圧痕　胴：？	ナデ	砂粒　繊維少量	
138	－	20	ⅠC3d　Ⅰ層	深鉢	口縁部	Ⅱ3b	口：R原体圧痕　胴：RLヨコ	ナデ	繊維　粗砂粒	
139	28	20	－ⅠC6f　Ⅰ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ3d	口唇・口：R原体圧痕　頸：縄紋文ヨコ　胴：LR（0段多急）ヨコ、L？縄紋文タテ	ナデ	繊維　粗砂粒少量	
140	28	20	－ⅠC7g・＊8g　Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ3	口唇・口：LR原体圧痕	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
141	28	20	－ⅠC4g　Ⅰ層	深鉢	口縁部	Ⅱ3	口唇：LR回転　口：LR原体圧痕、連続竹管刺突	ミガキ	繊維多量	
142	29	20	－ⅡD8c・＊8d　Ⅰ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ4	口：R撚糸文ヨコ（単軸絡６Ａ）、連続竹管刺突、LR原体圧痕　胴：LR・RL羽状ヨコ、RL・RLヨコ	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
143	29	20	－ⅠC4gⅡ層下位、＊Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ4	口：R撚糸文ヨコ（単軸絡６Ａ）、LR原体圧痕　胴：RLRヨコ	ミガキ	繊維多量　粗砂粒	
144	29	20	－ⅠC4g　Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ4	口：R撚糸文ヨコ（単軸絡６Ａ）　胴：L・R撚糸文タテ	ミガキ	繊維多量　粗砂粒	
145	29	20	－ⅠC7g　Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ5a	RL・RL　口：原体圧痕　胴：ヨコ	ナデ	繊維・砂粒多量	補修孔
146	29	20	－ⅠC9g　Ⅱ層下位	深鉢	口～胴部	Ⅱ5a	口：原体圧痕　胴：ヨコ	ナデ	繊維	
147	29	20	－ⅠC8g　Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ5a	口：LR原体圧痕　胴：LRヨコ	ナデ	砂粒	摩滅
148	29	21	－ⅠC7g　Ⅱ層上位	深鉢	口～胴部	Ⅱ5a	口：L及びR撚糸文ヨコ　胴：LR・RL羽状ヨコ	ナデ	繊維　砂粒	
149	29	21	－ⅠC6hⅡ層、＊Ⅱ層下位、＊6iⅡ層、＊7hⅡ層	深鉢	略完形	Ⅱ5b	口：LR及びR原体圧痕、L縄紋文ヨコ　胴：LRヨコ　底：多軸絡タテ	ナデ	繊維・砂粒多量	
150	29	21	－ⅠD0b　Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ5b	口：LR原体圧痕　胴：縄紋文ヨコ、LRヨコ？	ナデ	繊維　砂粒	
151	29	21	ⅠC6hⅠ層下位、－ⅠD5aⅡ層下位～Ⅲ層上位、＊4aⅡ層上位、－ⅡE7aⅡ層、－ⅠC5jⅡ層下位、＊6hⅡ層	深鉢	略完形	Ⅱ5c	口：RL・LR原体圧痕、粘押孔４ヶ所　頸：連続刺突、縄紋文ヨコ　胴～底：RL・LR（共に１段５条）羽状ヨコ	ミガキ	繊維　粗砂粒	
152	30	21	－ⅠD2a　Ⅰ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ5c	口：R単軸絡圧痕　頸：連続刺突　胴：RL・LR羽状ヨコ	ナデ	砂粒　繊維少量	小波状口縁
153	29	21	－ⅠD1a　Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ5c	口：R単軸絡圧痕　頸：隆帯＋連続刺突（押引に近い）　胴：LR・RL羽状ヨコ	ナデ	砂粒　繊維少量	焼成良
154	30	21	ⅠC6hⅡ層、＊Ⅱ層下位、＊7hⅢ層、＊8Ⅱ層下位	深鉢	口～底部	Ⅱ5c	口：LR原体圧痕、R単軸絡圧痕、粘押孔　頸：連続刺突、R単軸絡圧痕　胴：L・R未目状撚糸文タテ、R縄絡文タテ	ミガキ	繊維　砂粒	
155	30	22	－ⅠC7h　Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ5c	口：L原体圧痕（撚糸文？）　頸：隆帯＋連続刺突（押引に近い）	ミガキ	砂粒　繊維少量	焼成良
156	30	22	－ⅠC5b　Ⅱ層中～下位	深鉢	口～胴部	Ⅱ5c	口唇：RL回転（0段４条）　頸：隆帯＋連続竹管刺突（押引に近い）　胴：L・R未目状撚糸文タテ	ナデ	繊維　砂粒	小波状口縁　焼成良
157	30	22	－ⅠC4gⅡ層下位、＊Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ5d	口：RL原体圧痕　胴：L多軸絡タテ	ミガキ	繊維多量　粗砂粒	焼成良
158	30	22	ⅠC5b　埋炉（防空壕？）	深鉢	口～胴部	Ⅱ6a	口：R原体圧痕（撚糸文？）、R撚糸文タテ	ナデ	繊維　粗砂粒	

第６表　土器観察表（３）

No.	図版	写図	出土地点	器種	残存部位	分類	文様の特徴	内面調整	胎土	備考
159	30	22	－IC8e Ⅱ層上位、＊Ⅱ層中～下位、＊9eⅡ層中～下位	深鉢	略完形	Ⅱ6a	口：R原体圧痕、連続刺突　胴：R縄文ヨコ　胴：Rヨコ、R縄紋文タテ	ナデ	繊維多量　砂粒	
160	30	22	－IC7e Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ6a	口：L原体圧痕　胴：L縄紋文ヨコ　胴：r縄紋文タテ	ミガキ	繊維　粗砂粒	
161	31	22	－IC4j Ⅱ層上位、＊Ⅱ層中位、＊5jⅡ層下位～Ⅱ層上位、＊7iⅡ層下位、－ID4a Ⅰ層、IC6bⅣ層上位	深鉢	口～底部	Ⅱ6b	口：隆帯、連続刺突、LR原体圧痕　胴：R縄紋文ヨコ　胴：L・R未目状熱糸文タテ	ミガキ	繊維　砂粒	
162	31	22	IC2e Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ6b	口：縦位隆帯＋LR原体圧痕、RL原体圧痕、連続刺突（半竹状施文具、押引に近い）　胴：縄紋文ヨコ　胴：r熱糸文ナナメ	ミガキ？	繊維　砂粒	焼成良
163	－	22	－ID2a Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ7	縦位隆帯＋LR原体圧痕	ナデ	繊維　砂粒	
164	31	22	－ID1c Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ7	縦位隆帯＋LR原体圧痕	ナデ	繊維　粗砂粒	摩滅激しい
165	31	22	－IC7e Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅱ7	縦位隆帯＋LR原体圧痕、連続刺突（平状施文具）	ナデ	砂粒多量　繊維	
166	31	22	IC Ⅰ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ7	口：R未結節？圧痕　胴：L多軸縄？ヨコ、R？縄紋文タテ		砂粒多量　繊維	
167	31	23	－IC6i Ⅱ層上位	深鉢	口縁部	Ⅱ7	LR（0段多条）原体圧痕	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
168	31	23	－IC8g Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅱ7	R原体圧痕		砂粒多量	
169	31	23	－IC8g Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ7	逆T字形隆帯＋LR原体圧痕	ミガキ	砂粒	焼成良　黒化部付着
170	32	Co. 1・2	－IC8f・＊8gⅡ層、＊8gⅡ層下位	深鉢	口～底部	Ⅱ8	口縁：RL原体圧痕　口：LR・RL原体圧痕　口～底：横位・縦位隆帯＋連続竹管刺突　胴～底：LR・RL羽状タテ、縦位隆帯の左右にR熱糸文ヨコ	ミガキ	繊維　粗砂粒	口縁部楕円形、指押良輪方向に仕切痕有
171	33	23	－ID9a Ⅱ層～Ⅳ層上位、－ID0b Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ9	R胴目状熱糸文ヨコ	ナデ	砂粒多量　繊維	172と同一個体？
172	33	23	－ID0a 撹乱（助空穂？）	深鉢	底部	Ⅱ9	R胴目状熱糸文ヨコ	ナデ	砂粒多量　繊維	171と同一個体？
173	33	23	IC6b Ⅱ層、＊Ⅰ層	深鉢	口～胴部	Ⅱ9	口縁・口：連続竹管刺突　胴：r縄紋文ヨコ（S字状連続圧文）	ナデ	砂粒　繊維	摩滅激しい
174	33	23	IC8c Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅱ9	口縁：口結内圏・口：連続竹管刺突　胴：縄紋文ヨコ		砂粒多量　繊維	
175	33	23	－IC9g Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅱ9b？	口縁：LR原体圧痕　口：LR（0段多条）ヨコ、縄紋文ヨコ	ミガキ	繊維多量	
176	33	23	－ID0b Ⅰ層	深鉢	口～胴部	？	口：無文　胴：並行沈線、連続刺突　胴：LRヨコ、r熱糸文ナナメ	ナデ	海綿骨針	
177	33	23	－ID5g Ⅱ～Ⅱ層	深鉢	口縁部	？	突起部：楕円形隆帯　胴：LRヨコ？	ナデ	砂粒多量　金雲母	
178	－	23	－IC7e Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	？	LRタテ	ミガキ	砂粒多量	小波状口縁？
179	33	23	－IE9j Ⅱ層下位～Ⅱ層上位	深鉢	底部	Ⅱ10	LRL・RLR（非結束・変形）羽状ヨコ	ナデ	繊維多量　砂粒	
180	33	23	－IE9g Ⅳ層	深鉢	胴～底部	Ⅱ10	胴：RL・LR（0段4条・変形）ヨコ　底：r縄紋文ヨコ	ナデ	繊維　砂粒	
181	－	23	－IC8f Ⅱ層	深鉢	底部	Ⅱ10	RL縄文、縄紋文ヨコ	ナデ	繊維	
182	33	23	－IC4g Ⅱ層下位、＊Ⅰ層	深鉢	胴～底部	Ⅱ10	RL・LR羽状ヨコ	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
183	34	23	IC1d Ⅱ層、＊Ⅰ層	深鉢	胴～底部	Ⅱ10	LR・RL（共に1段3条）羽状ヨコ	ミガキ	繊維　粗砂粒	
184	34	24	－ID9a Ⅱ層下位～Ⅱ層上位	深鉢	胴～底部	Ⅱ10	胴：LR・RL（共に0段多条）羽状ヨコ　底・底面：LR＋L（行加条）ヨコ	ナデ		
185	34	24	IB Ⅰ層	深鉢	胴部	Ⅱ10	R熱糸文タテ、RL・LR羽状ヨコ	ミガキ	繊維多量	
186	－	24	IC3d Ⅰ層	深鉢	胴部	Ⅱ10	LR・RL羽状ヨコ、縄紋文ヨコ	ミガキ	繊維多量	焼成良
187	－	24	－IC8g・＊9gⅡ層上位、＊8gⅡ層下位	深鉢	胴部	Ⅱ10	RLRヨコ		繊維・粗砂粒多量	
188	－	24	－ID3b Ⅱ層、＊Ⅱ層	深鉢	胴部	Ⅱ10	R熱糸文タテ	ナデ	繊維多量　砂粒少量	
189	34	24	－ID3b Ⅱ層、＊Ⅱ層	深鉢	胴～底部	Ⅱ10	R熱糸文タテ・ナナメ	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
190	34	24	IC3d Ⅰ層	深鉢	底部	Ⅱ10	R熱糸文タテ・ヨコ	ナデ	繊維	
191	34	24	IC6b Ⅱ層	深鉢	胴部	Ⅱ10	R熱糸文タテ、r縄紋文ヨコ	ナデ	粗砂粒	
192	34	24	IC7aⅣ層、－IC8eⅡ層下位	深鉢	胴～底部	Ⅱ10	RL熱糸文ナナメ、R縄紋文タテ	ミガキ	繊維　砂粒	
193	34	24	－IC8g・＊9gⅡ層上位、＊8gⅡ層下位	深鉢	胴～底部	Ⅱ10	R胴目状熱糸文タテ	ナデ	繊維多量　粗砂粒	
194	34	24	－IC4gⅡ層下位、＊Ⅰ層	深鉢	胴～底部	Ⅱ10	L多軸縄タテ	ミガキ	繊維多量　粗砂粒	
195	－	24	－IC8g Ⅱ層下位	深鉢	胴部	Ⅱ10	R多軸縄タテ、LRタテ？	ミガキ	繊維多量	
196	34	24	－ID0a Ⅱ層	深鉢	底部	Ⅱ10	R未目状熱糸文タテ	ミガキ	繊維	焼成良
197	34	25	－IC8e Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ1	LR原体圧痕		砂粒多量	口唇部平坦
198	34	25	－IC8e Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ1	LR原体圧痕、連続刺突（半截、押引）		粗・砂粒多量	摩滅激しい　199と同一？
199	34	25	－IC8e Ⅱ層中～下位	深鉢	口縁部	Ⅲ1	LR原体圧痕、連続刺突（半截、押引）		粗・砂粒多量	摩滅激しい　198と同一？
200	34	25	IC4b Ⅰ層	深鉢	口縁部	Ⅲ1	LR原体圧痕	ミガキ		口唇部平坦

第7表　土器観察表（4）

№	開始	写図	出土地点	器種	残存部位	分類	文様の特徴	内面調整	胎土	備考
201	－	25	IB Ⅰ明	深鉢	口縁部	Ⅲ1	口唇・口：LR原体圧痕		砂粒多量	摩滅激しい
202	35	25	－ⅡE7gⅡ層、－IC6hⅡ層下～Ⅲ層上位、＋5hⅠ明	深鉢	口～胴部	Ⅲ2	口唇：連続刺突（半截竹管、平状工具で半円すつ）　口：隆帯（ヘアピン状縦位隆帯4・頂部付近横位隆帯）＋連続刺突（半截竹管）、横状縦結付4＋刺突（平状工具）、RL原体圧痕　胴：R横結文タテ、LR・RLヨコ	ミガキ	粗砂粒多量 繊維少量	
203	35	25	－ID0b Ⅰ明	深鉢	口縁部	Ⅲ2	口唇：LR原体圧痕　口：隆帯＋LR原体圧痕	ミガキ		
204	35	25	－ICSg Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ2	口唇：刻目　口：RLR横位、横状結付＋刺突、縦位隆帯＋連続刺突	ナデ	砂粒多量	摩滅激しい
205	35	25	－ICSgⅢ層上位、＋Ⅱ層、＋9ⅠⅡ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ3	口：RL原体圧痕　胴：RLタテ	ミガキ	砂粒少量	折返し口縁
206	35	25	－ⅡE8e Ⅲ層	深鉢	口～胴部	Ⅲ4	口：隆帯＋LR原体圧痕、＋C字状圧痕　胴：RL・LR（0段多条）羽状ヨコ	ミガキ		補修孔
207	35	25	－ICSg・＋9gⅡ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ5	隆帯＋LR原体圧痕、＋C字状圧痕	ナデ	砂粒	折返し口縁
208	35	25	－IC9fⅡ層下位、＋9gⅡ明	深鉢	口縁部	Ⅲ5	口唇・口：隆帯＋L・RR原体圧痕　口：隆帯間にL・RR原体圧痕	ナデ	砂粒	折返し口縁
209	35	26	－ICSg Ⅱ層下位	深鉢	口～胴部	Ⅲ6	口唇：指腹圧痕　口：隆帯＋L・RR原体圧痕、楕状結付＋刺突、連続C・D字状刺突　胴：LRLタテ　突起内側：指腹？沈線ヨコ	ミガキ	砂粒	210と同一の可能性有るも、原体圧痕・刺突の施文異なる
210	35	26	－IC8hⅢ層、＋8gⅡ明下位、＋8fⅡ層中位	深鉢	口～胴部	Ⅲ6	口唇：指腹圧痕　口：隆帯＋LR原体圧痕、連続C字状刺突　胴：RLRヨコ　突起内側：指腹？沈線ヨコ	ミガキ	砂粒	同上
211	36	26	－ICSgⅡ層下位、＋9gⅠ～Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ6相当	LR・RLヨコ、羽状ヨコ、隆帯、楕状結付	ナデ	砂粒多量	折返し口縁
212	36	26	－ICSg Ⅰ～Ⅱ明	深鉢	口～胴部	Ⅲ7	口唇：結付＋刻目　口：縦状結付　胴：LR多方向	ナデ		
213	36	26	－IC6i Ⅱ明下位	深鉢	口縁部	Ⅲ8	波状頭部縦位隆帯、RLヨコ、弧状沈線	ナデ		
214	36	26	－ⅡE8e Ⅳ層	深鉢	口～胴部	Ⅲ8	波状頭部　胴：R熱糸文ナナメ、弧状沈線	ナデ	砂粒	
215	36	26	－ICSg Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ8	口唇：刻目（太）　口：LRヨコ、弧状沈線	ミガキ	砂粒	波状口縁
216	36	26	IC9b Ⅰ層	深鉢	口～胴部	Ⅲ8？	口：波状隆帯　胴：LRヨコ　胴：LRタテ	ミガキ		折返し口縁
217	36	26	－ⅡE8e Ⅲ明	深鉢	胴部	Ⅲ8	LRヨコ、縦位・横位・弧状並行沈線（胴骨文）	ナデ	砂粒	焼成良
218	36	26	－IC8f Ⅱ明下位	深鉢	口～胴部	Ⅲ9	口：RLRヨコ　胴：RLRタテ、隆沈線（横位、渦巻）、渦巻沈線	ミガキ		補修孔
219	36	26	－ⅡE7gⅡ層	深鉢	口縁部	Ⅲ9	胴：並行沈線、連続竹管刺突　胴：弧状沈線		海綿骨針	摩滅激しい
220	36	26	－IC7e～IC6iトレンチ Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ9	口唇：渦巻隆沈線、横位沈線　口：LRタテ、並行沈線	ミガキ	砂粒少量	
221	36	26	－IC9g Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ9	口唇：渦巻隆沈線、横位沈線　口：LRタテ、渦巻隆沈線	ミガキ	砂粒少量	
222	36	27	－IC9g Ⅱ明下位	深鉢	口縁部	Ⅲ9	口唇：前面狭幅、隆帯　胴：RLRタテ、渦巻隆沈線	ミガキ		
223	36	27	－ID0b Ⅰ層	深鉢	口縁部	Ⅲ9	LRタテ、隆沈線（横位・渦巻）	ミガキ		
224	37	27	－IC9g Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ9	口唇：横位沈線　口：円形刺突（突き起し状）、RLRヨコ	ミガキ	砂粒少量	
225	37	27	－IC9g Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ9	RLタテ、渦巻沈線	ナデ	砂粒	折返し口縁
226	37	27	－IC8h Ⅰ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ9	隆沈線（円形・方形区画）、RL？充填	ミガキ	砂粒	
227	37	27	－ⅡD9c Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ9	横位・縦位隆沈線、LR？充填	ミガキ		補修孔
228	37	27	－IC8e・＋9e Ⅱ明	深鉢	口～胴部	Ⅲ9	口：無文　胴：並行沈線、連続刺突　胴：隆沈線、LRタテ	ミガキ	砂粒少量	波状口縁（2単位）
229	37	27	－IC6i Ⅱ層	深鉢	口～胴部	Ⅲ10	口：連続半円状刺突　胴：隆帯区画、RLタテ充填	ナデ？	砂粒多量	側落激しい
230	37	27	IC Ⅰ層	深鉢	口～胴部	Ⅲ11	LRヨコ	ナデ	繊維　砂粒少量	
231	37	27	－IC5hⅡ層中位～下位、＋5iⅠ層	深鉢	口～胴部	Ⅲ11	LRタテ	ナデ	砂粒	
232	37	27	－IC8eⅢ層、＋Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ11	口唇：横位沈線　胴：LRタテ、その後ナデ？	ナデ	砂粒　金雲母	小波状口縁
233	37	27	－IC8h Ⅱ明	深鉢	口縁部	Ⅲ11	LR（0段多条）タテ、ナデ	ミガキ	海綿骨針	焼成良
234	－	27	－IC6h Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ11	RLタテ	ナデ	粗砂粒　繊維少量	
235	－	27	－IC8f Ⅱ層上位	深鉢	口～胴部	Ⅲ11	LRナナメ（L熱糸文ヨコ？）	ナデ	砂粒　雲母	
236	37	28	－IC7g Ⅱ明下位～Ⅲ層	深鉢	口縁部	Ⅲ11	LR多方向	ナデ	砂粒	口縁若干外傾　摩滅激しい
237	－	28	－IC6hⅡ層、＋7hⅡ層下位	深鉢	口縁部	Ⅲ11	RLタテ（L熱糸文ナナメ？）	ナデ	砂粒　雲母	
238	－	28	－ⅡE5hⅡ層上位、＋・＋6gⅡ明	深鉢	口～胴部	Ⅲ11	RLタテ（L熱糸文ナナメ？）	ナデ	砂粒	口縁若干外傾
239	－	28	－ⅡE6g Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ11	RLタテ（L熱糸文ナナメ？）	ナデ	砂粒	
240	38	28	－ⅡE5h Ⅱ層	深鉢	口縁部	Ⅲ11	RLタテ（L熱糸文ナナメ？）	ミガキ	砂粒　海綿骨針	
241	38	28	－IC6hⅡ層下～Ⅲ層上位、＋5hⅠ層	深鉢	胴～底部	Ⅲ11	LRヨコ	ナデ	粗砂粒　繊維	側落激しい
242－1	38	28	－IC6i・＋6i Ⅱ層	深鉢	胴部	Ⅲ11	RLタテ	ナデ	砂粒	
242－2	38	28	－IC6i Ⅱ層	深鉢	底部	Ⅲ11	RLタテ		砂粒多量	

第８表　土器観察表（５）

No	図版	写真	出土地点	器種	残存部位	分類	文様の特徴	内面調整	胎土	備考
243	38	28	－IC8f Ⅲ期上位	深鉢	底部	Ⅲ11	区画沈線、RLタテ	ナデ	雲母骨針多量	
244	38	28	－IC9g・IC0g Ⅱ期	深鉢	底部	Ⅲ11	LRタテ、2条1対の縦位隆沈線	ナデ		焼成良
245	38	28	IC2e Ⅱ期	深鉢	胴～底部	Ⅲ11	LRタテ	ナデ	砂粒少量	
246	38	28	－IC6h Ⅱ期	深鉢	胴～底部	Ⅲ11	RLタテ	ナデ	砂粒多量	底部に木葉痕
247	－	28	－IC8i Ⅲ期上位、＊Ⅱ期	深鉢	底部	Ⅲ11	LRタテ		砂粒多量	摩滅激しい
248	38	28	－IC9g Ⅲ期上位、＊Ⅱ期下位、＊1層	深鉢	胴～底部	Ⅲ11？	無文	ナデ	砂粒	
249	－	29	－IE6i Ⅱ期	深鉢	底部	Ⅲ11	底：LRヨコ？ 底面：網代？痕		砂粒	内面煤付着
250	－	29	－IE6h Ⅱ期	深鉢	底部	Ⅲ11	底面：網代痕？		砂粒多量	
251	－	29	旧河道跡Ⓒ 砂礫層	深鉢	底部	Ⅲ11	底：ナデ 底面：木葉痕	ナデ	砂粒多量	
252	－	29	－ID0f 上部砂礫層	深鉢	底部	Ⅲ11	底：ナデ 底面：木葉痕	ナデ	砂粒	
253	－	29	－IE6 Ⅰ期	深鉢	底部	Ⅲ11	底：RLタテ 底面：木葉痕	ナデ	砂粒少量	
254	－	29	－IE9d・＊9f 上部砂礫層	深鉢	底部	Ⅲ11	底：ナデ 底面：木材？痕	ナデ	砂粒多量	
255	38	29	－ID9f～－ID0f 旧河道跡シルト質砂層～砂礫層	鉢	口縁部	Ⅳ1	隆帯、弧状・平行沈線	ミガキ	砂粒	
256	38	29	－ID9f～－ID0f 旧河道跡シルト質砂層～砂礫層	鉢？	口縁部	Ⅳ1	沈線文、口縁部肥厚	ミガキ	砂粒	
257	38	29	－ID1f Ⅱ期	鉢	口縁部	Ⅳ1	R原体圧痕	ナデ	砂粒少量	折返し口縁
258	38	29	－IC5i・＊6i Ⅱ期	深鉢	胴部	Ⅳ2	沈線区画、LR多方向、磨消（充填）	ミガキ	砂粒多量	
259	38	29	出土地点不明	深鉢	口縁部	Ⅳ3b	口唇：刻目帯、沈線 口：ミガキ	ミガキ	砂粒	口唇部内面肥厚
260	－	29	IC Ⅰ期	鉢？	胴部	Ⅳ3b	隆沈線＋刻目帯、LR・RL（共に0段多条・非結束）羽状多方向、磨消（充填）	ミガキ	砂粒	
261	38	29	－IC8e Ⅱ期中位	鉢	口縁部	Ⅳ4a	LR多方向、沈線区画、瘤状突起	ミガキ	砂粒多量	
262	－	29	ICIe Ⅰ期	鉢	口縁部	Ⅳ4a	RL（0段多条）異方向羽状、沈線、瘤状突起	ミガキ	砂粒	
263	38	29	－ID Ⅱ期河道跡内砂礫層	深鉢	口～胴部	Ⅳ4b	口唇付近・頂：RL（0段多条）異方向羽状、沈線区画 口：無文 胴：沈線区画、同原体多方向、磨消（充填）	ミガキ		
264	39	29	－IC6i Ⅰ期	深鉢	口縁部	Ⅳ4b	LR・RL（共に0段多条・非結束）羽状多方向、瘤状突起、巻行沈線、無文帯	ミガキ	砂粒少量	口唇部内面肥厚
265	－	29	ICIf Ⅱ期下位～Ⅲ期上位	深鉢？	胴部	Ⅳ4b	LRヨコ、沈線、瘤状突起	ミガキ		
266	39	29	ICOg 焼成層	鉢	口縁部	Ⅳ4？	LR多方向、沈線区画、磨消（充填） 内面：沈線	ナデ	砂粒少量	
267	39	29	ICIe Ⅱ期	鉢	略完形	Ⅳ5	LR（0段多条）ナナメ	ミガキ？	砂粒	折返し口縁
268	39	29	－IC9g Ⅱ期下位	深鉢	口～胴部	Ⅳ5	LRナナメ	ナデ	砂粒	折返し口縁
269	－	29	－ID4a Ⅰ期	深鉢	口縁部	Ⅳ5	LR 口：ヨコ、胴：ナナメ	ナデ	粗砂粒	折返し口縁
270	39	30	－IC9g Ⅱ期下位	深鉢	口縁部	Ⅳ6	櫛描状工具による縦位の条線	ミガキ？	砂粒	
271	39	30	［C8g Ⅱ期中位、＊・＊9g Ⅱ期下位	深鉢	胴～底部	Ⅳ6	櫛描状工具による縦位の条線	ケズリ？	砂粒	
272	39	30	－ID9f～－ID0f 旧河道跡シルト質砂層～砂礫層	浅鉢	略完形	Ⅳ7	口：無文 胴～底：LRヨコ	ナデ？	砂粒	
273	39	30	－IE5h Ⅱ期下～Ⅲ期上位	深鉢	略完形	Ⅳ7	LRタテ	LR＊（横）	砂粒、繊維少量	輪積み痕顕著
274	40	30	－ID5a Ⅱ期最上位、＊Ⅰ層	深鉢	口～胴部	Ⅳ7	LRヨコ	ミガキ	砂粒少量	口唇部内面肥厚
275	－	30	ICIe Ⅰ期	深鉢	口縁部	Ⅳ7	RL（0段多条）ヨコ	ミガキ	砂粒 金雲母	口唇部内面肥厚
276	－	30	－IE5h Ⅳ期	深鉢	口縁部	Ⅳ7	口縁上部無文、RL（0段多条）タテ	ナデ	砂粒 金雲母	口唇部平坦
277	－	30	IB Ⅰ期	深鉢	口縁部	Ⅳ7	RL・LR（共に0段多条・非結束）羽状ヨコ、無文後ナデ？	ナデ？	砂粒 金雲母	口唇部内面肥厚
278	40	30	－IC5i Ⅱ期	鉢	口縁部	Ⅴ	LRヨコ、並行沈線、列点、沈線区画、磨消	ナデ	砂粒	
279	40	30	－IC9h Ⅱ期	鉢	口縁部	Ⅴ	口唇：刻目 口：並行沈線、列点	ナデ	砂粒	
280	40	30	－IC8g Ⅱ期中位	鉢	口縁部	Ⅴ	口唇：刻目、突起 口：並行沈線、羊歯縄文 内面：羊歯縄文	ミガキ	砂粒少量	
281	－	30	－IC5h Ⅰ期	鉢	口縁部	Ⅴ	羊歯縄文、玉抜三叉文	ナデ	砂粒少量	
282	40	30	－IC9g Ⅱ期、＊Ⅱ期下位	台付鉢	胴～台部	Ⅴ	胴：沈線区画、RLタテ？、磨消 台：側隆帯＋連結楕円形刺突	ミガキ？	砂粒 金雲母	
283	－	30	－ID Ⅰ期	台付鉢	底～台部	Ⅴ	底：ミガキ 台：刻目	ミガキ	細砂 金雲母微量	
284	40	31	－IC9g Ⅱ期	深鉢	口～胴部	Ⅴ	LRヨコ	ナデ	砂粒 金雲母	摩滅
285	－	31	IC Ⅰ期	浅鉢？	底部	Ⅴ	ミガキ	ミガキ	細砂 金雲母微量	

第9表 土器観察表（6）

№	図版	写図	出土地点	器種	残存部位	分類	文様の特徴	内面調整	胎土	備考
286	40	Co.2	－IC6g Ⅲ層、＊7f・＊7g・＊8f Ⅱ層中位	深鉢	口～頸部	装塩	輪積み部分のみナデ	ナデ	砂粒少量	外面シワ状形、器厚薄
287	40	31	IC3d Ⅰ層	深鉢	口縁部	製塩	RL原体圧痕観察されるが、意図的な施文かは不明　同原体使用しナデていた可能性有	ナデ	砂粒、繊維少量	器厚薄
288	40	31	－IC8g Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	製塩	ナデ	ナデ	砂粒少量　金雲母	器厚薄
289	40	31	－IC8g Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	製塩	刺突ひどく不明	ナデ	砂粒少量	器厚薄
290	40	Co.3	－IC8g・＊9f Ⅱ層下位	深鉢	胴部	製塩	ナデ	ナデ		器厚薄　非常に脆い
291	40	31	－IC8g Ⅱ層下位	深鉢	底部	製塩	刺突ひどく不明	ケズリ？	砂粒少量	器厚薄　尖底　非常に脆い
292	40	31	－IC6e Ⅳ層	深鉢	底部	製塩	ナデ？	ナデ	砂粒少量	器厚薄　小径の平底
293	40	31	－IC6i Ⅱ層	深鉢	底部	製塩	一部分にLR	ケズリ？	砂粒少量	器厚薄　丸み帯びる尖底　非常に脆い
294	40	31	－IC7c～IC0iトレンチ Ⅱ層	深鉢	底部	製塩	ナデ？	ケズリ？ナデ	砂粒少量	器厚薄　丸み帯びる尖底　非常に脆い
295	40	31	－IC9e Ⅱ層	深鉢	底部	製塩	ナデ？	ナデ	砂粒少量	器厚薄　小径の平底
296	40	31	IC5b 攪乱（防空壕？）	深鉢	底部	製塩	ナデ	ナデ		器厚薄　小径の平底
297	40	31	－ID5a Ⅱ層上位	ミニチュア	口～底部	ミニチュア	口：無文　胴～底：RLタテ	ナデ	砂粒少量	
298	40	31	－IC9g Ⅱ層	ミニチュア	口～底部	ミニチュア	ナデ	ナデ		299と同胎土（白色）
299	40	31	－IC7e Ⅱ層上位	ミニチュア	口～底部	ミニチュア	てづくね	ナデ		ワイングラス形
300	－	31	IC Ⅰ層	鉢？	底部	ミニチュア？	ナデ	ナデ		白色胎土

土製品観察表

№	図版	写図	出土地点	器種	残存部位	分類	特徴	内面	胎土	備考
38	－	13	IC3cd住 覆土上位	泥面子	右半部欠	－	全体的に摩滅している	－		
301	40	31	－ID5a Ⅰ層	土偶	右脚部？	－	刺突	－		
302	－	31	－IC8f Ⅰ層	環状土製品？	？	－	小破片のため不明	－		
303	－	31	－IC5j Ⅱ層下位？	泥面子	完形	－	大きさ3cm程度	－		

第10表　土器観察表（7）・土製品観察表

No.	間区	写図	出土地点	器種	細別	石質	残存状態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材産地	備考
12	19	12	−IC7住 ピット1覆土	磨器	−	石英安山岩	完形	10.85	10.5	4.4	766.27	北上山地	
13	−	12	−IC7住 ピット1	敲石	Ⅳ	砂岩	完形	10.6	5.78	3.7	332.47	北上山地	
14	19	12	−IC7住 床上5cm	剥片	−	赤色頁岩	完形	6.61	2.41	1.29	16.68	北上山地？	左側縁上部に軽状の剥離有
15	19	12	−IC7住 覆土上位	棒状調整剥片	−	頁岩	末端欠	2.9	1.2	0.2	0.91	北上山地？	
16	19	12	−IC7住 覆土下位	磨器	−	砂岩	完形	8.6	6.6	2.7	238.68	北上山地？	被り面平滑化
17	19	12	−IC7住 覆土上位	磨り石	Ⅲ	石英安山岩	完形	3.6	3.0	2.8	45.23	北上山地	被り面平滑化
18	−	12	−IC7住 覆土上位	敲石	Ⅳ	花崗斑岩	両端一部欠	10.71	7.8	4.07	506.94	北上山地	敲打により周縁部欠損 側縁一部に擦痕有
39	21	13	IC3c住 床面	剥片	−	砂岩	完形	4.6	3.25	7	11.07	北上山地	石核石器の調整剥片
40	−	13	IC3c住 床面	剥片	−	細粒閃緑岩	完形	3	2	0.8	3.45	北上山地	石核石器の調整剥片
41	21	13	IC3c住 床面直上	石鏃	Ⅰ	珪質頁岩	完形	2.15	1.2	0.5	1.05	北上山地？	
42	21	13	IC3c住 ピット2覆土	石鏃	−	頁岩	完形	3.1	1.6	2	1.05	北上山地？	表・裏面ともに節理面残る
43	21	13	IC3c住 床上10cm	ピエス・エスキーユ	−	頁岩	完形	3.4	2.8	0.8	5.93	北上山地？	
44	21	13	IC3c住 床上10cm	棒状調整剥片	−	頁岩	完形	4.2	2.3	1.1	7.28	北上山地？	
45	21	13	IC3c住 床上5cm	剥片	−	細粒閃緑岩	完形	6.2	4.95	2	55.19	北上山地	石核石器の調整剥片 45と接合
46	21	13	IC3c住 床面直上	剥片	−	細粒閃緑岩	完形	6.4	5.9	1.9	58.99	北上山地	石核石器の調整剥片 45と接合
48	21	14	IC3c住 ピット2覆土	石斧	Ⅰb	砂岩	刃部一部欠	13.6	5.0	3.2	323.05	北上山地	刃部、使用による欠損
49	21	14	IC3c住 床上5～10cm	石斧	Ⅱa	砂岩	完形	11.5	6.9	3.5	401.05	北上山地	片面の大部分に樹面残す
50	21	14	IC3c住 ピット2覆土	石斧	Ⅲb	細粒閃緑岩	完形	12.7	5.1	3.1	289.17	北上山地	片面半分に樹面残す
51	−	14	IC3c住 床上10cm	石斧	Ⅰa	細粒閃緑岩	基部一部欠	8.97	3.97	2.53	128.50	北上山地	
52	−	14	IC3c住 覆土上位	石斧	Ⅱa	ヒン岩	上半部欠	(5.81)	7.38	2.99	146.53	北上山地	片面は樹面残す（未調整）
53	21	14	IC3c住 床面直上	敲石	Ⅲ	砂岩	完形	7.2	7.1	3.8	347.91	北上山地	側縁の3／4に敲痕痕
54	−	14	IC3c住 床面直上	敲石	Ⅱ	砂岩	完形	7.64	6.89	5.2	433.43	北上山地	周縁部に敲痕痕
55	−	14	IC3c住 1層	敲石	Ⅱ	砂岩	完形	7.55	7.91	4.63	448.59	北上山地	側縁の1／2に敲痕痕
56	−	14	IC3c住 床面直上	敲石	Ⅳ	砂岩	完形	12.98	9.12	6.02	1021.73	北上山地	全面に浅い敲打痕
62	22	14	IC5b住 床面	剥器	−	頁岩	完形	2.9	2.15	0.7	4.41	北上山地？	
63	22	14	IC5b住 床面	敲石	Ⅱ	砂岩	完形	5.4	4.4	1.7	57.90	北上山地	敲打面は表・裏面に点対応に存在
71	22	15	IC6a住 床面敲撃	石匙	Ⅱ	頁岩	完形	3.5	4.8	0.9	11.56	北上山地？	縁部
72	23	15	IC6a住 炉1層	剥片	−	ヒン岩	完形	5.3	5.8	1.9	59.10	北上山地	石核石器の調整剥片
73	23	15	IC6a住 ピット14底面	敲石	Ⅰ	安山岩	完形	12.3	7.4	5.5	747.33	北上山地	敲打面部分的に欠損 一部磨痕有
74	23	15	IC6a住 壁際床上5cm	石斧	Ⅲa	細粒閃緑岩	完形	12.3	6	3.9	363.28	北上山地	磨耗激しい
47	23	16	−IC7d①土坑 覆土	剥片	−	赤色頁岩	一部欠	2.1	2.1	0.45	1.03	北上山地？	調整剥片
304	41	32	−IC7e Ⅱ層下位	石鏃	Ⅰ	頁岩	完形	3.75	2	0.5	2.09	北上山地？	風化
305	41	32	−IID9b 第層	石鏃	Ⅰ	頁岩	完形	3	2	0.5	2.36	北上山地？	先端部摩滅
306	41	32	−IE6j Ⅱ層	石鏃	Ⅰ	頁岩	完形	2.9	1.7	0.35	1.59	北上山地？	
307	41	32	IC3c 撹乱層	石鏃	Ⅱ	頁岩	先端部欠	(3.8)	1.95	0.55	3.42	北上山地？	
308	41	32	−IC8g Ⅱ層下位	先端部	−	頁岩	基部欠	(7.92)	2.69	1.07	23.68	北上山地？	
309	41	32	−IC5j Ⅱ層下位	石匙	Ⅰ	頁岩	完形	6.2	2.5	1.15	11.51	北上山地？	縁部
310	41	32	−IC4j Ⅰ層	石匙	Ⅰ	頁岩	下半欠	(3.2)	2.5	0.9	4.32	北上山地？	縁部 風化著しい
311	41	32	−IC5h Ⅰ層	石匙	Ⅰ	頁岩	下半欠	(3.1)	2.55	1.0	7.04	北上山地？	縁部
312	41	32	−IC9g Ⅱ層上位	石匙	Ⅱ	頁岩	完形	4.2	6.0	1.1	17.29	北上山地？	横型
313	41	32	−IC6h 第層	石篦	−	頁岩	完形	4.9	2	1.4	10.25	北上山地？	
314	41	32	−IC3h Ⅴ層	石篦	−	頁岩	完形	5.9	3	1.6	22.43	北上山地？	
315	41	32	−IC8f 第層上位	石篦	−	赤色頁岩	完形	5.5	4	1.3	36.18	北上山地？	表面に樹面残す
316	41	32	−IC7f Ⅱ層中位	石篦	−	ホルンフェルス	完形	7.2	4.2	1.2	46.26	北上山地	素材は不整剥片 石斧に近い
317	41	32	−IC7e Ⅱ層下位	接器	−	珪質頁岩	完形	3.5	3.6	1.4	18.02	北上山地	
318	41	32	−IC7f Ⅰ層	接器	−	ホルンフェルス	完形	6.03	4.95	0.9	28.59	北上山地	素材は不整剥片
319	42	32	−IC8h 第層	接器	−	頁岩	完形	5.3	4.4	1.5	45.21	北上山地？	平刃形

第11表　石器観察表（1）

No.	図版	写真	出土地点	器種	種別	石質	残存状態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材産地	備考
320	42	32	−IC8i Ⅱ層	掻器	−	頁岩	完形	8.6	7.0	2.85	113.95	北上山地?	表面に規則的な剥片調整痕残す
321	42	32	−ID2b Ⅰ層	掻器	−	頁岩	完形	6.7	4.1	1.5	43.23	北上山地?	刃は全周に刃部
322	42	33	IC6b Ⅳ層	削器	−	頁岩	完形	7.2	4	9	25.25	北上山地?	
323	42	33	−IC9g Ⅰ層	削器	−	チャート	完形	7.25	5.95	2.3	75.29	北上山地	
324	42	33	−ⅡE Ⅰ層	削器	−	頁岩	完形	4	1.9	4	2.96	北上山地?	
325	42	33	−IC7f Ⅰ層	削器	−	頁岩	完形	8.8	3.15	0.9	24.53	北上山地?	石刃素材
326	42	33	IB7i 褐乳層	削器	−	頁岩	完形	5.1	2.8	0.8	8.78	北上山地?	尖刃形
327	42	33	IC6b 黒層	削器	−	頁岩	完形	5.1	4.2	1.2	27.83	北上山地?	尖刃形
328	42	33	IB8i Ⅰ層	削器	−	チャート	完形	4.7	5.6	1.2	42.22	北上山地?	素材剥離は両極打法による
329	−	33	−IC9f Ⅱ層下位	削器	−	赤色頁岩	完形	5.81	4.71	1.78	59.33	北上山地?	素材剥離は両極打法による
330	43	33	−ⅡE9a Ⅳ層	ピエス・エスキーユ	−	赤色頁岩	完形	2.6	0.8	0.8	5.15	北上山地?	
331	43	33	−IC4h Ⅱ層	ピエス・エスキーユ	−	頁岩	完形	3.1	1.4	1.3	6.52	北上山地?	背面に節理面残す
332	−	33	−IC9g Ⅱ層下位	ピエス・エスキーユ	−	頁岩	完形	5.62	4.33	1.98	48.24	北上山地?	
333	−	33	−IC8f Ⅱ層	細部調整剥片	−	頁岩	完形	6.23	2.39	1.43	14.53	北上山地?	
334	43	33	−IC9f Ⅱ層下位	細部調整剥片	−	赤色頁岩	完形	5.6	3.6	1.3	28.54	北上山地?	
335	43	33	−IC9h Ⅱ層	細部調整剥片	−	赤色頁岩	完形	4.3	2.2	1.2	12.72	北上山地?	
336	43	33	IC Ⅰ層	細部調整剥片	−	頁岩	完形	6.4	2.6	1.05	10.21	北上山地?	掻器的な形態
337	−	33	−IC7f Ⅰ層	細部調整剥片	−	頁岩	完形	5.97	3.91	2.24	39.38	北上山地?	石核から転用?
338	−	33	−IC9f Ⅰ層	細部調整剥片	−	赤色頁岩	完形	5.0	2.65	1.39	18.16	北上山地?	
339	43	34	−IC9h Ⅱ層	石核	−	チャート	完形	6.7	7	3.5	147.08	北上山地	
340	−	34	ICⅠe Ⅱ層 (旧両面除)	石核	−	チャート	完形	10.66	10.69	3.92	477.05	北上山地	剥離Ⅰ類の可能性有
341	−	34	IC7b Ⅲ層	石核	−	チャート	完形	10.22	10.05	3.22	393.28	北上山地	剥離Ⅰ類の可能性有
342	−	34	−IC6h Ⅱ層下位	石核	−	チャート	完形	11.23	12.17	4.52	767.16	北上山地	両面剥離の可能性有
343	−	34	IC Ⅰ層	石核	−	チャート	完形	8.36	10.7	6.17	595.52	北上山地	剥離Ⅰ類の可能性有
344	43	34	−ⅡE4g Ⅳ層上位	剥片	−	頁岩	完形	7.7	3.1	1.45	26.21	北上山地?	打面再生剥片と思われる
345	−	34	−ⅡE Ⅰ層	石器片	−	結晶頁岩	欠	(3.09)	(2.29)	(1.29)	4.64	北上山地	尖頭器の基部?
346	43	34	IC4c Ⅱ層	石斧	Ⅰa	砂岩	完形	11.1	5.1	3.0	238.76	北上山地	刃部磨滅
347	43	34	−IC Ⅰ層	石斧	Ⅰa	チャート	基部一部欠	3.6	2.7	0.7	10.70	北上山地	
348	−	34	−ICⅠ8f Ⅰ層	石斧	Ⅰa	ヒン岩	刃部一部欠	10.02	4.53	2.18	179.98	北上山地	使用による欠損
349	−	34	−ID4a Ⅰ層	石斧	Ⅰa	細粒閃緑岩	完形	7.96	3.74	1.48	62.65	北上山地	
350	−	34	IC7c 後乱層	石斧	Ⅰa	ヒン岩	基部側欠	(9.37)	4.05	2.37	169.09	北上山地	
351	−	34	IC7b Ⅲ層	石斧	Ⅰb	ヒン岩	基部側欠	(6.22)	5.34	2.48	142.14	北上山地	刃部摩滅
352	−	34	−IC9g Ⅱ層下位	石斧	Ⅰb	砂岩	刃部一部欠	11.43	4.73	2.43	196.86	北上山地	使用による欠損
353	−	34	−ID9f Ⅱ層	石斧	Ⅰb	頁トイ岩	上半部欠	(10.87)	6.35	3.58	443.28	北上山地	
354	−	35	IC7b Ⅲ層	石斧	Ⅰc	ヒン岩	基部側欠	(6.38)	5.26	3.31	150.80	北上山地	風化著しい
355	−	35	−ⅡE4g Ⅲ層	石斧	Ⅰc	頁トイ岩	刃部側欠	13.03	5.52	4.09	420.40	北上山地	基部除く全体に調整敲打痕
356	−	35	IC7c 後乱層	石斧	Ⅰc	ヒン岩	刃部側欠	(11.0)	5.28	3.45	296.55	北上山地	片面中央部に磨痕
357	43	35	−IC9f Ⅱ層下位	石斧	Ⅱa	ホルンフェルス	完形	10.7	4.6	2.6	138.34	北上山地	
358	−	35	−IC9f Ⅱ層下位	石斧	Ⅱa	石英安山岩	完形	11.96	5.63	2.44	223.44	北上山地	
359	−	35	−IC6h Ⅲ層	石斧	Ⅱa	ホルンフェルス	完形	10.36	6.47	3.37	318.73	北上山地	両面中央部は調整無
360	−	35	IC2c Ⅰ層	石斧	Ⅱa	ヒン岩	基部側欠	(7.06)	5.18	2.82	131.56	北上山地	
361	43	35	IC Ⅰ層	石斧	Ⅱa	ホルンフェルス	完形	11.1	6.9	2.1	174.17	北上山地	分銅形
362	43	35	IC4b 後乱層	石斧	Ⅱb	ヒン岩	完形	16.24	8.13	5.63	859.47	北上山地	大形 両面加工で一部に磨面残す
363	−	35	−IF0a Ⅳ層	石斧	Ⅲa	細粒閃緑岩	基部側欠	(10.52)	5.24	3.84	337.97	北上山地	
364	−	35	IC4c 後乱層	石斧	Ⅲa	細粒閃緑岩	基部一部欠	(10.3)	6.06	4.22	369.10	北上山地	
365	−	35	−IC6b Ⅲ層	石斧	Ⅲa	細粒閃緑岩	基部側欠	(7.12)	(7.05)	2.49	213.82	北上山地	
366	−	35	−ⅡE7h 黒層	石斧	Ⅲb	細粒閃緑岩	基部側欠	8.73	4.64	3.23	203.79	北上山地	

第12表 石器観察表（2）

No.	図版	写真	出土地点	器種	層位	石質	残存状態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材産地	備考
367	44	36	IC4d I層	石斧	Ⅳ	ホルンフェルス	完形	15.1	6.2	3	298.21	北上山地	未製品
368	−	36	IB7i 機乱層	石斧	Ⅳ	砂岩	完形	15.95	6.06	5.67	702.43	北上山地	未製品
369	44	36	−IC6j Ⅱ層	石斧	Ⅴ	ホルンフェルス	完形	19.3	6.86	6.01	1099.80	北上山地	丸のみ形石斧
370	44	36	−IID7g 旧河道跡砂礫層直上	礫器	−	石英安山岩	完形	12.9	9.6	4.1	884.12	北上山地	
371	−	36	IC6b Ⅳ層	礫器	−	細粒閃緑岩	完形	13.27	12.55	4.96	1218.60	北上山地	
372	44	36	IC3g I層	礫器	−	ヒン岩	完形	8.7	7.1	4.0	310.20	北上山地	石核の可能性有
373	−	36	−IIE3h Ⅳ層	礫器	−	細粒閃緑岩	完形	9.3	12.04	4.3	668.05	北上山地	
374	−	36	−ID4a Ⅳ層上位（旧河道跡）	礫器	−	細粒閃緑岩	完形	10.32	11.56	4.85	759.55	北上山地	
375	44	36	IC3b Ⅳ層	礫器	−	石英安山岩	完形	8.4	10.4	4.1	563.51	北上山地	
376	−	36	IC6b 旧層下〜Ⅳ層上位	礫器	−	石英安山岩	完形	10.35	10.06	4.67	656.46	北上山地	
377	−	36	−IC7h Ⅱ層	礫器	−	砂岩	完形	6.92	7.13	3.61	237.84	北上山地	
378	−	36	−ID0b Ⅱ層	礫器	−	砂岩	完形	8.31	9.42	4.15	386.44	北上山地	調整は右側縁上半一方から
379	−	36	−IE6g Ⅱ層	礫器	−	砂岩	完形	8.97	9.68	3.65	491.84	北上山地	
380	−	36	−IC5f I層	礫器	−	砂岩	完形	10.11	10.5	4.53	571.14	北上山地	
381	−	36	IC0f I層	礫器	−	細粒閃緑岩	完形	11.0	13.28	5.24	1065.84	北上山地	
382	−	36	IC4b 機乱層	礫器	−	砂岩	完形	9.45	6.84	3.21	332.17	北上山地	
383	44	37	−IE3g Ⅳ層	礫器	−	細粒閃緑岩	完形	8.1	8.4	3.7	330.52	北上山地	刃部鈍角
384	−	37	−IC6j Ⅱ層	礫器	−	石英安山岩	完形	8.89	9.19	3.35	391.82	北上山地	刃部鈍角　敲化跡付着
385	−	37	IC3e 旧河道跡砂礫層	礫器	−	安山岩	完形	7.93	10.08	4.5	504.21	北上山地	刃部鈍角　風化
386	−	37	−IIE8f I層	礫器	−	砂岩	完形	10.45	8.51	4.25	563.08	北上山地	刃部鈍角
387	−	37	−IIE3g Ⅳ層	礫器	−	細粒閃緑岩	完形	9.05	11.54	5.24	754.66	北上山地	折刃形？
388	−	37	−IC7h Ⅳ層	礫器	−	ヒン岩	完形	11.26	10.16	5.22	865.95	北上山地	敲化跡付着
389	−	37	−IIE6f Ⅱ層	礫器	−	砂岩	完形	7.19	7.9	4.15	311.99	北上山地	
390	−	37	IC1e Ⅱ層	礫器	−	細粒閃緑岩	完形	9.77	11.17	3.58	616.49	北上山地	風化
391	−	37	IC6b Ⅳ層	礫器	−	ホルンフェルス	完形	7.92	9.0	2.78	258.80	北上山地	
392	−	37	IC5d Ⅱ層	礫器	−	砂岩	完形	7.1	8.56	3.48	316.37	北上山地	刃部鈍角
393	−	37	IC4b I層	礫器	−	砂岩	完形	10.11	8.58	4.49	569.52	北上山地	
394	−	37	IIC0b 機乱層	礫器	−	ホルンフェルス	完形	6.14	7.64	4.37	271.13	北上山地	
395	−	37	−IIE8j Ⅱ層	礫器	−	ヒン岩	完形	10.43	8.93	3.57	497.03	北上山地	尖刃形
396	−	37	IC4b 機乱層	礫器	−	砂岩	完形	9.06	9.64	3.58	409.08	北上山地	尖刃形
397	−	37	IC5e 機乱層	礫器	−	ヒン岩	完形	12.22	9.43	4.65	722.85	北上山地	尖刃形
398	44	37	IC5d Ⅱ層	礫器	−	ホルンフェルス	完形	5.1	9.3	2.6	172.41	北上山地	欠損
399	−	37	−IC5i Ⅱ層上位	礫器	−	砂岩	完形	5.78	8.38	3.22	207.41	北上山地	刃部鈍角
400	−	37	−IE9j Ⅱ層	礫器	−	砂岩	完形	5.43	8.28	3.68	227.37	北上山地	刃部鈍角
401	−	37	IC3c 旧河道跡砂礫層	礫器	−	砂岩	完形	6.84	10.04	2.91	328.34	北上山地	左側は意図的な切断と思われる折刃形？
402	45	37	−ID6g 旧河道跡砂礫層直上	礫器	−	細粒閃緑岩	完形	11.34	7.0	3.02	425.41	北上山地	折刃形
403	−	37	−ID6a Ⅱ層	礫器	−	砂岩	完形	10.45	10.49	4.81	774.94	北上山地	折刃形
404	−	38	−IC8h Ⅱ層	手斧状扁平打製石器	Ⅰ	ヒン岩	完形	13.73	7.56	2.92	473.56	北上山地	全周両面に調整剥離、両縁緑に磨痕
405	45	38	−IC5h Ⅱ層下位	手斧状扁平打製石器	Ⅱ	ホルンフェルス	欠損	12.9	6.4	2.9	300.22	北上山地	
406	45	38	IC5e 機乱層	手斧状扁平打製石器	Ⅱ	ヒン岩	完形	14.7	8.4	3.9	562.35	北上山地	
407	−	38	−IC7h Ⅱ層上位	手斧状扁平打製石器	Ⅱ	石英安山岩	一半部欠	(8.52)	(7.82)	(2.64)	180.48	北上山地	
408	45	38	IIC0b 機乱層	手斧状扁平打製石器	IIa	ホルンフェルス	完形	19.25	6.1	2.6	313.71	北上山地	風化
409	−	38	−IIC8f Ⅱ層上位	手斧状扁平打製石器	IIa	細粒閃緑岩	完形	11.82	4.82	2.51	193.12	北上山地	石斧に近い
410	−	38	−IIC8h Ⅱ層	手斧状扁平打製石器	IIb	ホルンフェルス	完形	13.91	7.52	2.64	353.64	北上山地	未製品？
411	45	38	−IC8f Ⅱ層下位	磨り石	Ⅰ	細粒閃緑岩	完形	14.94	7.02	3.59	675.72	北上山地	一端部に敲磨痕有
412	−	38	−IC9h Ⅱ層	磨り石	Ⅰ	石英安山岩	一半部欠	(9.73)	(9.18)	3.32	445.01	北上山地	平円状作り かけ？
413	−	39	−IC9g Ⅱ層上位	磨り石	Ⅱ	砂岩	完形	14.53	5.98	5.51	677.84	北上山地	磨り面は一側縁　両端部に敲打痕

第13表　石器観察表（3）

№	図版	写図	出土地点	器種	細別	石質	残存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材産地	備考
414	－	39	－ID2a Ⅰ期	磨り石	Ⅱ	ヒン岩	完形	13.36	8.12	5.42	896.59	北上山地	磨り面は一側縁 両端部に敲打痕
415	－	39	ICOb Ⅰ期	磨り石	Ⅱ	砂岩	半欠	(9.73)	6.29	4.86	465.73	北上山地	磨り面は二側縁
416	－	39	－ID0b Ⅰ期	磨り石	Ⅱ	砂岩	完形	5.53	4.66	4.52	169.35	北上山地	磨り面平坦化
417	45	39	－ID9b Ⅱ期	石錘	－	石英安山岩	完形	7.7	6.4	2.7	199.45	北上山地	石核を転用？
418	－	39	－IE4g Ⅱ期	石錘	－	石英安山岩	完形	8.64	8.07	4.3	459.11	北上山地	調整は片面のみ
419	－	39	－IC8f Ⅱ期下位	石錘	－	砂岩	完形	11.57	9.99	4.43	685.80	北上山地	両面に調整有
420	45	39	－ID0a Ⅱ期	敲石	Ⅰ	チャート	完形	8.9	8.7	8.3	866.51	北上山地	円錐形 下端全面に敲磨痕
421	－	39	IC6b 旧第下～Ⅳ期上位	敲石	Ⅰ	チャート	完形	8.76	7.77	5.98	595.87	北上山地	一端部に敲打痕
422	－	39	－ID5a Ⅱ期	敲石	Ⅰ	ヒン岩	完形	12.47	6.65	2.08	306.32	北上山地	一端部から側縁にかけて敲磨痕
423	－	39	－IC8h Ⅱ期	敲石	Ⅰ	砂岩	完形	11.89	3.88	2.89	193.60	北上山地	一端部に微細な敲打痕
424	－	39	－ID1f 旧河道跡砂層期	敲石	Ⅰ	砂岩	完形	11.28	3.87	3.02	165.49	北上山地	両端部に微細な敲打痕
425	－	39	－ID5a Ⅱ期上位	敲石	Ⅱ	砂岩	完形	7.91	9.16	3.89	478.70	北上山地	側縁の1／2に敲磨痕
426	－	39	IC7b Ⅱ期	敲石	Ⅱ	チャート	完形	8.21	6.41	5.54	440.96	北上山地	両端部に敲打痕
427	－	40	ICOe Ⅰ期	敲石	Ⅱ	チャート	完形	5.69	4.45	4.34	148.25	北上山地	一端は敲打、一端は破磨
428	－	40	－ID5a Ⅱ期	敲石	Ⅱ	花崗斑岩	完形	13.47	7.99	6.3	928.10	北上山地	一側縁平坦に敲磨痕
429	－	40	－IC4g Ⅰ期	敲石	Ⅲ	砂岩	完形	8.6	7.94	3.22	396.44	北上山地	側縁の1／2に敲磨痕
430	46	40	－IC5j Ⅱ期上位	敲石	Ⅲ	砂岩	完形	7.3	7.75	4.0	415.25	北上山地	全側縁に敲磨痕
431	46	40	－IC9g Ⅱ期下位	敲石	Ⅳ	砂岩	敲打部一部欠	14.7	6.6	3.5	395.36	北上山地	使用による欠損
432	－	40	－ICOj Ⅱ期	敲石	Ⅳ	凝灰岩	完形	12.88	7.59	6.26	920.55	北上山地	三側縁に敲打痕
433	－	40	－IC7e Ⅱ期	敲石	Ⅳ	石英安山岩	一端一部欠	(14.41)	6.31	4.06	545.84	北上山地	敲打による欠損
434	－	40	－ID8f 旧河道跡黒色土～砂礫層	敲石	Ⅳ	石英安山岩	一端一部欠	14.79	7.86	3.63	727.62	北上山地	敲打による欠損
435	－	40	－IC8g Ⅱ期下位	敲石	Ⅳ	砂岩	完形	7.56	6.21	2.57	174.92	北上山地	側縁の1／4に敲打痕
436	46	40	IC6b Ⅳ期上位	敲石	Ⅳ	砂岩	完形	17.4	11.1	5.3	1510.22	北上山地	両端部に敲打痕
437	－	40	IC6b Ⅳ期	敲石	Ⅳ	砂岩	両端一部欠	(8.86)	5.23	3.77	248.44	北上山地	側縁全周に敲打痕 敲打により両端部欠損
438	－	40	－IC6i Ⅱ期	敲石	Ⅳ	花崗閃緑岩	完形	9.31	7.52	5.6	603.36	北上山地	一端部に敲打痕
439	－	40	－ID4a Ⅰ期	敲石	Ⅳ	石英安山岩	完形	6.98	7.44	6.12	405.91	北上山地	側縁の3／4に敲打痕
440	－	40	－IC6j Ⅰ期	敲石	Ⅳ	石英安山岩	完形	7.06	19.78	5.13	1066.09	北上山地	一側縁に敲打痕
441	－	41	－IC9f Ⅱ期下位	敲石	Ⅳ	砂岩	完形	14.48	8.54	4.77	891.56	北上山地	ほぼ全体に浅い敲打痕
442	－	41	－IC9f Ⅱ期中位	敲石	Ⅳ	砂岩	完形	12.02	7.53	4.39	559.62	北上山地	ほぼ全体に浅い敲打痕
443	46	41	－IC9f Ⅱ期下位	凹石	－	花崗斑岩	完形	11.3	9.5	5.9	951.92	北上山地	
444	－	41	IC1d 撹乱期	凹石	－	石英安山岩	完形	10.59	9.29	4.38	628.33	北上山地	
445	－	41	－IC9g Ⅱ期下位	台石	－	ヒン岩	完形	16.71	10.02	8.4	1455.55	北上山地	片面の一部に潰痕
446	－	41	－IC Ⅱ期	台石	－	ホルンフェルス	完形	37.3	19.7	9.8	12.9kg	北上山地	

石製品観察表

№	図版	写図	出土地点	器種	細別	石質	残存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材産地	備考
447	46	41	－ID4a Ⅳ期上位	円盤状石製品	－	凝灰岩	完形	3.9	4.6	1.45	36.26	北上山地	磨耗ひどく調整不明
448	－	41	IC3c 旧河道跡砂礫期	石製品	－	凝灰岩	一部欠	4.7	7.2	2.7	56.90	北上山地	孔1ヶ所
449	46	41	－IC4g Ⅰ期	石製品	－	砂岩質	完形	6.81	5.08	1.79	41.56	北上山地？	直径2～2.5cm程の凹み2ヶ所

銭貨観察表

№	図版	写図	出土地点	種別	細別	残存状態	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
450	46	41	－IE Ⅰ期（現河道岸）	銭貨	寛永通宝（新寛永）	完形	2.46×2.46	0.13	3.36	
451	46	41	－IC5e Ⅰ期	銭貨	寛永通宝（新寛永）	完形	2.23×2.22	0.095	1.82	摩耗し小・薄化している

第14表　石器観察表（4）・石製品観察表・銭貨観察表

Ⅵ　まとめと考察

1．遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡４棟、土坑17基、柱穴状小土坑28基である。耕作等による削平のため、各遺構とも残存状態が悪い。ここでは住居跡及び土坑について若干まとめることとする。

竪穴住居跡

検出地点　－ＩＣ区から１棟、ＩＣ区から３棟で、全て斜面下方にあたる。この付近は調査範囲内で最も傾斜角の緩い場所である。４棟とも範囲北側境界付近に位置しており、北東～南西に一列に並ぶような状態を呈している。南側には旧河道跡⑤及び④があり、意図的にこれに沿う場所に構築したのか、或いは旧河道跡部分にも構築されていたものが河道により消失したための所産なのか、どちらの可能性も考えられる。

平面形　壁がほとんど残置しないＩＣ５ｂ住居跡以外の３棟は、いずれも楕円形を呈する。

規模　ＩＣ５ｂ住居跡を除く３棟の残存長軸×短軸長は、大→小の順に、ＩＣ６ａ住居跡：4.81×3.87m、ＩＣ３ｃ住居跡：4.15×3.27m、－ＩＣ７ｆ住居跡：3.55×3.4mである。極端なばらつきはみられない。

覆土　削平されているため最厚でも20cm前後と浅い。ＩＣ５ｂ住居跡を除く３棟は何れも黒褐色土主体で、－ＩＣ７ｆ・ＩＣ３ｃの２住居跡にはその後に黒色土が堆積している。To－Cuはほとんど混入しておらず、この状況から本住居跡群は少なくともTo－Cu降下以降の構築であることが窺える。

構築時の掘り込み・床　何れも第Ⅶ層中まで掘り込んでいる。貼り床が施されたものはない。

柱穴・ピット　検出数・配置に共通性はみられない。ＩＣ６ａ住居跡では20基検出され、内、壁周辺に17基存在する。－ＩＣ７ｆ・ＩＣ３ｃの２住居跡の場合、前者はＰ４とＰ５、後者はＰ１とＰ３がそれぞれ壁近くにあり対称を為すものの、これ以外に規則的な配置は確認されない。

出入り口状施設　ＩＣ３ｃ住居跡、ＩＣ６ａ住居跡の２棟で確認された。前者は竪穴内に納まっており、内部に向かって ⊔ 字状を呈する。一方、後者のものは ⊓ 字状を呈し、左右縦部が竪穴外に延びている。構築位置は両者とも南東側で、共通している。

炉　地床炉を持つもの３棟、石囲炉を持つもの１棟である。ただしこの石囲炉には焼土がほとんど存在せず、部材設置面（底面から10cm程度上）よりも底面に焼土粒・炭化物粒が多いという特徴がみられた。どのように使用していたのか注目されるところであるが、想像の域を出ない。

構築時期　残存状態が悪く、且つ床面出土遺物が少量・小破片に限られることから時期の確定は非常に困難であるが、大凡縄文時代後期前～中葉頃のものと判断しておきたい。

土坑

検出地点　旧河道跡部分を除く全域から検出されている。特に－ＩＣ７ｆ住居跡周辺が多い。

平面形・規模・覆土　平面形に共通性はなく、円形・楕円形・不整形など様々である。規模も長軸長0.45～３m、深さ６～39cm（どちらも残存値）とまちまちである。覆土は主に黒色系の土で構成され、To－Cuはほとんど混入しない。

構築時期　特定は非常に難しい。覆土から判断して、少なくともTo－Cu降下以後と思われる。住居跡周辺のものについては、これに伴う可能性が考えられる。

2．遺物

出土した遺物には、縄文土器、土製品、石器、石製品、銭貨がある。各遺物については前章を参照してい

グリッド名	層位									合　計
	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	竪穴	遺構内	旧河道砂礫層	撹乱	
－ⅡE3 g			13	354						367
－ⅡE3 h				364						364
－ⅡE4 g		22	268	434	12					736
－ⅡE4 h		11	138	39	12					190
－ⅡE5 g			229	952						1,181
－ⅡE5 h		2,296	2,420	1,362	16					5,775
－ⅡE5 i		402	388							790
－ⅡE6 e								39		39
－ⅡE6 f			1,223							1,223
－ⅡE6 g		5,648	5,186	1,605				1,134		12,603
－ⅡE6 h		1,144	534	841				119		2,638
－ⅡE6 i		51	76							127
－ⅡE6 j		53								53
－ⅡE7 e	80		19			126				225
－ⅡE7 f		1,573	1,202			1,151				3,926
－ⅡE7 g		468	1,360	259	32			891		3,011
－ⅡE7 h		25	86	51						162
－ⅡE7 i		86								86
－ⅡE7 j								33		33
－ⅡE8 e		481	856	146	22					1,504
－ⅡE8 f			449							449
－ⅡE8 g			49	8						57
－ⅡE8 h		138	127							265
－ⅡE8 i		16	74		8					98
－ⅡE8 j		33								33
－ⅡE9 a				1,767						1,767
－ⅡE9 e					32					32
－ⅡE9 h	26									26
－ⅡE9 i			430		24					474
－ⅡE9 j		1,570								1,570
－ⅡE	288									288
－ⅡF0 g			119	12						131
－ⅡF8 a				335						335
－ⅡF9 a			96							96
－ⅡF9 b				955						955
－ⅡD0 a		97								97
－ⅡD5 g		560								560
－ⅡD8 a			48							48
－ⅡD8 b		1,063	25							1,088
－ⅡD8 c	810		10							820
－ⅡD8 d	898									898
－ⅡD8 f							218			218
－ⅡD9 a		1,779								1,779
－ⅡD9 b		70	163							233
－ⅡD9 c		425		130						555
－ⅡD9 d		30								30
－ⅡD9 e							640			640
－ⅡD9 f							875			875
－ⅡD9 g							240			240
－ⅡD8～－ⅡD9 h	415									415
－ⅡD9 f～－ⅠD9 f							730			730
－ⅡD	38									38
－ⅠC1 j			210							210
－ⅠC2 i		3				65				68
－ⅠC2 j			23							23
－ⅠC3 g			475		30					505
－ⅠC3 h	45	166								211
－ⅠC3 i	20									20
－ⅠC4 g	123	2,381	545		28					2,997
－ⅠC4 h		63	75							138
－ⅠC4 i		54								54
－ⅠC4 j	182	145	123							450
－ⅠC5 f	18									18
－ⅠC5 g	8									8
－ⅠC5 h	709	980								1,689
－ⅠC5 i	254	1,554	547							2,355
－ⅠC5 j	141	2,581	362							3,084
－ⅠC6 e	230									230
－ⅠC6 f	335						218			553
－ⅠC6 g	17	3,064	19							3,601
－ⅠC6 h		5,077	145							5,221
－ⅠC6 i	215	3,120	400							3,735
－ⅠC6 j	35	1,799	44							1,878
－ⅠC7 e	39	1,486	308			43				1,876
－ⅠC7 f	254	500	628			1,720		252		3,354
－ⅠC7 g	94	1,220	3,403							4,717
－ⅠC7 h	225	2,983	2,011		26			250		5,495
－ⅠC7 i	49	330	176							555
－ⅠC7 j		73								73
－ⅠC8 d		70								70

グリッド名	層位									合計
	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	竪穴	遺構内	旧河道砂礫層	撹乱	
－ⅠC8 e	190	7,334	1,492			2				8,968
－ⅠC8 f	2,288	4,111	2,685							9,074
－ⅠC8 g	49	11,780	2,880							14,719
－ⅠC8 h	60	1,854	1,885							3,796
－ⅠC8 i		4								4
－ⅠC9 d	155									155
－ⅠC9 e	846	1,620	79							2,545
－ⅠC9 f	505	2,577	212							3,294
－ⅠC9 g	3,092	10,362	3,908							17,362
－ⅠC9 i		93								93
－ⅠC9 h		982	593							1,575
－ⅠC7～－ⅠC8 i	145	3,425	290							3,860
－ⅠD8 a			244						210	454
－ⅠD8 b	263	260	450							973
－ⅠD8 c								415		415
－ⅠD8 d			81							81
－ⅠD8 f		376						1,460		1,836
－ⅠD1 a			429							429
－ⅠD1 b			505							505
－ⅠD1 c			204							204
－ⅠD1 d	456									456
－ⅠD1 f								4,116		4,116
－ⅠD2 a	830		45					555	12	1,442
－ⅠD2 b	453									453
－ⅠD2 f								200		200
－ⅠD3 a		70								70
－ⅠD3 b			1,250							1,250
－ⅠD4 a	600	300	143							1,043
－ⅠD5 a	3,624	5,280	18							8,922
－ⅠD6 a	188		22							210
－ⅠD6 f～－ⅠD1 e	200									200
ⅠC8 d	180									180
ⅠC8 e	560	17	663							1,260
ⅠC8 f	246									246
ⅠC8 g	374	252								626
ⅠC8 h	30									30
ⅠC1 d	834		972							1,806
ⅠC1 e	2,142		1,883							4,025
ⅠC1 f	720	1,275								1,995
ⅠC1 g	119									119
ⅠC2 b								120		120
ⅠC2 c	300		25							325
ⅠC2 d	306	38	717	923						1,984
ⅠC2 e	88	767	1,165							2,015
ⅠC2 f	3									3
ⅠC2 g	55									55
ⅠC3 b	18									18
ⅠC3 c	126	375						5,428	4	5,933
ⅠC3 d	1,176								135	1,311
ⅠC3 e	233							146		379
ⅠC3 f	79							56		135
ⅠC4 b	1,156								51	1,207
ⅠC4 d	101									101
ⅠC4 e	183								159	342
ⅠC4 f	44	84								128
ⅠC4 g		18								18
ⅠC5 b								852	2,060	2,888
ⅠC5 d	35	33								68
ⅠC5 e	172								43	215
ⅠC5 f	350									350
ⅠC5 a								1,809		1,809
ⅠC6 b			1,394	2,019						3,413
ⅠC6 c			936							936
ⅠC6 f	380									380
ⅠC7 a				340						340
ⅠC7 b			1,506	30						1,536
ⅠC7 e	59									59
ⅠC8 a									137	137
ⅠC8 b			6							6
ⅠC8 e	43									43
ⅠC9 b	110									110
ⅠC	10,330									10,330
ⅠB	4,729									4,729
ⅠC0 a									687	687
BC	1,285									1,285

	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	竪穴	遺構内	旧河道	撹乱	総合計
総計	47,015	99,147	45,427	13,365	283	2	11,182	3,651	5,250	226,632

第15表　グリッド・層別　土器出土量一覧　（単位：g）

ただくこととして、ここでは土器出土状況及び地形から本遺跡（今回調査区）の性格を考えてみたい。

本遺跡から出土した土器は縄文時代前期初頭から晩期のものまで見られ、時期幅が広い。このうち、最も出土量の多かった時期は前期後半の土器で、それに次いで中期・後期、前期前半となり、晩期のものは少量である。また、大半が小破片であり、接合を経ても完形になったものは皆無である。土器全体の大まかな出土量を小グリッド別に表した（第15表）。

出土層位　調査区（－ⅡＥ～－ⅠＥ区）を横切って東流する竜頭川の右岸と左岸で若干の相違が見られた。左岸ではⅡ層・Ⅲ層からの出土が多く、次いでⅠ層となっており、Ⅳ層以下の出土はごく少量に限られる。一方、右岸ではⅠ層からの出土がほとんどなく、Ⅱ層からⅣ層までそれほど差異なく出土している。これは地形の違いに起因するものと思われる。右岸部分は緩斜面地で条件が良いことから近年は水田や畑地として利用されており、削平も行われ現況は段々状を呈している。旧河道跡部分以外は、大半の地点でⅠ層直下からⅢ層・Ⅴ～Ⅶ層が露出する状態であった。Ⅰ層の遺物数が多いのはこのためである。よって、遺構・遺物ともに相当量が紛失しているものと思われる。

出土地点　竜頭川の左・右岸ともに一定の特徴が見られる。遺構内出土分以外は、両者とも南西～北東方向に筋状に出土しているという点である。左岸の場合、この出土範囲は旧河道跡と一致する。右岸で明確な旧河道跡は確認されていないが、出土範囲は同じく沢状に窪んだ地形を呈しており、左岸と類似する。また、後期の土器の多くは住居跡付近から、晩期の土器は－ＩＣ区以東から出土している。

出土層位と遺物時期の関係　層位と時期の間に若干相関関係が見られるのは右岸部分で、Ⅳ層からは主に前期前半、Ⅲ層からは主に前期～後期の土器が出土している。ただし、Ⅳ層でも前期前半以降の土器が幾分出土しており、層位と遺物が完全に相関する訳ではない。一方、左岸の場合は全くといってよいほどバラバラで、前期と後期の土器が併出するという状況である。

なお、前回の調査においても、旧河道跡及びこれに伴って流入したと思われる遺物の集中が確認されており、このような状況から今回出土した土器の多くも流水等の影響を受けて斜面上方から流れ込んだものと考えられる。特に、前期に属する土器はⅠ・Ⅱ層からも多量に出土しており、相当量が流入したものである可能性が高い。よって、今回調査範囲より一段上の段丘上・旧河道流路の上流部分には、概期の遺跡が存在するものと思われる。

引用・参考文献

＊それぞれ次のように略称した。

「(財) 岩手県埋蔵文化財センター」は「岩埋文」

「(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター」は「岩文振埋文」

「教育委員会」は「教委」

他県の報告書もこれに準じ省略して掲げた。

岩　埋　文　1978 『二戸市　沢内Ｂ遺跡』岩埋文調査報告書第７集

青森県教委　1980 『永野遺跡発掘調査報告書』青森県埋文調査報告書第56集

青森県教委　1980 『鷹架遺跡』青森県埋文調査報告書第63集

岩　埋　文　1983 『上里遺跡発掘調査報告書』岩埋文調査報告書第55集

熊谷常正　1983 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告』第１号

写　真　図　版

No.170　A面

No.170　B面　　縮尺不定

カラー写真図版１　仕切付土器

No.170　上面

No.290　縮尺不定

カラー写真図版２　仕切付土器・製塩土器

No.286

近影①－１　口縁部片外面

近影①－２　口縁部片内面

近影②－１　胴部片外面

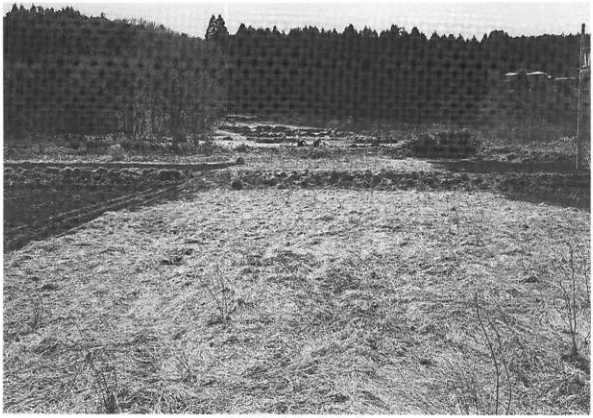
近影②－２　胴部片内面　縮尺不定

カラー写真図版３　製塩土器

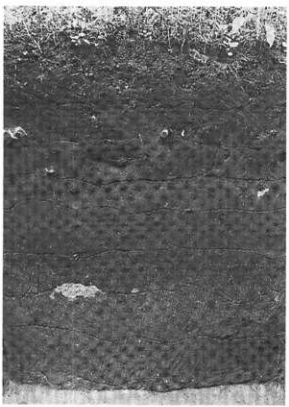
遺跡周辺遠景

旧河道跡（①・②・③）

カラー写真図版４　遺跡遠景・旧道遺跡



調査前風景　北東から



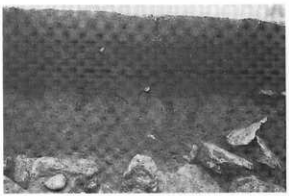
基本層序（－ⅡE7jグリッド）

写真図版１　調査前風景・土層断面（１）

調査区土層断面　F－F′

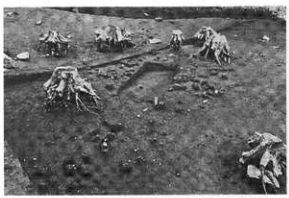
F－F′近影

－ＩＤＯｄ付近断面(南西から)



調査区土層断面　B－B′－ＩＣ7ｇ付近

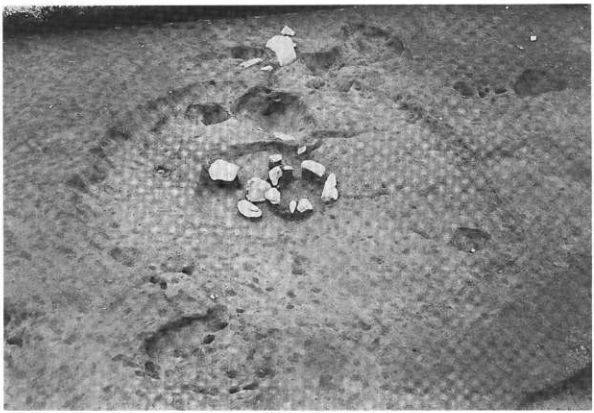
大雨による洪水後の状況　ＩＣ区(西から)



－ＩＩＥ区遺物出土状況(Ⅲ層・北東から)

－ＩＣ区遺物出土状況（Ⅲ層・北東から)

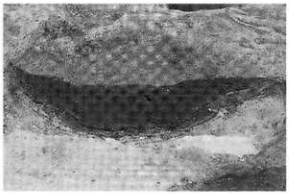
写真図版２　土層断面（２)・遺物出土状況



－ＩＣ７ｆ住居跡 平面（南東から）

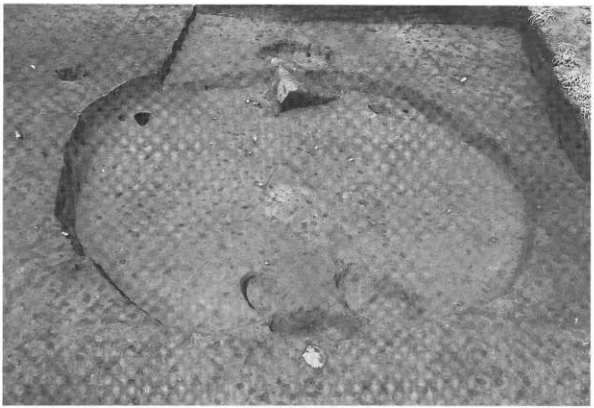
断面（Ａ－Ａ′）

炉 平面（南東から）



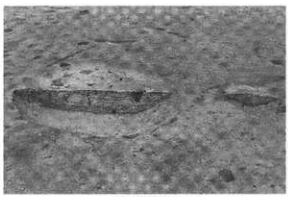
Ｐ１ 平面

写真図版３ －ＩＣ７ｆ住居跡

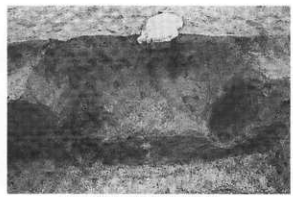


ＩＣ３ｃ住居跡 平面（南東から）

断面（Ａ－Ａ′）

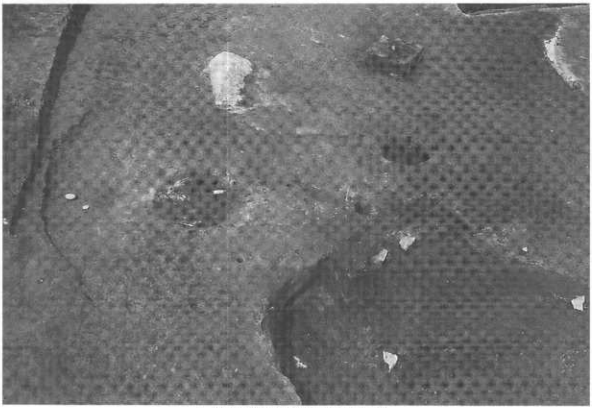


炉 断面

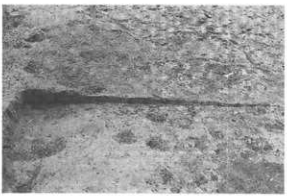


Ｐ２ 横部断面（北西から）

写真図版４　ＩＣ３ｃ住居跡



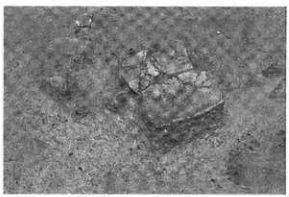
ＩＣ5ｂ住居跡 平面(南東から)



断面(Ａ－Ａ′)

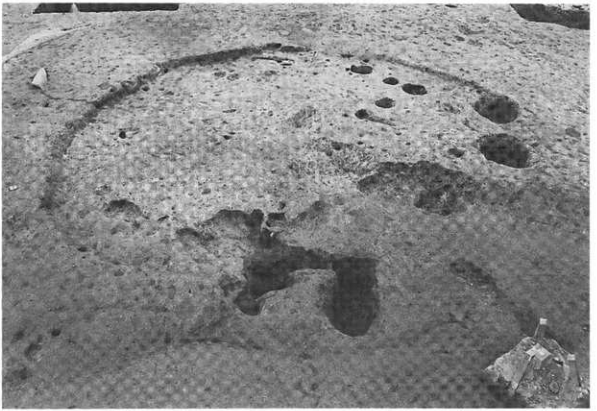
断面(手前：Ｂ－Ｂ′・奥：Ｃ－Ｃ′)

Ｐ２ 断面



土器出土状況(炉付近)

写真図版５　ＩＣ5ｂ住居跡



ＩＣ６ａ住居跡 平面（南東から）

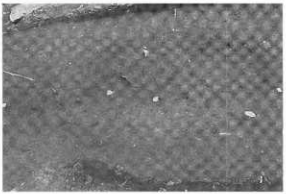
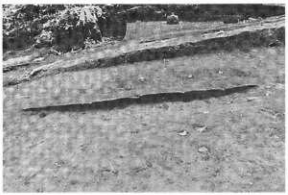
断面（Ａ－Ａ′）

土器出土状況（床面）

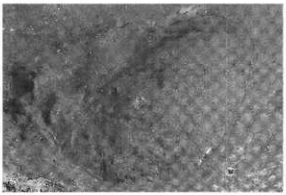
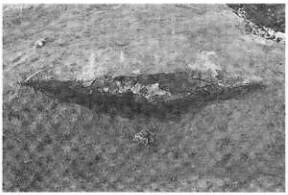
Ｐ 14 礫出土状況

写真図版６　ＩＣ６ａ住居跡

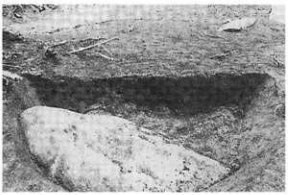
平　面　　－ⅡE7e土坑　　断　面

平　面　　－ⅡE7f土坑　　断　面

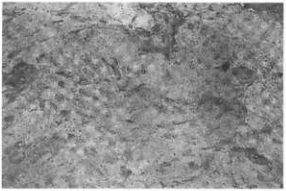



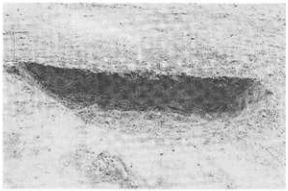
平　面　　－ⅡE8e土坑　　断　面



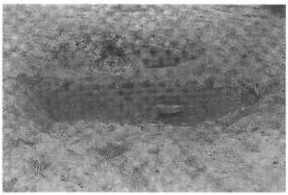
平　面　　－ⅡD5i土坑　　断　面

写真図版7　土坑（1）

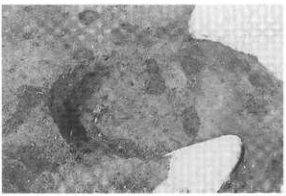


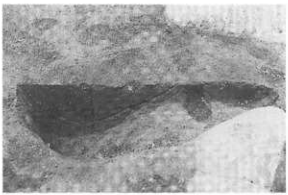


平　面　　－ⅡD6ｉ土坑　　断　面

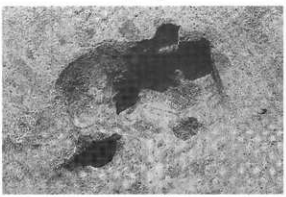


平　面　　－ⅠC2ｉ土坑　　断　面





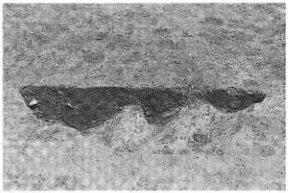
平　面　　－ⅠC6ｅ土坑　　断　面



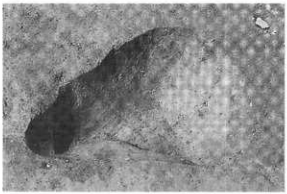
－ⅠC6ｆ土坑平面

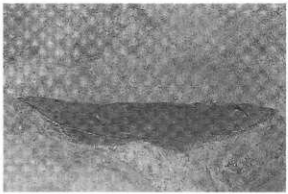
－ⅠC7ｅ①土坑平面北側

写真図版８　土坑（２）



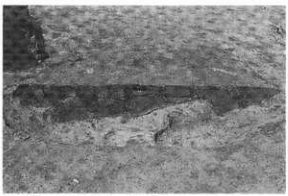
平　面　　－ＩＣ7ｅ②土坑　　断　面





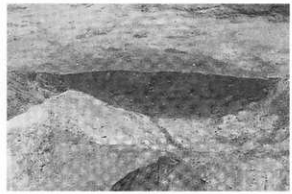
平　面　　－ＩＣ7ｅ③土坑　　断　面

平　面　　－ＩＣ7ｆ①土坑　　断　面



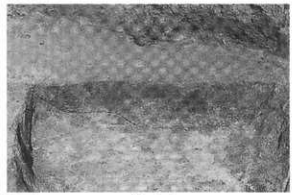
平　面　　－ＩＣ7ｆ②土坑　　断　面

写真図版９　土坑（３）

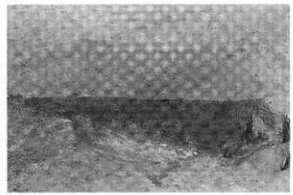


平　面　　ⅠC2b土坑　　断　面

平　面　　ⅠC5b土坑　　断　面

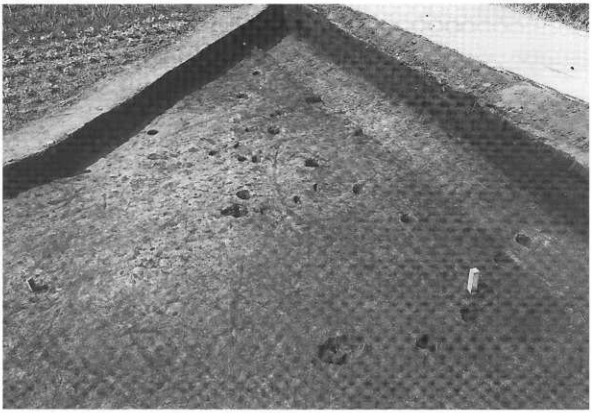


平　面　　ⅠB7j①土坑　　断　面

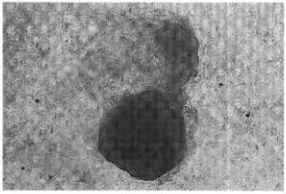


平　面　　ⅠB7j②土坑　　断　面

写真図版10　土坑（4）

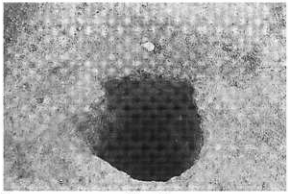


柱穴状小土坑群 平面(南から)



平 面

P28



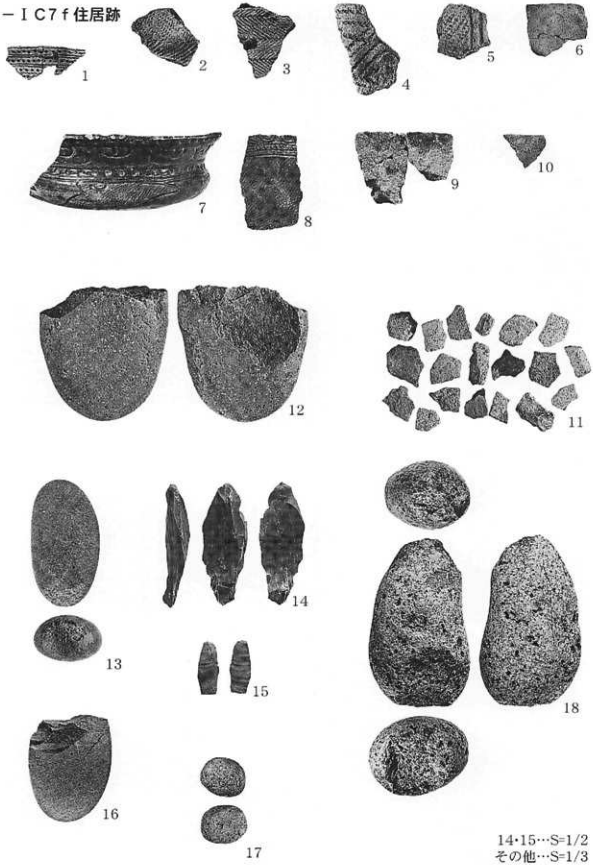
断 面

P5 断面(南から)

P21 断面(南東から)

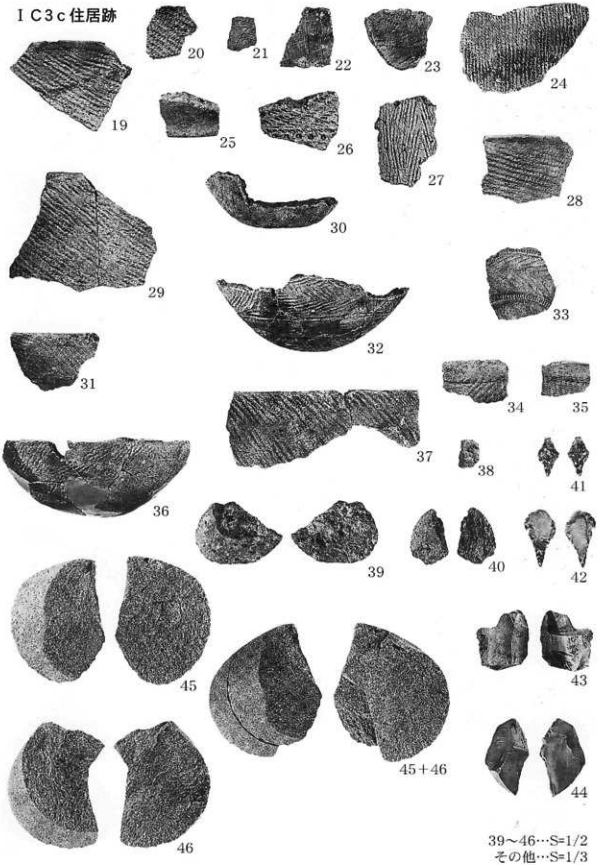
写真図版11 柱穴状小土坑

－ＩＣ７ｆ住居跡

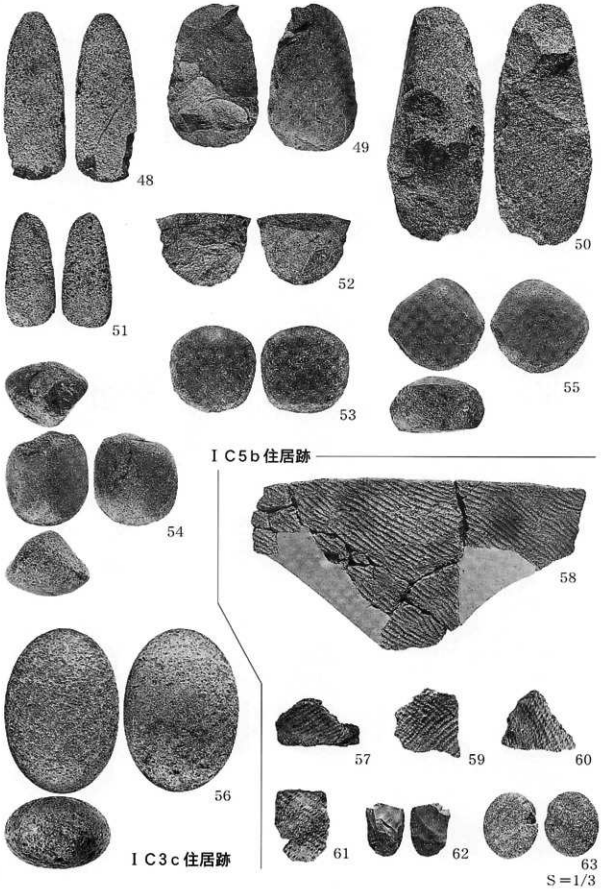


14･15…S=1/2
その他…S=1/3

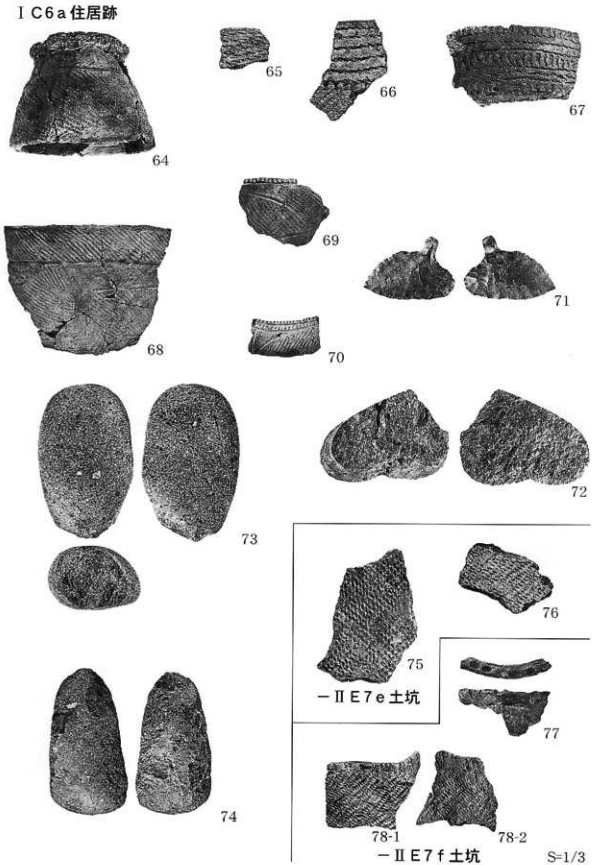
写真図版12　遺構内出土遺物（１）



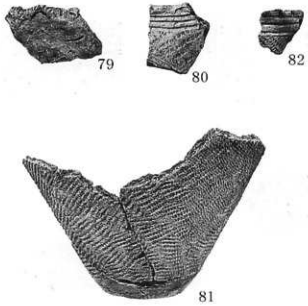
写真図版13　遺構内出土遺物（2）



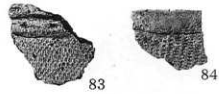
写真図版14　遺構内出土遺物（3）



写真図版15　遺構内出土遺物（4）



－ⅡE7ｆ土坑



－ⅠC6ｆ土坑

－ⅠC7ｅ①土坑

－ⅠC7ｅ③土坑

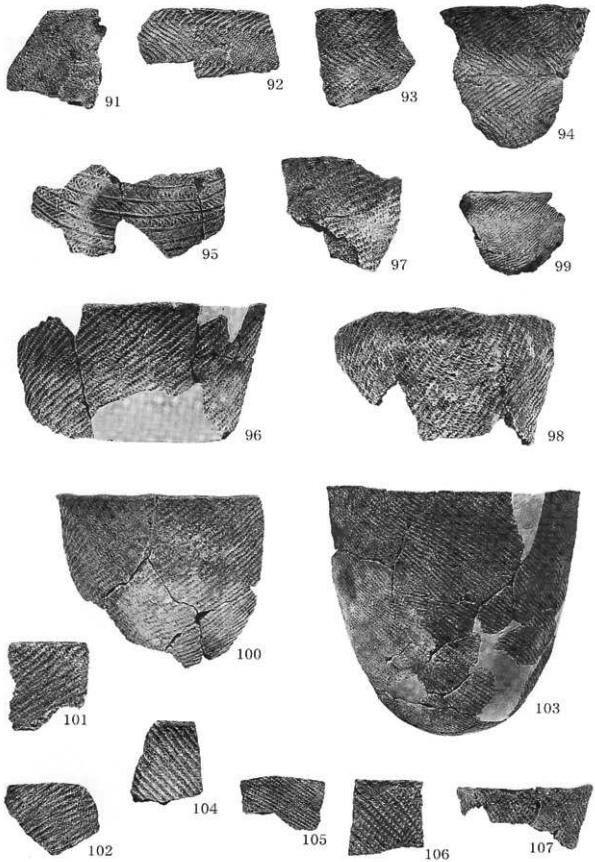
－ⅠC7ｆ②土坑

ⅠC5ｂ土坑

ⅠC2ｂ土坑

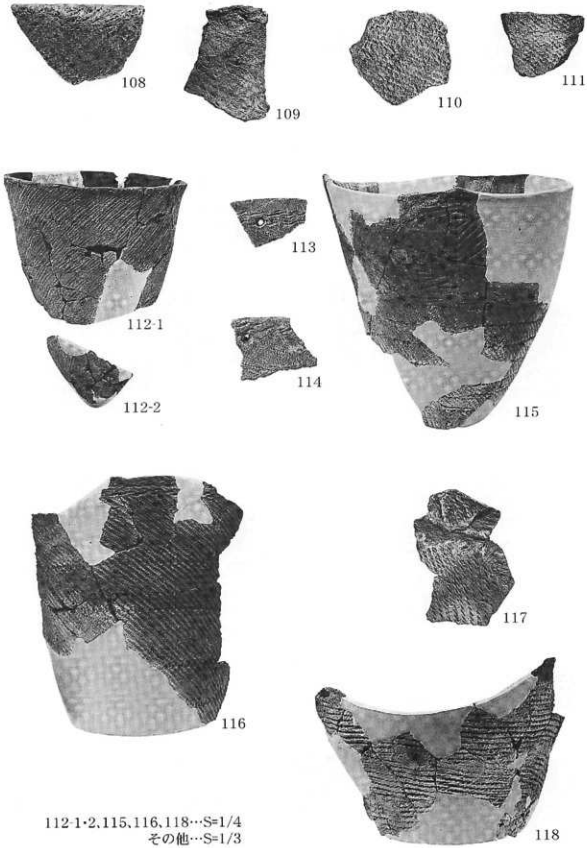
47…S=1/2
その他…S=1/3

写真図版16　遺構内出土遺物（5）



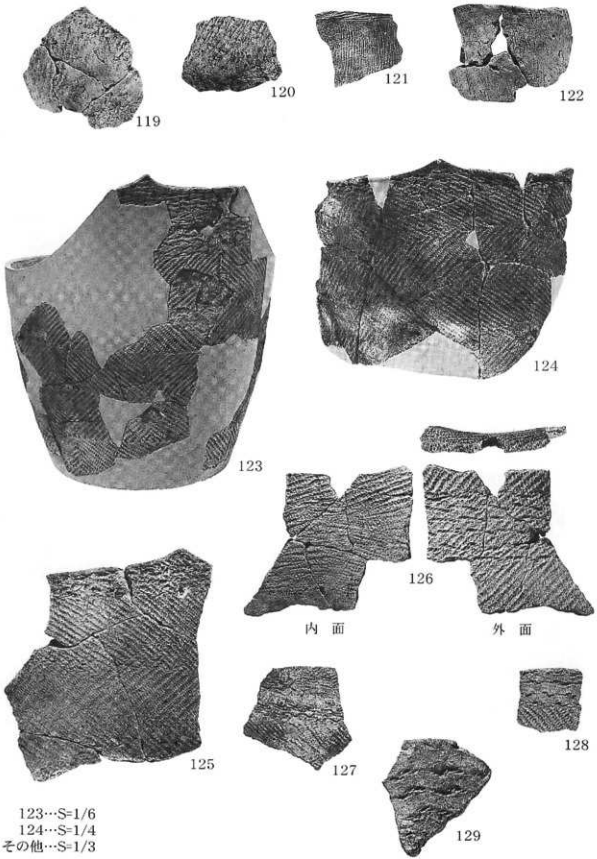
103…S=1/4
その他…S=1/3

写真図版17　遺構外出土遺物　土器（1）



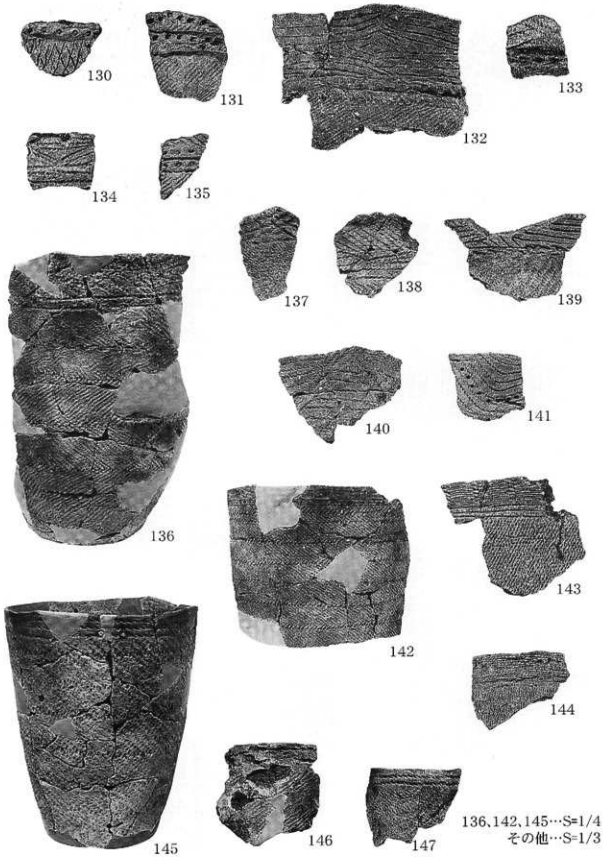
112-1・2、115、116、118…S=1/4
その他…S=1/3

写真図版18　遺構外出土遺物　土器（2）

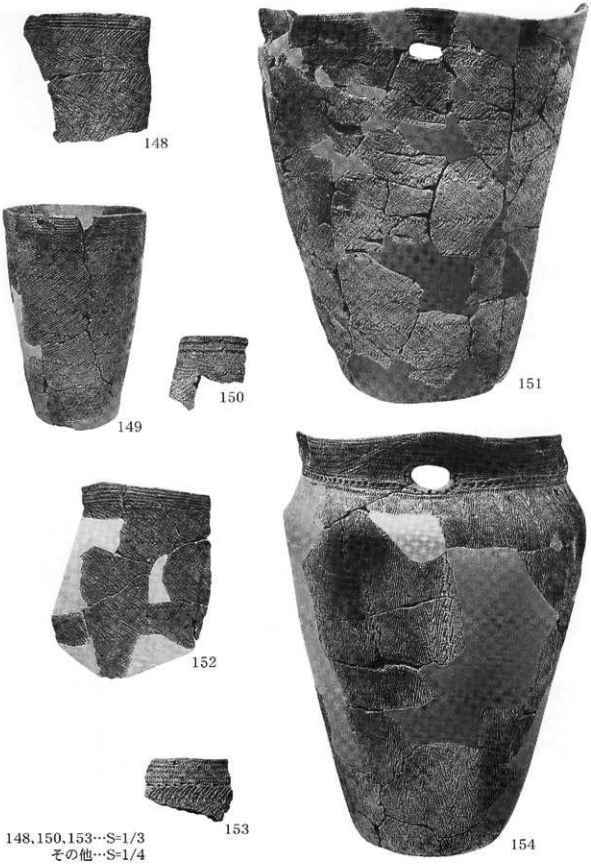


123…S=1/6
124…S=1/4
その他…S=1/3

写真図版19　遺構外出土遺物　土器（3）

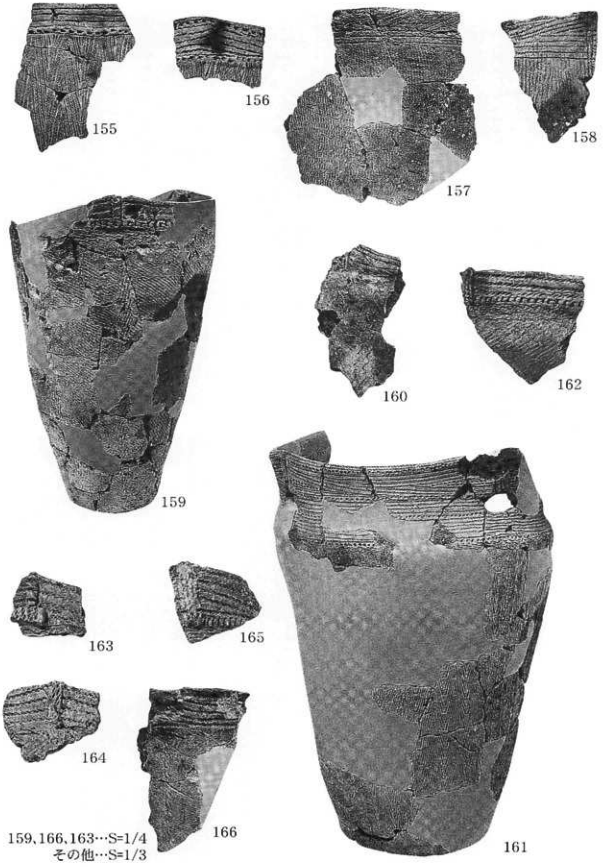


写真図版20　遺構外出土遺物　土器（4）

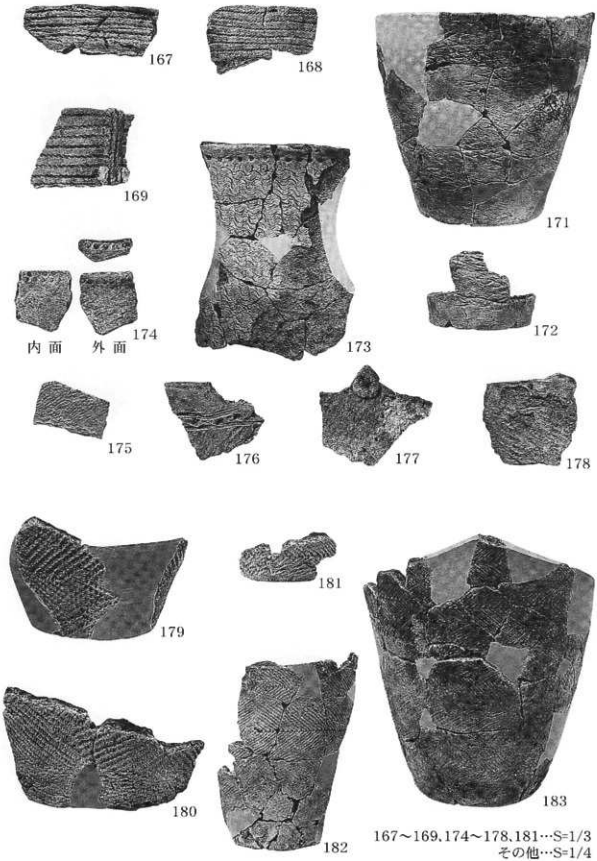


148、150、153…S=1/3
その他…S=1/4

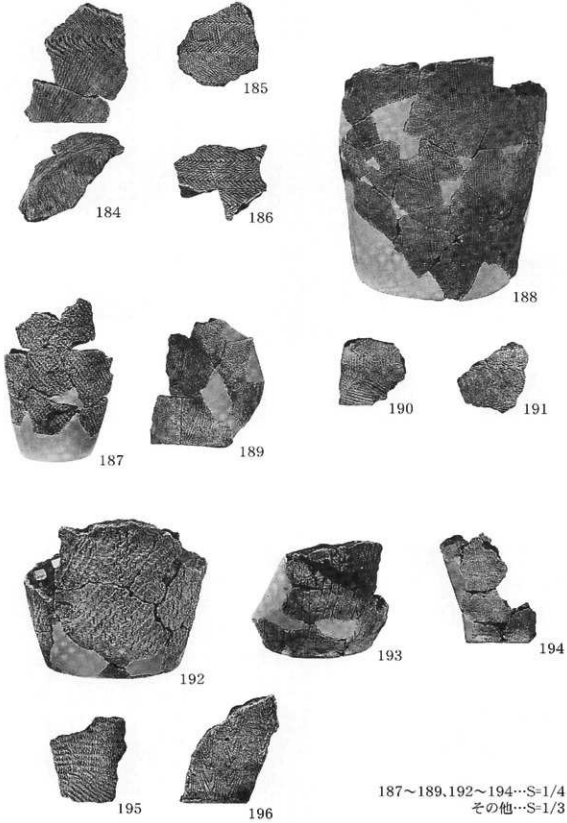
写真図版21　遺構外出土遺物　土器（5）



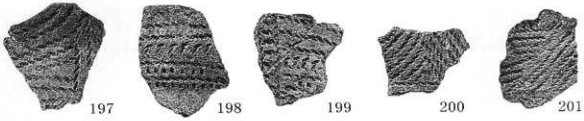
写真図版22　遺構外出土遺物　土器（6）



写真図版23　遺構外出土遺物　土器（7）

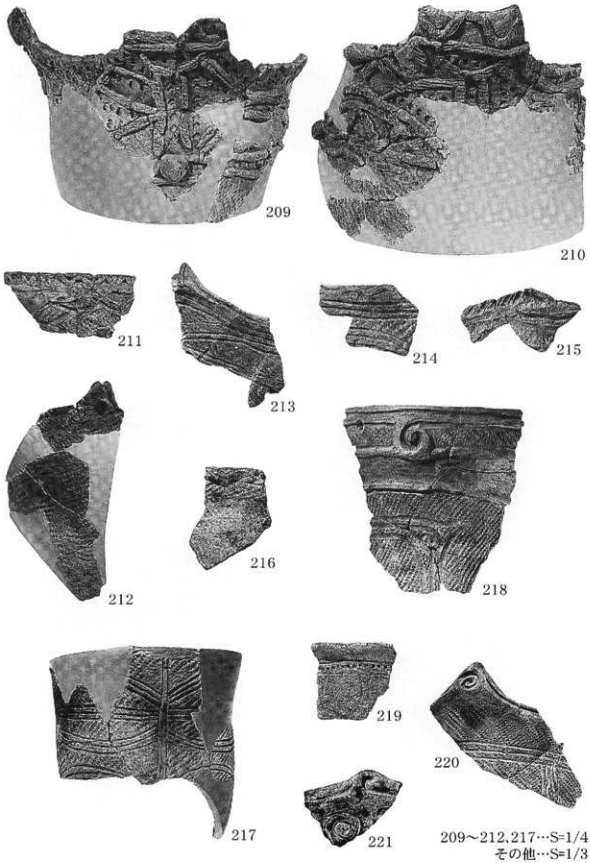


写真図版24　遺構外出土遺物　土器（8）



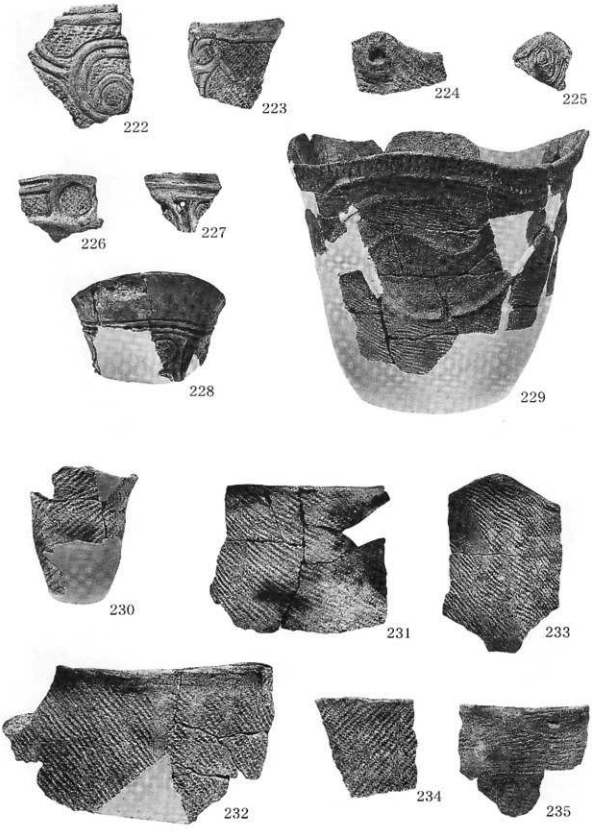
202、206、207…S=1/4
その他…S=1/3

写真図版25　遺構外出土遺物　土器（9）



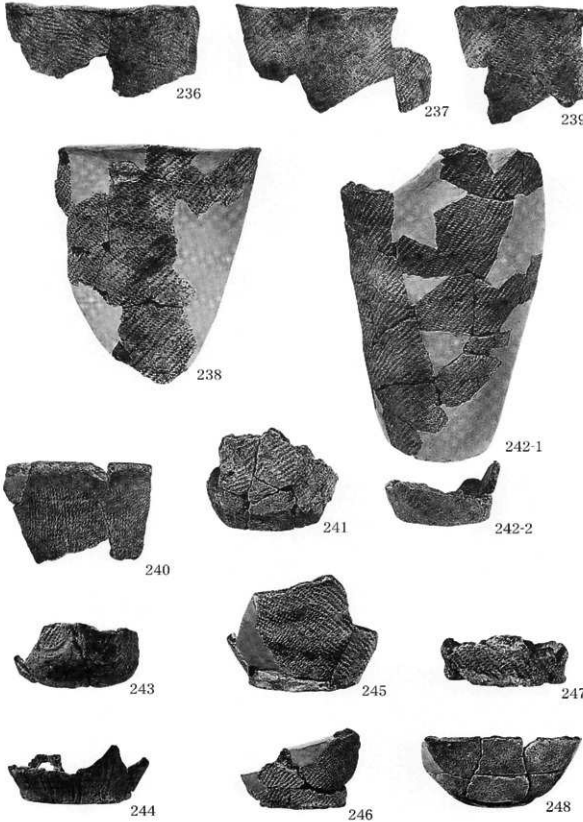
209～212,217…S=1/4
その他…S=1/3

写真図版26　遺構外出土遺物　土器（10）



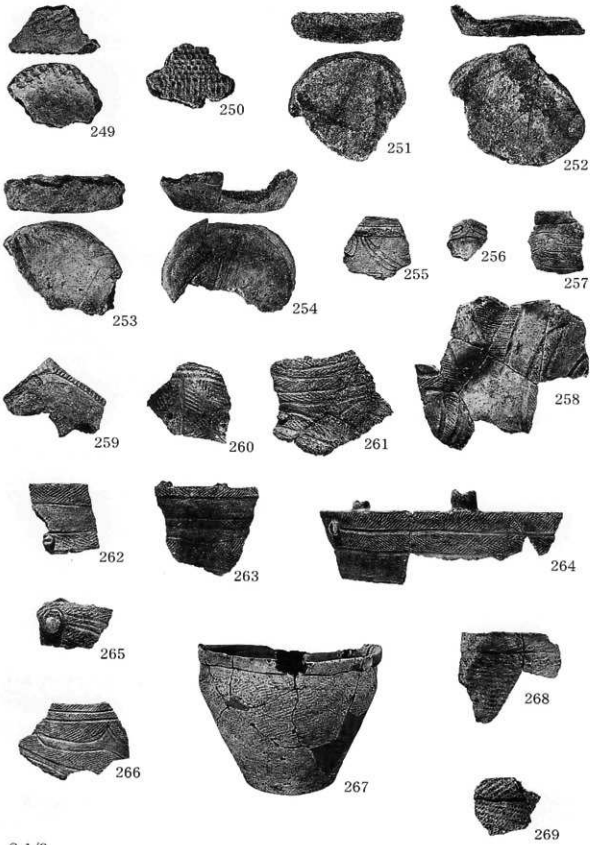
228～230…S=1/4
その他…S=1/3

写真図版27　遺構外出土遺物　土器（11）



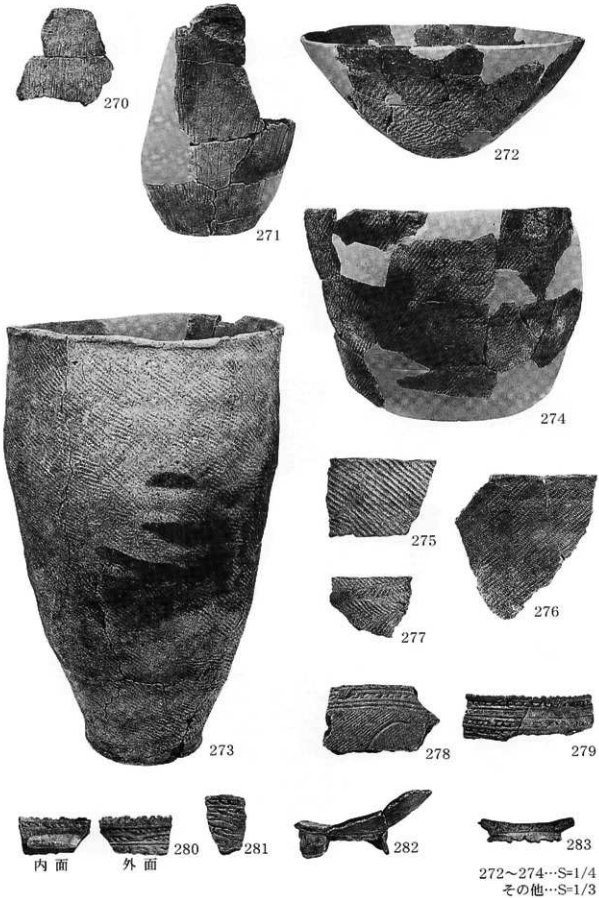
236、237、239、240、243、244、247…S=1/3
その他…S=1/4

写真図版28　遺構外出土遺物　土器（12）

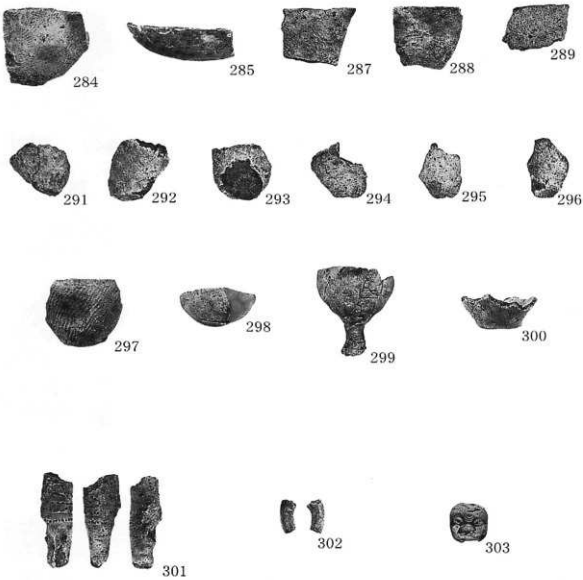


S=1/3

写真図版29　遺構外出土遺物　土器（13）

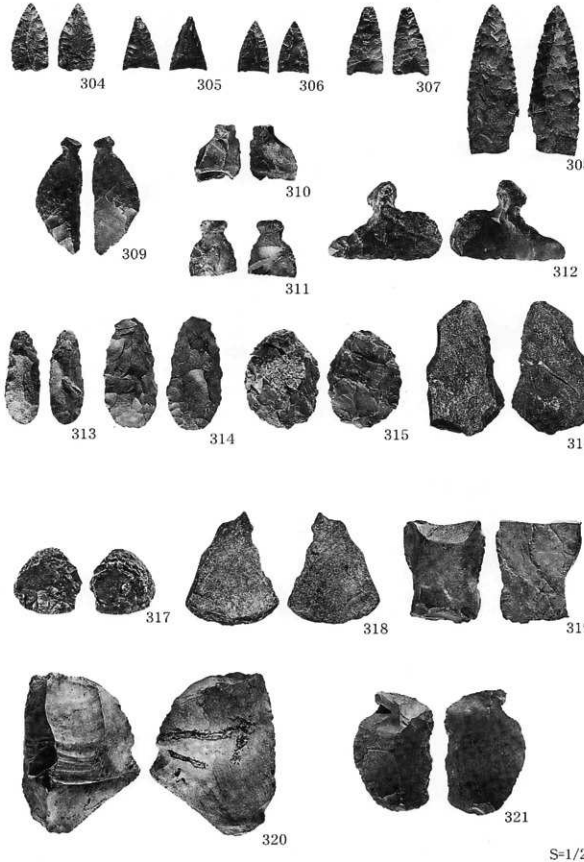


写真図版30　遺構外出土遺物　土器（14）

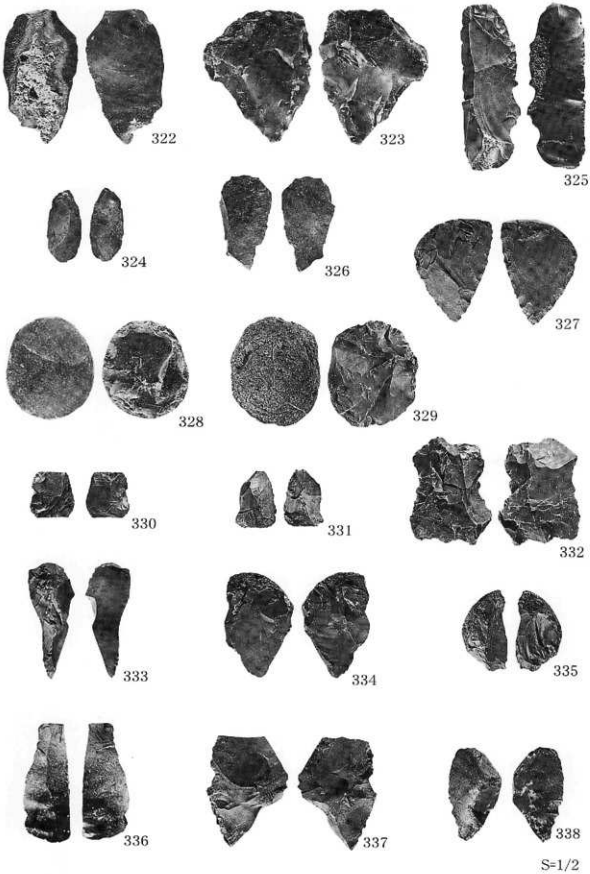


S=1/3

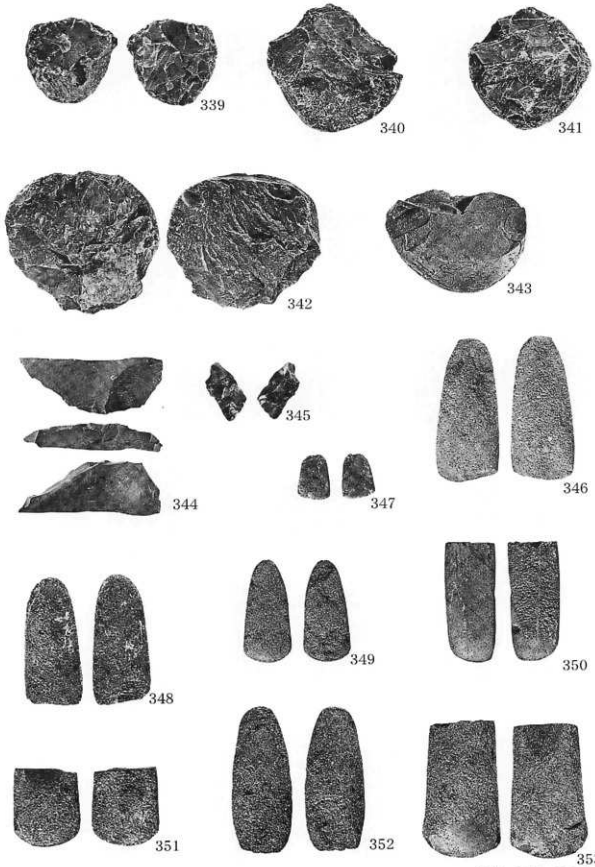
写真図版31　遺構外出土遺物　土器（15）・土製品



写真図版32　遺構外出土遺物　石器（1）

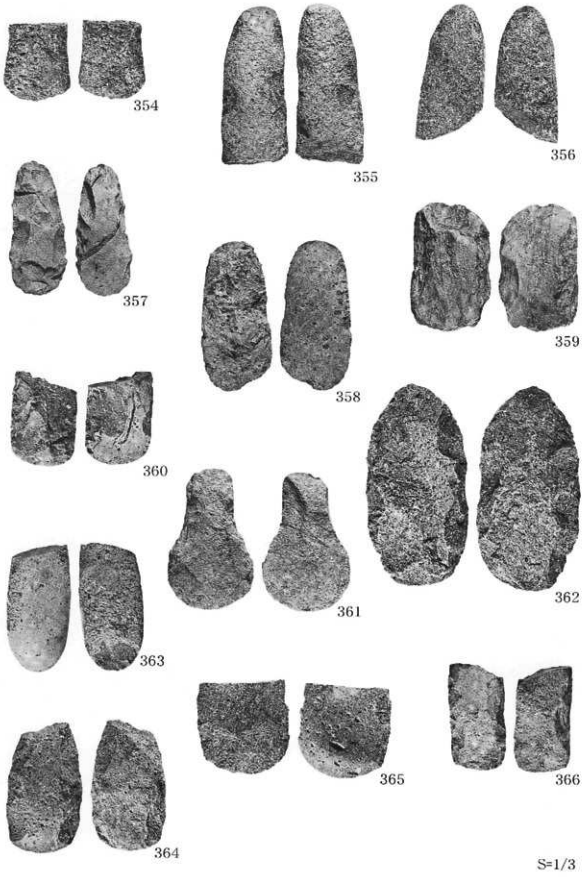


写真図版33　遺構外出土遺物　石器（2）

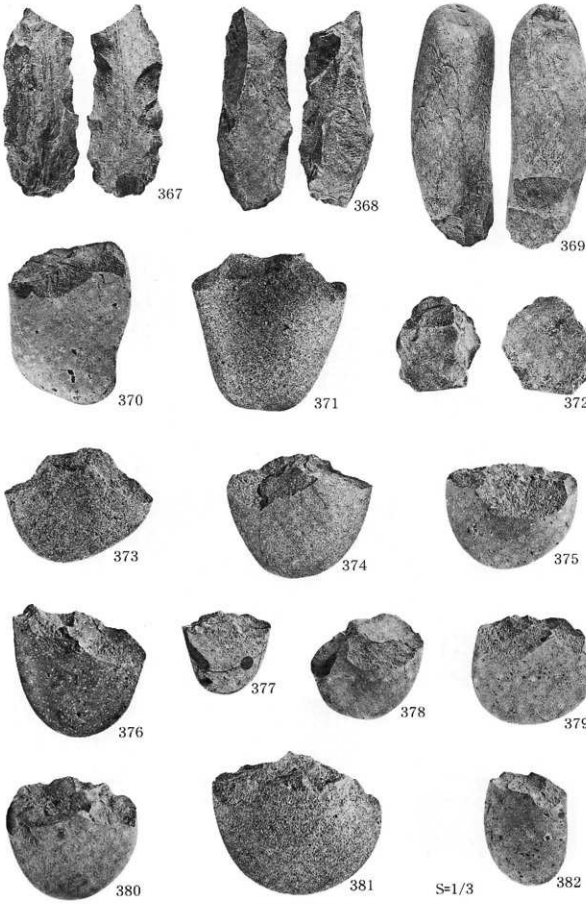


344、345…S=1/2
その他…S=1/3

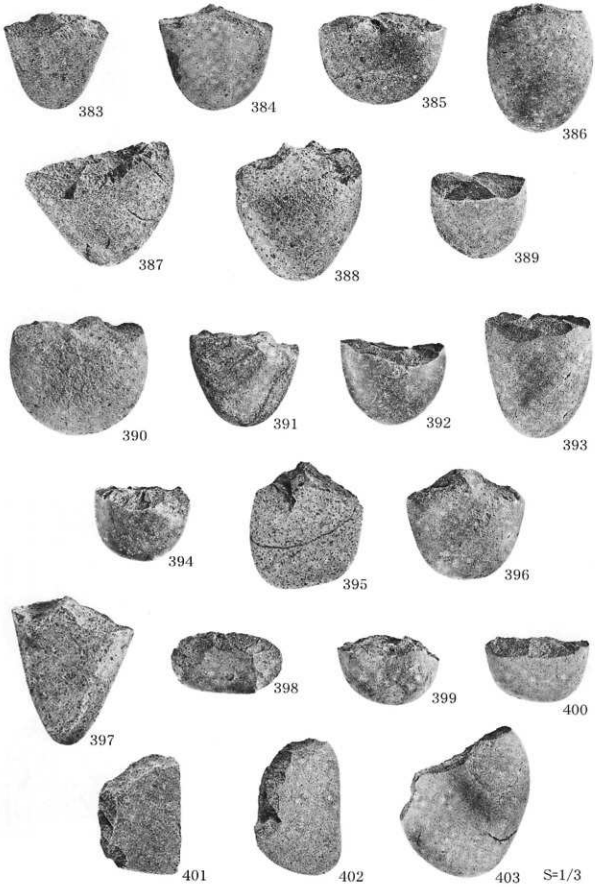
写真図版34　遺構外出土遺物　石器（3）



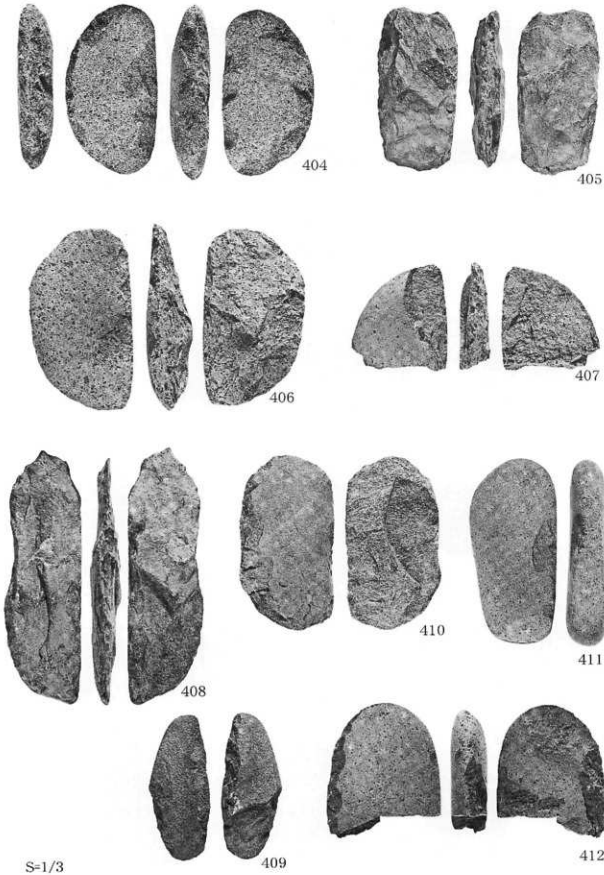
写真図版35　遺構外出土遺物　石器（4）



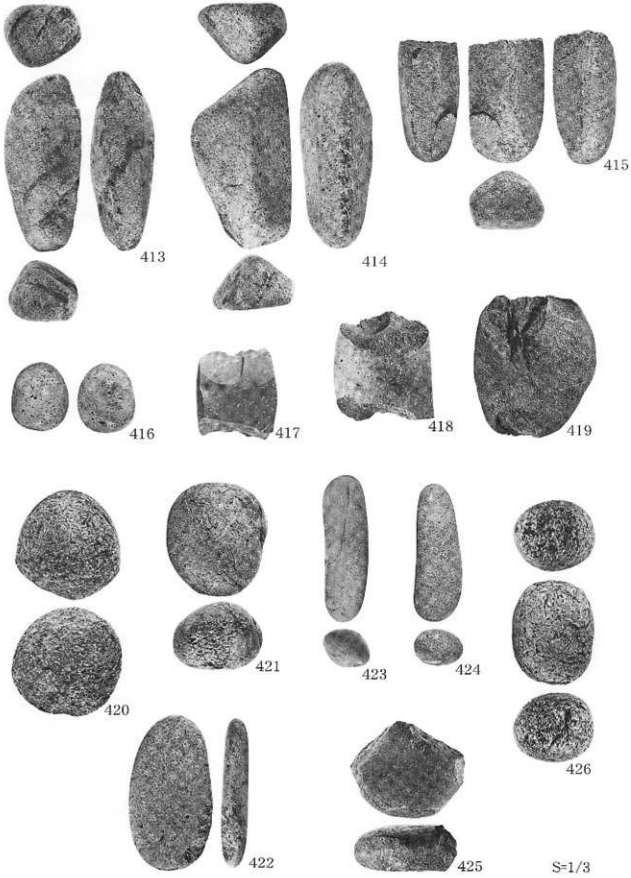
写真図版36　遺構外出土遺物　石器（5）



写真図版37　遺構外出土遺物　石器（6）

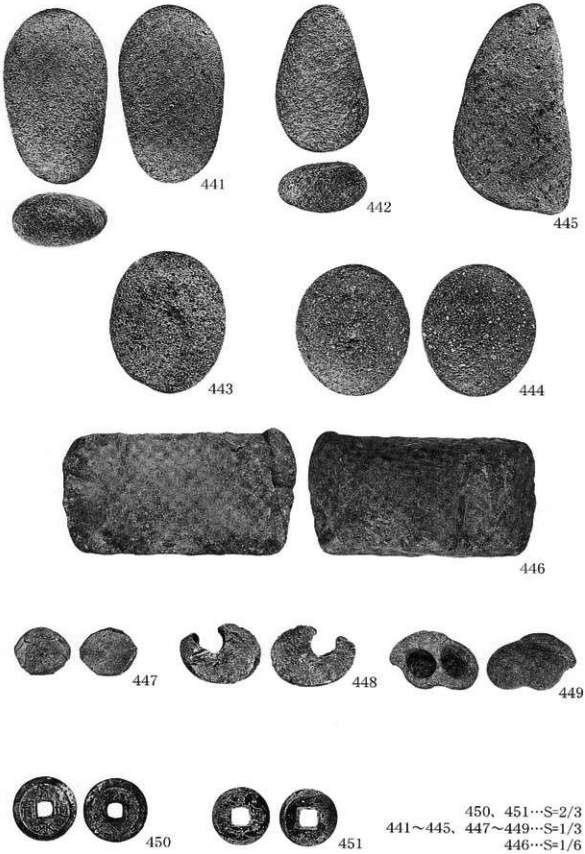


写真図版38　遺構外出土遺物　石器（7）



写真図版39　遺構外出土遺物　石器（8）

写真図版40　遺構外出土遺物　石器（9）



450、451…S=2/3
441～445、447～449…S=1/3
446…S=1/6

写真図版41　遺構外出土遺物　石器（10）・石製品・銭貨

報告書抄録

ふりがな	ごっそーいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	ゴッソー遺跡発掘調査報告書
副書名	一般県道明戸種市線改良事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第357集
編著者名	丸山浩治
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853 岩手県盛岡市下飯岡11－185 TEL (019) 638－9001
発行年月日	西暦 2001年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ごっそーいせき ゴッソー遺跡	いわてけんくのへぐん 岩手県九戸郡 たねいちまちだい　ち 種市町第18地 わきあざしょうごあい 割字小路合65 －1ほか	03502	IF58－0341	40° 23′ 53″	141° 43′ 03″	20000418～ 20000830	4,180㎡	一般県道明戸種市線改良に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ゴッソー遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 4棟 土坑 17基 柱穴状小土坑28基	縄文土器 (前～晩期) 石器	前期の土器が主体 石器中に占める礫器の割合が高い 遺物は斜面上部からの流れ込みである可能性大

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	伊藤民也
副所長	櫻田次男

〔管理課〕

課長	川浪清徳
課長補佐	山崎善光
主査	立花多加志
主事	日影睦夫

〔調査第一課〕

課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
主任文化財専門調査員	小山内透
文化財専門調査員	赤石登
〃	吉田充
〃	小原眞一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	鳥居達人
〃	金子昭彦
〃	東海林淳美
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	小野寺正之
〃	菅原靖男
〃	長村克稔
〃	溜浩二郎
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	北村忠昭
〃	丸山浩治
〃	村木敬
期限付専門職員	小林弘卓
〃	江藤敏
〃	藤原賢徳（6月退職）
〃	菊池賢
〃	井上信介
〃	川又晋
〃	吉田真由美
〃	北田博義（11月退職）

嘱託	千葉芳夫
〃	藤島恵子
〃	新田トヨ
〃	佐々木光重

〔調査第二課〕

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
主任文化財専門調査員	高橋義介
〃	金子佐知子
文化財専門調査員	中田迪
〃	工藤道孝
〃	古舘貞身
〃	阿部眞澄
〃	松尾芳幸
〃	工藤徹
〃	前田稔
〃	岩渕計
〃	早坂悟
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	千糞正彦
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	中村直美
〃	（星雅之）
期限付専門職員	鈴木聡（12月退職）
〃	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	鳥原弘征

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集

ゴッソー遺跡発掘調査報告書

一般県道明戸種市線改良事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成13年３月21日
発行　平成13年３月27日

発　行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒　020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
電　話　(019) 638－9001
ＦＡＸ　(019) 638－8563
印　刷　小松総合印刷株式会社
電　話　(019) 624－1374
ＦＡＸ　(019) 623－6719

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001